
ファイアーエンブレム烈火の剣

諒夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアーエンブレム烈火の剣

【Nコード】

N5646E

【作者名】

諒夏

【あらすじ】

軍師見習として大陸にきた少女、サラ。彼女が最初に出会ったのはサカ草原で暮らすリンという子。その子と共に旅立ったサラ。この先に待ち受けるものは・・・？

リンの章（前書き）

サカ草原で気がついた彼女…名前はサラ。

彼女は軍師見習をしており、この大陸を旅していると言う。

そのサラにサカ草原で育ったリンは興味を惹かれ…

リンの章

第一章：草原の少女

”サラッ！！”

落下する直前、私の意識は途絶えた。

その直前：誰かが私の名を呼んだような気がした。

―とても・・・大事な・・・誰かの声が・・・

『・・・気がついた？』

そう言って微笑んだ少女は私を見てホッとしたようだった。

『あなたは、草原の入り口に倒れていたのよ』

そう告げ、持っていたお椀を台の上に置いた。

椅子を持ってきて、そこに座ると私も起き上がった。

身体に痛みは少々あるものの、耐えられぬほどの痛さではなかった。

『私はリン。ロルカ族の娘。あなたは？あなたの名前を教えて』

そういわれ、名前だけを告げた。

「私はサラ。」

『サラっていうの？・・・不思議な響き。』

でも悪くないと思う。』

ありがとう・・・そうサラは告げ、差し出されたお椀を受け取り口に運ぶ。

牛の乳を温めたものだ。

” あったかい…”

二口口に含むと身体に浸透するのがわかる。

『それで…見たところ、あなたは旅人みたいだけど、このサカ草原には何しに？』

よかつたら話を…』

そう告げた時、リンが立ち上がった。

「どうかしたの？」

そういうサラに対し、それを制するリン。

『！』

『外が騒がしい…ちょっと見てくるから』

サラは、ここにいて！』

そういうとリンは外へ飛び出していった。

ただどすぐ戻ってきて慌てた様子で告げた。

『大変！ ベルンの山賊どもが山から下りてきたわ！』

また、近くの村を襲う気ね…、そうはさせない…！』

そういうと近くに立てかけてあった剣を手取る。

『あれくらいの人数なら私一人で追い払うわ！』

サラは、隠れて…』

そう言われてもな…私一人ってわけには行かないよな…

「私も行くわ」

『え！？一緒に来るって…』

あなた、何か武器が使えるの？』

武器…はないけど、知略はあるわよ。

「私、武器はないけど、軍師見習いだから…」

『…：そう。あなたは軍師の見習いなね。』

そう告げ、何かを考えるようなしぐさを見せるリン。

だがすぐに頷き、

『わかったわ。2人で行きましょう！』

サラはぐつとこぶしを握り、立ち上がる。

”この力はまだ必要ない……”

そう自分に言い聞かせて。

外に出るとリンのゲル先から山賊が見える。

『ここよ。じゃあ、サラ、横から戦いの指示を出して

あなたは私が守るから、私から離れないでね。』

まず第一にこの草原には障害となるものはないわね。

「ここなら正当方で攻めても平気そうね。」

『直進していいってこと？』

「ええ、地形に関しては問題ないし、トラップもないわ」

状況を判断するのが一番はじめの仕事。

『敵も私達に気づいたみたい。こっちに来るわ!』

敵が近づいてきて、リンも近づいていく。

相手は鉄の斧を所持しており、リンの持っている剣のほうがリーチは長い。

一匹目を撃破し、ゲルの近くまで近づいてく。

「リン。怪我してるわ」

道具袋から傷薬を取り出し、手当てをしてやる。

『あ……ありがとう、サラ』

「どういたしましてv」

『じゃあ、ゲルにいる奴をやっつけに行きましょう!』

フィールドを歩き、ゲルの前にいる緑色の鉢巻をつけた男の前に立ちはだかる。

『このバツタ様を舐めるなよ!』

そういった奴はかなりの破壊力を持つ男だった。

鉄の斧を所有しているから体制的にはリンが有利だ。

「リン、気をつけて」

「わかってるわ、サラ」

剣を構え、相手に向かって突進していくリン。

ダメージは与えられたものの、相手もすぐに反撃をしてくる。それによってリンにもダメージが与えられる。

「くっ!」

さっきの雑魚とは違い、相当のダメージを食らったらしい。

「リン!」

「!!!...こいつ、強い。」

次の一撃で...勝負が決まる。

サラ、もし私がやられたら...一人で逃げて約束よ!」

リンの真剣な目つきにサラは圧倒されつつ、

「...わかったわ...」

でも、その前に相手を私が殺してあげるわよ...リン。

サラはぐつと拳に力をこめた。

相手が動き出す。

それをすれすれで交わしたリンはすぐに反撃に出た。

「たあーーーーー!」

鉄の剣が舞い、相手に向かって斬り付けられる。

驚いた相手は防御する暇もなく、クリーンヒットを受けてしまう。

すぐに飛びのいたリンが目にしたのは、片膝を突いて倒れこむ盗賊バツタの姿。

『な、なに...!?!』

リンは剣を収め、息を一つ吐き出した。

「ふうっ…危なかった。相手が一人だと思って油断したわ。心配掛けてごめん。」

「たくさん戦って、もっと強くないとね。」

そう告げたリンは凜としていて…

「もっと誰にも負けないくらい強く…」

そういうと、リンは相手がいたゲルの状況を確認した。

幸いにも襲われてあまりたっていないかったせいか、ゲルにいた住人達は無事だった。

状況を確認し終えたリンはサラに向き直り、

「お疲れ様、サラ！」

「それじゃ家に帰りましょ」

またフィールドを歩いてリンのゲルへと戻った。

その日は2人とも疲れたのか、早めに就寝してしまったのだった。

翌朝、リンは起きてきたサラを見つけるとうれしそうに寄って来た。

「おはよう、サラ！」

「…おはよ。」

「やーね、寝ぼけてるの？」

そういつて笑うリンにサラは苦笑いを浮かべる。

「昨日の戦いで疲れた？」

あれぐらいでは疲れていないが、ここは頷いておいたほうがいいのかと首をかしげる。

するとリンは朝食の席でこんなことを言い出した。

「ね、サラ。ちょっと話があるんだけど。」

「ん？」

パンをほおばりながらリンを見ると真剣な表情でサラを見つめてい

る。

「サラは、軍師の修行でエレブ大陸中を旅してるのよね?」

「…ええ。」

「…私も、いつしよに行っちゃだめかな?」

「えっ?」

突然のリンの言葉に私は驚きを隠せない。

「駄目: かな?」

「でっでも: リンの家族の人は?」

サラの問いに寂しそうにリンは告げた。

「父も母も: 半年前に死んだわ。」

そうして遠くを見つめるように語りだした。

「私の部族: ロルカ族は本当は、もう存在しない。

山賊団に襲われ: かなりの数が死んでしまつて: …

部族はバラバラになつちやつた。」

そついつて苦笑いをもらす。

サラはそれを黙って聞いていた。

「私は: …父さんが族長だったこの部族を守りたかつたけど: …

こんな子供: …しかも女に: …誰もついてこなかつた。」

そついうとリンはサラの視線に気づいたのか苦笑いを浮かべた。

「えへへ: …ゴメン。ずっと一人だったから: …」

そつ言つたリンの瞳からは涙があふれ出ていた。

それを拭うリン。

「うーん、ダメだ。もう泣かないつて決めたのに: …」

そつ告げて涙を拭うリンの頭を抱きしめるサラ。

「サラ?」

「泣いていいよ。辛かつたんだね」

「…アリガト: …少し: …だけ: …」

腕の中で泣くリンを優しく抱きしめ、髪を撫でるサラ。

数分立つと泣き止んだリンはとても気恥ずかしそうにサラに向き直る。

「ありがと。大丈夫、落ち着いた。」

サラ、私、父さん達の仇を討つためにも強くなりたいの！

昨日、サラといっしょに戦ってわかった。

一人でここにいっても強くなてなれない…

だからね、サラ。私と一緒に修行しない？」

「うん、よろしくね。リン」

「いいの！？ありがと！すごく、うれしい！！」

満面の笑みを浮かべるリンにサラも笑顔を返す。

「ぜったい一人より、2人のほうが心強いって思ってたの。」

あなたは一人前の軍師！私は一人前の剣士！！がんばろう！ね？」

手を差し伸べてくるリンの手を取ったサラ。

「じゃあ、ブルガルに行こうよ！」

「ブルガル？」

「うん、旅の支度に必要なものを買い揃えなきゃいけないでしょ？」

サカの交易都市がブルガルが近いから。」

行こう、サラ。

そう微笑んだリンにつられるまま、サラはその手を取ったのだった。

リンの章（後書き）

この先どんどん変わっていきます。
リンとサラの友情や仲間達との協力。
さあ、どうでしょう？

運命の足音（前書き）

旅立つ前に二人が立ち寄った町で彼女達は運命に出会う。

運命の足音

第一章ノ式『運命の足音』

ブルガルについたリンとサラ。

「サラ！こつちよ。」

着いた所は交易の町と言われるに相応しい町並みが印象的の場所だった。

レンガ作りの家があり、白壁にヨーロッパ特有のデザインが模様された家々が立ち並ぶ街。

「ここが、サカで一番大きな街、

旅に必要な物をそろえましょう。」

リンも久しぶりなのだろうか、年頃の女の子に戻っているように回りたいらしい。

「サラ、道具屋と武器屋行こう。」

ふと角を曲がろうとしたその時、

『おお！これはっ！！

なんて華やかなんだっ！』

声が聞こえ、振り向くと一見見た目は騎士風の鎧を身に纏い、茶髪にこげ茶色のバンダナを纏った青年が数歩後ろに立ち尽くし二人を見ていた。

「？」

「リン？知り合い？」

リンは首を振る。

危ない奴かと思ひ立ち去ろうとする二人にその青年は慌てる。

『待って下さい！』

美しいお嬢さん達！よろしければ、お名前を！
そして、お茶でもいかがですか？』

「…あなた、何処の騎士？」

呆れ顔のリンにその騎士風の青年は誇らしげな表情をした。^{かお}

『よくぞ聞いてくださいました！』

俺は、リキアの者。

もつとも情熱的な男が住むといわれるキアラン地方出身です！』

「もつとも馬鹿な男が」の間違いじゃないの？」

リンの言葉に笑いそうになるのを必死にこらえるサラ。

だがその言葉に青年は泣きマネをし、

『うつ…、冷たいあなたも素敵だ』

そういつて近づいてこようとする。

だがリンは名のごとく凜とし、サラの手を引くと、

「行きましょ、サラ。」

相手してらんないわ。」

歩くリンに頷いた。

そして青年に首だけで失礼すると合図をする。

『あ！待って…』

行こうとする青年を止めた赤い鎧の男。

『セイン！』

いいかげんにしないかつ！！』

その表情から怒っていることは一目瞭然。

『おお、ケント！我が相棒よ！！』

どうした、そんな怖い顔で。』

『貴様が真面目にしていれば、もつと普通の顔をしている！』

セイン！ 我々の任務はまだ終わってないのだぞ！！」

「わかってるさ。だが、美しい女性方を前にして、声を掛けないのは礼儀に反するだろ？」

「なんの礼儀だ！」

セインと呼ばれた青年に拳骨を食らわすケント。

「あのっ！」

どうでもいいけど、道をあけて。」

その声に振り向くケントとセイン

「馬が邪魔で通れないわ。」

リンの言葉にケントが申し訳なさそうに詫びる。

「すまない、すぐに……」

ケントの丁寧な応対にリンは微笑む。

「ありがとう。あなたは、まともみたいね。」

ね、サラ。

そういつて後ろにいたサラにも言葉を掛ける。

サラも頷いた。

「……！」

だが、ケントの様子がさっきとは違ってきた。まるで驚いたように……

「失礼だが……君とは、どこかで逢った気が……」

「え？」

ケントの言葉に驚いたのはリン。

だがそれを不服としたのはセインだった。

「おい！ずるいぞ、ケント！」

俺が先に声を掛けたんだぞ……！」

セインの言葉に気を悪くしたリンはサラの手をつかんだ。

「……！」

リキア騎士には口クなヤツがないのね！

行きましょ、サラ！気分が悪いわ」

そう告げるとリンはサラを連れてとことこと歩き出した。

一方残されたケントは2人の後姿に向かって叫んだ。

『待ってくれ！違うんだ…！』

だが2人は聞く耳持たないのか先へ先へと歩き出していつてしまう。

『…セイン…貴様…！』

鬼のような表情でセインを睨みつけるケント

だが、打って変わってセインはきよんとしている。

『え？ちがうのか？お前も、てつきり…！』

そんなセインの様子に怒鳴るケント。

『貴様といっしょにするな！』

それよりも、今の娘を追うぞ、彼女は多分…』

ケントの言葉にセインは瞳を見開く。

『まさか…俺達の”任務”か！？』

ウソだろ？おいっ…！』

慌てて2人の騎士は馬に跨り、2人の後を追う。

リン達は町外れの草原にいた。

「…走って！誰か追ってくる…！」

「さっきの騎士達？」

「うっん、違うわ。殺気がすごいもの！」

そついつてサラを後ろ手に隠したリンは剣の鞘に手を掛ける。

「……」

現れた相手はならず者だった。

『ぐへっ、ぐへへ…カワイイじゃない！』

あんだ、リンデイスってんだろっ？』

ならず者の言葉にリンの表情が変わる。

「！……何者！？」

だが、それには答えず、ならず者は気持ちの悪い笑みを浮かべ、リンとサラを見つめる。

「……もったいねー。」

まったく勿体ねーが……これも金のためだ。
消えてもらうぜっ！！」

そういうとならず者は口笛を一つ吹いた。

『出て来い！野郎どもっ！！』

合図と共に大勢の手下どもが顔をのぞかせた。

「！これだけの人数、私一人では……

でも……やるしかない！」

剣に手を掛け、鞘から抜くと構えた。

一触即発の雰囲気の中、リンの後方からまたあの声が聞こえた。

『あー……っ！み、見つけたっ！！』

その声にリンとサラは目を見開き、眉間にしわを寄せる。

ならず者は驚いた様子を見せ、機嫌悪そうな表情を見せる。

「ハアッハア……お、追いついた……」

汗を流しつつ、セインが荒く息をつく。

だが、後ろにいるならず者を見、ドスの聞いた声が変わる。

「こら！ そのヤツら……」

この方に、なんの用だっ……

女の子相手に、この人数は卑怯だぞっ……

怒るセインに呆れ顔のリン。

「あなたたち、さっきの！」

リンは言葉には出さないが『何しに来たの』と号外に言っていた。

だが、それを遮ったのはケントだった。

「お話は後で。」

……この者たちは、どうやらあなたに危害を加えるつもりらしい。だつたら、我らが相手しよう。」

ケントは後ろ手にリンを庇い、剣に手を掛ける。

「あ、下がっててください！」

パパツと片付けますから。」

それに不服としたリンは2人を押しのける。

「いやよ！私が受けた戦いだわ、勝手なことをしないで！」

強情なリンに驚いた二人。

「えーっ…そんなことを言われても、困るんですけど。」

セインの落胆した顔にケントは譲歩した。

「…わかりました。」

あなたが指示を出して下さい。

私は、リキア騎士のケント。連れの男は、セイン。

我らは、あなたの指揮に従った戦いをします。

それで構いませんか？」

だから、我らも参加させてください。

ケインの無言の言霊にリンは息を一つ吐き、傍にいたサラを見る。

サラが頷くと2人にリンは告げた。

「…いいわ。指揮は私と、このサラが、とる。行くわよ！！」

「サラ、この状況…どう…」
見る？

そうリンが告げようとするとその間を走り抜けてサラの手を取る。

「美しい貴方！サラさんとおっしゃるのですね？」

リキア騎士の力、お見せしましょう！まずは俺から攻撃させてください！」

困ったような表情のサラは頷いた。

「では、攻撃します」
槍を構え、敵に向かって馬を駆け出していく。

攻撃を仕掛けたのはいいが、相手にダメージは与えられず、逆に反撃を食ってしまった。

「ゲッ！は、はずしたっ！」

驚くセインにケントが怒気を飛ばす。

「セイン！」

なぜ、剣で攻撃しないんだっ！？」

ケントの言葉にセインは普通の顔をし、

「槍のほうが豪快でカッコよく見えるだろ？」と。

その答えに呆れ顔のケント。

「…呆れたやつだな。」

戦場で、緊張感を保てなくば、いつか命取りになるぞ！」

ケントの言葉に恥ずかしそうにセインが告げた。

「いや実は、剣を買い忘れたのが本当の理由なんだけどな。」

「女性に声を掛けるので忙しかったからか？」

怒気がさつきより強く含まれていて、セインは慌てた。

「怒るなよ！俺の腕なら槍だけでもなんとかなるって」

「…そんな言い草信用できるか！予備の剣を渡しておく。次はこれを使え。」

相方の心遣いに驚くセイン。

「お、いいのか？助かったぞ、ケント！」

表情がころころ変わる相方にため息をつく。

「…いつもながら世話の焼ける奴め。」

そう呟いたケント。

ホントはすごく世話好きなのかもしれない。

「サラ殿！」

仲間の失敗は、私が取り戻します。

どうか私、ケントに攻撃させてください」

ケントの言葉に頷いたサラ。

「ご指示を」

「では、ケント殿、剣で攻撃お願いします」

「了解しました。サラ殿」

ならず者は鉄の斧を所持している様子。

ならば鉄の剣で勝てる。

ケントでHPを削り、リンがとどめをさした。

2人に手柄を横取りされたセインは不服そう。

「サラさん！

俺に、もう一度チャンスをくださいっ！」

そついうと敵に近づいていく。

だが…

「うわっ！」

「セイン！大丈夫かつ！？」

寸前で敵の攻撃をよけたセインにケントが声を掛ける。

「あ、ああ。…：なんとか避けた。

剣で戦ったのに、避けられるなんて冗談じゃないぞ」

愚痴りモードのセインにケントが呆れた顔をした。

「よく見てみる。敵は森に隠れている。

枝が邪魔になって攻撃がしにくいだろう？」

周りが見えていなかったセインは今気づいたらしい。

「確かに、攻撃することに気がいつてて、うっかりしてたな。」

「…：その、うっかりが命取りだと何度言えば…：」

何度となく同じ事を繰り返しているセインにいい加減腹がたつていたのだろう。

ケントが切れかけていた。

「わー！わかつてる。

わかつてるって、ケント君っ！！」

慌てて取り繕うとしているセインにケントはきつい言葉を投げかける。

「わかったのなら行動で示せ。」

怒られてしゅんとしたセインはため息を吐いた。

「……ケントのやつ、神経質だよなあ。

……………老けるぞ。」

「サラ…この地形…難しいわね」

「ええ…でも、逆に地形を利用すれば戦いやすいつてことにもなるわ」

「どういうこと？」

リンはサラの言葉に興味があるらしい。

「森と平地なら、森で戦うと敵からの攻撃はあたりにくくなる。ということは平地以上に敵に対して森で戦えばこちらが有利になるわ。」

その逆もしかり…だけどね」

「なるほど、気をつけなきゃいけないね」

「サラ、軍の指揮はまかせたわ」

まだまだ勉強不足ね。私。

そついうリンにサラは苦笑いを浮かべた。

ならず者のボス、ズクを倒した4人だったが…

ならず者は倒れ行く直前、

『小娘一人って話じゃ…なかったのかよお…グフッ』

「……これで敵は全滅！」

「やっ たわね、サラ！」

微笑んで手を叩こうとするのに気づき、手を合わせた。
パチンツと音がし、微笑む2人。

だが、その後ろからそんな2人を見守る騎士達。

リンが2人を見、言葉をつむぐ。

「それで… リキア騎士のお2人さん。

話を聞かせてもらえるんだっ たわね？」

リンの言葉にケントが答えた。

「はい。

我らは、リキアのキアラン領より人を訪ねて参りました。」

「リキア… 西南の山を越えたところにある国ね？」

リンの言葉に頷くケント。

「そうです。16年前に遊牧民族の青年と駆け落ちしたマデリン様
への使者として。」

ケントの言葉に首をかしげるリン。

” そんな人いたかな〜と ”

「… マデリン？」

「我らが主人、キアラン侯爵のたった一人のご令嬢です。

ずっと消息が知れず、侯爵も、もう娘はいないものとあきらめて
おられました。」

ケントの言葉をセインが続ける。

「しかし、今年になって初めてマデリン様より便りが届いたのです！

” サカの草原で、親子3人幸せに暮らしている ”

その事に、侯爵はとても喜ばれ、自分には” 15になる孫娘がい
る ”

” 知らぬ間に、おじいちゃんになっていたようだ ” と、それは、
幸せそうな顔で

発表なさいました。孫につけられたという名前は、リンデイス 侯爵が、早く

に亡くされた奥方様の

お名前だったのです。」

「リンデイス…」

セインの言葉にリンは俯き加減になる。

「娘夫婦の思いやりに、頑なだった心も、とかされたのでしょうか。」

「なんとか、ひと目なり娘達に逢いたいと願われ、我らがここに来たんですが…」

マデリン様は、手紙を出した直後、亡くなられていて…」

セインはため息を一つ漏らした。

「そのことを、数日前に到着したこのブルガルで知りました。」

「…ですが希望は残されていました。娘は生き延びたということです。」

一人で草原に残り、暮らしていると…。私は…すぐにわかりました。

あなたこそ、リンデイス様だと。」

ケントの確信にリンは冷めた様子で問う。

「…どうしてそう思うの？」

「…あなたは、亡き母上にとてもよく似ておられる」

「！母さんを知ってたの？」

「直接、お目にかかったことはありませんが、キアランの城で絵姿を何度も拝見しました」

そのケントの言葉にリンは静かに話し始めた。

「部族での私の呼び名はリン…」

でも父さんも母さんも家族3人の時は、私を《リンデイス》って呼んでたわ」

そういうと2人の騎士に視線を合わせた。

「なんか、ヘンな感じ。」

もう一人ぼっちだと思ってたのに、おじいちゃんが…いるんだ。
《リンデイス》…って呼ばれること、もうないって思ってた・

…」

その言葉にケントは言葉を掛けられなかった。

だが、すぐに思い直した。

「違うわ！さっきのヤツも、私を《リンデイス》って呼んだわ！！」

「！？まさか…」

ケントも何かに気づいたらしい。

「ラングレン殿の手の者…だよな？」

セインの言葉にリンは首をかしげる。

「ラングレン？誰？」

「キアララン侯爵の弟君です。」

マデリン様は、戻らないものと誰もが思っておりましたので、
その場合は、ラングレン殿が次の爵位を継ぐはずでした。」

ケントの言葉をセインが継ぎ足す。

「つまり、あなたの大叔父上はあなたに生きておられると困るって
ことなんです。」

「そんな…だって私、爵位になんて興味ないわ！」

リンの台詞に騎士2人は首を横に振る。

「残念ながら…そんなことが通じる相手じゃないんです。」

これから先も、リンデイス様のお命を執拗しつように狙いつづけるでしょ
うね」

セインの言葉にリンは戸惑う。

「…どうすればいいの？」

「我らとともに、キアランへ。」

このままでは危険です…」

ケントがそう告げるとリンは首を一つ縦に振る。

「・・・それしかないわね。
わかった、キアランへ行く」

リンの言葉にケントとセインはやわらかく微笑み合った。

その夜：リンは布団の中から隣にいるサラに声を掛けた。

「サラ・・・起きてる？」

布団から起き上がる気配にサラも起き上がる。

「うん、眠れないの？」

「あのね、サラ、ごめんね。おかしいことになっちゃって。」

リンも今日、急に色々あったのだ、神経をやんでいないわけではない。

「気にしないでいいよ」

「サラは、どうする？」

あなたの好きにしているのよ？

そりゃ、私は一緒に来てくれると心強いけど・・・」

すごく危険みたいだから・・・

そっいつて心配そうにしている。

「私も行くよ。軍師の才を生かすには格好でしょ？」

そっいつて微笑んでやるとリンの顔から不安が消えた。

「いいの？本当に！？」

ありがとう！・・・あらためてこれからよろしくね！」

「うん、こちらこそ。よろしく。」

「明日も早いし、苦戦を強いられそうだもん。早く寝ようっ？」

リンの言葉にサラは微笑んだ。

「ねえ、サラ・・・」

「ん？」

布団にもぐりこもったサラにリンがおずおずとした様子を見せる。

「どうしたの？リン・・・？」

「手・・・握って寝てもいい？」

リンにしてはめずらしくおどおどとした様子。

「それだけ今日の事実はリンに精神的圧力をかけたという事か・・・

サラはそう想い、リンの手をしっかりと握る。

「私もつなぎたかったの・・・」

「サラ・・・」

クスクスと忍び笑いをし、リンとサラは手を中央で交わし、そのまま寝転ぶ。

「お休み・・・サラ」

「お休み・・・リン」

そして・・・夜が明ける。

運命の足音（後書き）

運命に立ち向かおうとするリンが好きです。
ただちょっとサラに変化が…

精霊の剣（前書き）

リンが寄りたいといった祠にあるのは精霊の剣といわれるもので…

精霊の剣

第2章 『精霊の剣』

ブルガルの街のはずれに、小さな祭壇がある。
精霊が宿するというその場所は、古来よりサカ族の聖地とされていた。
一行は旅の安全を祈るため、そこへ立ち寄ることにする。
大いなる何かに導かれるように…

「サラ、ちょっとだけ寄り道させてね。

東にある祭壇には、宝剣が祭られてるの。

サカの民が長い旅に出る時には、ここで無事を祈っていくのよ。」

リンの言葉を聞いていたセインが興味ありそうに近づいていく。

「ほほう、それは興味深い。」

セインの言葉にケントも興味があるようだ。

「エレブ大陸で信徒が一番多いのはエリミーヌ教ですが、

この地では、太古の慣わしが受け継がれているんですね。」

そう告げるケントにリンとセインは微笑んでいたが…

「サラ？」

一人、祭壇のある寺院を見つめるサラに近づいていく。

「サラ殿、どうかされましたか？」

ケントの言葉にサラははっとした表情を見せる。

「サラ？大丈夫？」

心配そうに見つめるリンにサラは首を横に振る。

「うん、ごめん。ぼーとしてた」

「そう？具合悪かったら言ってたね」

「うん、ごめん」

「サラ殿…あまりご無理をなされないよう」

「ごめんなさい…ケントさん。」

「大丈夫ですか？」

「ええ…すみません」

セインも心配していた。

だが、サラは祭壇をじっと見つめていた。

”マーニ・カティ…あの剣がリンを選ぶのを見届けなくちゃね。”

だが、祭壇に向かおうとしたリン達の前に、村人が助けを求めてきたのだ。

祭壇がこのあたりでは有名なならず者達によって占拠された。

祭司様を助けてほしいと。

その村人達の助けを無碍にも出来ず、祭壇を取り戻すためにリン達は戦う。

「サラ、入り口はあっただけ、通り抜け出来ないわ」

祭壇の下付近に入り口があるが、高い山々があり、通り抜けることは困難だった。

「あそこに壁の割れ目があるわ。あそこを壊せば…」

祭壇横にある壁の割れ目、そこは少し攻撃を加えれば壊れそう。

「了解。セイン、ケント、奴らをひきつけておける？」

「お任せを」

「やってみせます」

「頼むわ、サラ、詳しくお願い」

「わかったわ」

サラの狙いどおり、2人がならず者達を蹴散らしている間にリンはその壁を壊した。

壊した壁の後には道が出来、縦に並べば人一人通れるぐらいの広さがある。

「サラ、一気に攻めるわよ」

「ええ、敵は少人数、でも気をぬかないようにね」

「わかってるわ」

来たことのあるリンはすばやく敵を倒し、祭壇を陣取っていたグラスというならず者を撃破。

祭壇を制圧した。

遅れてやってきたセインとケントもならず者達を一掃したらしい。奥の扉に閉じ込められていた祭司を難なく助けたのだった。

『おお、そなたは確か、ロルカ族の……』

リンを見るなり優しい表情でそう告げた司祭。

「族長の娘、リンです。」

祭司様、お怪我は？」

『うむ。そなたたちのおかげで大事にならんですんだ。礼をいうぞ。』

「では、剣も無事なのですね？」
そついうと祭司は頷いた。

『ああ。この剣は、わしが封印しておるからな。

封印を解かぬ限り、この剣を抜くことは出来んよ。

さ、礼とってはなんじゃが、お前さんたちには、特別に《マーニ・カティ》に触れる事を許そう。

剣の柄に手を当てて、旅の無事を祈るがいい。』

祭司の心遣いに感謝し、リンは剣を受け取った。

「あ、ありがとうございます！では……」

だが、リンが剣を手を持った瞬間、光が溢れ出した。
『！？』

これには祭司も驚き、

「？今……」

リンも驚いた。

剣が光を放ったのだ。

「……剣が……光ってる？」

その様子を見た祭司が驚きと喜びの声をあげた。

『おお…… おお……』

これこそ、精霊の御心。

リンよ……あなたは精霊に認められたようじゃ。』

「どういう意味ですか？」

あまりのことに戸惑いを隠せないリン。

祭司は語る。

《マーニ・カティ》とは精霊の御心に適う者以外には消して扱えぬ代物。

そのため、この剣は生きているのだと。

そして、それが認められた時、光り輝くのだと。

『《マーニ・カティ》の持ち主になるがいい』

「そっそんな事出来ません……」

『剣が、それを望んでおる』

その証拠に……抜いてみるがいい。』

「あ……」

剣を抜くと、その先は光輝いており、リンを照らし出す。

「……抜けた……」

祭司はうれしそうに微笑む。

『生きてる間に、《マーニ・カティ》の持ち主にめぐり会えるとは』

……わしは果報者じゃな。』

「……私の剣……」

リンはその美しさに見ほれていた。

『さあ、旅立つのだリンよ。』

この先、どんな試練があろうとも、その剣を握り、運命に立ち向かってゆけ!』

祭司の言葉を胸にリンは視線を上げる。

「はっはい!」

祭壇を出て、草原に出てもリンはマーニ・カティを両手でしっかりと持っていた。

「これが《マーニ・カティ》ですか…なるほど、珍しい剣ですね。」
見たことのない剣にセインは興味を持ったらしい。

だがリンにはいまだ信じられなかった。

「…なんだか、信じられない気分だわ。」

サカで1、2を争う名剣が…この手の中にあるなんて。」

「優れた武器は、己の持ち主を選ぶ…」

それは、サカだけでなく大陸中でよく耳にする話ですよ。

私はリンデイス様の剣技を拝見して常人ならざるものを感じていました。

あなたこそ、剣に選ばれてしかるべき方だと思います。」

ケントの誉めようにリンは急に慌てだす。

自分はそんなに誉められたことをしていないと。

「やっやめてよ!」

私は、そんなんじゃ…」

あせるリンにセインは微笑みつつ言葉をつむぐ。

「こう考えてはどうでしょう？」

武器にも、使いやすいとか使いづらいとか自分との相性ってありますよね？

この《マーニ・カティ》はリンデイス様の気にとても合う…」

そんな風に思っていればいいんじゃないですか？」

この剣、俺達には仕えないみたいですし。

そっというセインにリンは妙に納得した。

「私に合う、私にしか使えない剣……
そうね……それなら、なんとなく理解できるわ。」
そういうと後ろでたたずむサラの傍に寄っていく。

「サラも見えて。これが《マーニ・カティ》……私だけの剣よ
大切にしないとね。」
そう告げたリンは微笑んでいた。

その夜、草原にゲルを建て、休むリンとサラ。
だが、サラはゲルを抜け出し、夜風にあたる。

”マーニ・カティ、やっぱりリンを選んだか。
リンがうれしそうに見せた剣。
マーニ・カティ。”

精霊の剣、そう言われている剣。

だが、サラにとっては違うらしい。

「フフフ……そうね。確かに、セイレイなのかもね」
まるで自らを笑うかのようにサラは笑いだした。

「まだ……まだ運命は動いていない……」
空を見上げ、そっと呟く。

「大丈夫……まだ手立てはある」
ぎゅっと拳を胸の辺りに押し当て、瞳を閉じてそう呟く。
「……そろそろ眠らなくちゃ……」

気づかれちゃう。

サラはそっとゲルへと戻った。

そして、夜は明けていく。

精霊の剣（後書き）

サラの様子がおかしいのに気づきましたか？
これから少しずつ変わります

小さな傭兵団（前書き）

見覚えのあるペガサスを見つけ、駆け寄るリン。
そしてこれからまた仲間が増えて小さな傭兵団が出来ていく。

小さな傭兵団

第三章『小さな傭兵団』

ケントとセインの二騎士の口から聞いた…リンデイスの出生の秘密。リンは祖父に会うために西へ…リキアへと出発する。サカ草原とベルン王国の間を遮る山脈…。そこには悪名高いタラビル山賊を筆頭に、複数の山賊団が潜んでいる。

どの山賊団も強欲にして残忍で、サカ、ベルンどちらにも被害は広がっている。

サカを離れて10日目…

リンはその惨状を目の前にあたりにするのだった。

「これは…」

町についた時、あたりはものすごい惨状が広がっていた。

「そこらじゅう荒れ放題ですね。」

「この領主は、何やってんでしょう？」

セインの言葉にリンは下を向いた。

「…この山、タラビル山には領主達も手出しできないような、とても凶悪な山賊団が、巢食っているの。」

山を挟んで、ちょうど反対側に私の住んでいた村がある…

私の部族も…タラビル山賊の一団に夜襲をかけられて、

一晩で潰れたわ…運良く生き残ったのは、私をいれて、10人に満たなかった…」

本当に悲しそうに、辛そうに思い出そうとしていた。

「血も涙もないヤツら…絶対に…許さない!!」

サラの胸にもたれ掛かり、苦やしいと表情に出している。

サラもリンと同じ思いを味わったことがあるかのように優しく宥めるように撫でていく。

「リンデイス様……」

セインはリンの言葉に聞いてはいけないことを聞いたのだと思った。

「………」

ケントは黙り込んだ。

「ここから逃げるんじゃない……私は……いつか必ず戻ってくるわ。強くなつて……あいつらなんか歯牙にもかけないくらい強くなつて……みんなの仇を取つてやる。」

そのためには、なんだつてするわ!」

リンデイスの言葉にサラは手をぎゅっと握る。

「その時は私も連れてつてね、リン」

「ありがとvサラ」

「その時は……俺も連れて行つてください。」

セインもリンにそう告げた。

「セイン……」

「私も、お忘れなきよう。」

「ケント……みんな、ありがとう……」

街を抜けようとしたその瞬間、女の子の悲鳴が聞こえた。

その声にはリンは聞き覚えがある用で……

「ペガサス……まさか!」

どうやらリンは見覚えがあるらしい。

「フロリーナ!?」

リンはその場でその少女の名を呼んだ。

そこにいた紫色の髪をした少女が

「！！リン！？」

「フロリーナ！」

やはり見覚えがあるらしい。

「あなた、こんなところでどうしたの？」

「リン！」

本当にうれしそうにフロリーナが微笑んだ。

「ほんとうにリン？」

私、私……」

「もう。ほら、泣かないの？」

涙を拭ってやりながらリンはフロリーナの頭を撫でる。

「うん。」

「お知り合いですか？」

ケントがそういうとリンが微笑む

「私の友達よ。」

イリヤの天馬騎士見習いのフロリーナ。

この子、ものすごく男の人が苦手で……

ね、フロリーナ。何があつたのか私に話して頂戴。」

リンの言葉にフロリーナ。

「……あの、ね、私、リンが旅にでたって聞いたから……追いかけてきたの。」

それで、この村が見えたから……リンの事聞こうと思って、下に降りたら……

……この人たちがいたのが見えなくて……その……」

もじもじと言い辛そうにいうフロリーナにリンはため息をついた。

「ペガサスでふんづけちゃったの！？」

「（コクリ）」

ため息をはくと後ろからがさつな男が口を挟んだ。

『ほらっ、聞いただろうが！悪いのはその女なんだよっ！！』

兄貴を踏みつけた落とし前をつけてもらわねえとなっ!」

「フロリーナ、ちゃんと謝った?」

「うん、ごめんなさいって何度も言っただけど…」

その人たちが聞いてくれなくて…

そういつてリンの後ろに隠れる彼女。

「泣かないで、大丈夫よ」

よしよし…そういつて撫でるとうれしそうに微笑んだ。

「ねえ!ちゃんと謝ったんなら、それでいいじゃない。

見たところ、怪我もないようだし、もう許してあげて」

リンの言葉に親分らしき人が出てきた。

不細工で汚らしいという印象が強い大男。

ならず者とはみなこのようなものなのかとサラは思った。

『そうはいかねえ。力ずくでも、その女はもらうぞ!』

そっういと口笛を吹き、仲間呼びかける。

『おい!でてこいや、みんな!!』

女は傷つけるな!男はやっちまえ!!』

合図とともに大勢の手下達が姿を見せた。

「サラ、応戦するわよ!」

リンの言葉に頷くサラ。

「リン…私」

怖がるフロリーナにリンは力強く告げる。

「あなたも天馬騎士の端くれでしょ。戦えるわね?」

リンの言葉に顔を上げ、頷く。

「…うん!」

「サラ、相手はどうやら山賊団よ。下っ端みただけど、油断は出来ない…」

全員を倒して追い払うの、いいわね？」

指示を、号外にそう告げるリンにサラは状況を見渡した。

滅びた街…だが城壁があり、それを使えば有利に事は運びそうだ。

「リン…この人は？」

フロリーナは不思議そうにたずねる。

「あ…サラよ。まだ見習いだけど私専属の軍師。ね？」

「まあ、そんなところかしら。」

サラの言葉にフロリーナは笑顔を見せる。

「そうなの…あ、あの…よろしく。」

少し震え気味に手を差し出すフロリーナに笑顔で手をさし返すサラ。

「よろしく。仲良くしてね」

「…うん。」

うれしそうに微笑むフロリーナに笑顔のリン。

「サラ、どう戦う？」

リンの言葉にサラはふと横を見て赤い屋根の家を発見する。

「とりあえず、山賊に襲われないように家々を封鎖するように伝えましょう。」

「そうね、わかった。こっちは私が行く。」

「了解。」

リンは家を訪ねた。

だが、家の人は山賊だと勘違いし、リン達の話を取り合おうとはしない。

『待つてください…僕が話をつけてきます』

声が聞こえ、ドアが開くと、弓を持った青年が一人、近づいてきた。

『！君達は？』

「私はリン、旅のものよ、今から山賊団と戦いになるから、その間、

家の門を閉じててほしいの。」

リンの言葉にうそはないと感じたのか、青年は頷いた。

『そうだったのか。俺はウィル、同じく旅の者だ。』

世話になった、この村を守るために、よかったら協力させてくれないか？』

ウィルの言葉に戸惑うリン。

だが…

「戦力は多いほうがいいわ、よろしくね、ウィル。」

部隊に戻るとリンは手短にウィルが仲間に加わってくれた事を話す。

「こっちは軍師のサラ。サラ、弓使いのウィルよ」

「よろしく。サラです」

サラは手を差し出す。

ウィルも手を握り返す。

「俺、ウィルなんだけど、指示を頼んでもいいかな？」

「ええ。任せて」

サラの指示で近間の敵をウィルが攻撃し、それをフロリーナで撃退するという手段をとった。

「リン…アーチャーが傍にいる…」

震えつつ告げるフロリーナにリンは優しい声で告げる。

「え？ああ…ウィルのことね。」

「やあ！君もこの人たちの仲間？」

「！！！！！！！！」

青い顔をして飛びのくフロリーナ。

だがすぐにリンは驚いた様子を見せる。

「あ、あれ？なんか、固まってる？」

何もしゃべれないフロリーナに変わってリンが謝る。

「ごめんなさい、ウィル。」

この子、フロリーナっていうんだけど、もともと男の人が苦手なのに加えて、

あなたが弓を使うアーチャーだから……」

そういうとウィルも納得したのか、

「ああ！そうか！君、ペガサスナイトなんだ？

それじゃ、弓が怖い仕方ないよな」

そういつて苦笑いを浮かべる。

「……あ、あの……ごつごめ……んなさい……」

でも……弓を見たら……どうしても……ふ、震えて……」

そんなフロリーナをいたわるように微笑む。

「うん、わかってる。」

それより、敵にもアーチャーがいるかもしれないから、注意しなよ。」

「……は、はい……」

サラの的確な指示により、山賊団のボス、ミガルの元へたどり着いたリン達。

四方を囲むようにして配置された陣形にどうする事もなくミガルはリン達の前に膝をついた。

うまく壁を使い、敵の攻撃をかわしていったのだ。

『ぐつ、後悔……させてやる……』

ガヌロン山賊団の……兄弟達が……

黙ってねえからな……』

そついい残し倒れこむミガル。

それを見た一行は制圧したのだと実感した。

「やっと片付いたわね。」

剣を鞘に収めるとフロリーナがリンを呼んだ。

「リン！」

「フロリーナ…どうして追ってきたの？あぶないじゃない。」

「イリア天馬騎士が、一人前になるための儀式…覚えている？」

「確か、どこかの傭兵団に所属して修行を積んでくる…だったわよね？」

自分の言葉でなぜフロリーナが危険を冒してまで自分達を追ってきたのかがわかったような気がした。

「じゃあ、フロリーナ、あなたも？」

「うん。…傭兵団をさがす旅にできることを、リンに話しておこうと思って。」

それで、サカに行ったらリンが見慣れない人たちと旅に出たって…だから」

「心配してくれたのね？ありがとう。」

でも私は…貴方のほうが心配。」

そういうリンにフロリーナはきょとんとしている。

「私？」

「いい？傭兵団っていうのは普通、男ばかりなのよ？」

フロリーナが一人でそこに入って修行だなんて…無茶だわ。」

するとフロリーナもそれには気づいていたのか悲しそうな表情。

「…やっぱり、そう思うよね。」

…天馬騎士になるのは小さい頃の夢だったから、必死で頑張れば、

なんとかなるかと思ったんだけど…

私も今日の事で自信がなくなっちゃった…あきらめたほうがいいのかなあ…」

涙を流すフロリーナの頬に手を当てるリン。

「フロリーナ…泣かないで…」

慰める言葉が見つからないリンに後ろから声が聞こえる。

『そう！あきらめる必要はありません！！』

「！？」

後ろを振り返るとため息をついて『またか…』といいそうなケントと微笑みながらこちらを見つめるセインの姿が…

「俺に名案があります！可憐なフロリーナさん！！」

「セイン！」

止めるケントを何のその。セインが呟いた一言に一同は驚く。

「あなたも、俺達と一緒に旅をすればいいのです！」

我らは、このウィルも加えて今や立派な傭兵団も同然！！」

突然自分の名を呼ばれたウィルも驚いていた。

「お、おれもっ！？」

「ここで、お会いしたのも神のお導き！運命だったのです！！

ささ、このリンデイス傭兵団で、ともに修行を積もうではありませんか！」

お調子者のセインに呆れつつ、ケントは息を一つ吐き出した。

「…セイン このお調子者が…！！」

「《リンデイス》？ねえ、リン、《傭兵団》って？」

「…詳しい話は、追々ね、ちょっと乱暴な気もするけど、セインの言うとおり、一緒に来る？フロリーナ。」

「…リンと旅が出来るの？本当に？だったら、私…すぐくっついていい！」

笑顔に戻ったフロリーナにセインも微笑み近づく。

「やったー！！美しいフロリーナさん！」

俺はキアランの騎士、セインと申しま…」

近づくセインに後ずさり、サラの後ろに隠れるフロリーナ

「きゃあっ！ち、近寄らないで…ください。」

その様子を見てうれしそうに微笑むセイン。

「ああ…なんて奥ゆかしいんだ！」

追いかけていくセインにため息を吐くケント。

「すみません。《傭兵団》などとふざけた事を…」

謝るケントに苦笑いを浮かべるリン。

「ううん、私は賛成よ。フロリーナの事、ほっとけないもの。

それより、面倒を掛けると思うけど、頼んでいい？」

「はっ！お任せください」

ケントがセインを追いかけている時、ウィルが申し訳なさそうにリンにちかづく。

「あの…俺も本当についていいのかな？」

ウィルの言葉にリンは笑顔で頷いた。

「あ、ええ、もちろん！」

ウィルがいやじゃなければ。」

「実をいうと、旅の途中なのに金を盗まれて途方にくれてたんだ。

じゃあ、俺も今日から傭兵団の一員ってことで、よろしくお願いします！」

仲間が増えた事に一人はセインの病気を心配し、ため息をつき、セ

インは相方の苦勞もしらず、フロリーナを追いかけて、

それを見て微笑むウィルの姿。

「リンデイス傭兵団か…」

なんだか、にぎやかになってきたわね、サラ！」

うれしそうに微笑むリンにサラもうれしそうに微笑んだ。

「サラにも面倒を掛けると思っけど・・・」

リンが言い渋るが、サラは苦笑いを浮かべる。

「私は軍師だもの・・・」

みんなをまとめるのを手伝うわ。

「リン、一人で背負い込まなくていいわ・・・私もいる」
だから、疲れたら寄りかかってね。

そう告げるサラにリンは頷いた。

「ありがと、頼りにしてる」

「ええ、お互いを高めていくために旅に出たのよ」

「・・・そうね。私たちはパートナーですもの」

リンはうれしそうにサラの肩を抱いた。

小さな傭兵団（後書き）

フロリーナはあんまり使わないんですよ、私。
なのに…結構使わなきゃいけないのが…辛い。

生業の影で（前書き）

夜営のために立ち寄った古びた場所では出会ったのはナタリーという女性。

夫がお金を稼ぐ為に野党に身を寄せているのを心配して…

生業の影で

第四章『生業の影で』

山賊達を撃退し、リン達はさらに西へ進む。
途中、古びた砦で一夜を明かす事になった。

一方、仲間を失って怒り狂うガヌロン山賊は、リン達を追って追跡を開始。

その不気味な足音はすぐ背後まで迫っていた…

夕焼けが押し迫ろうとしていた時、セインとウィルが発見したのは古びた遺跡だった。

「ここでいいんじゃないですか？

今夜の寝床！」

屋根もあるし…そう告げるウィルにセインはため息を吐く。

「こんなボロ砦しか寝る場所がないなんて…

あんまりじゃないか？なあ、ウィル！」

「このあたりは山賊団が荒らし尽くしてて、旅人をもてなす余裕はないんですよ。」

まして、この人数ですしね。」

そついうウィルに後ろから来ていたリンもあたりを見渡し頷く。

「ここで充分じゃない。」

ちゃんとした建物の中より、風を感じられるくらいのほうが私は好きだわ。」

リンの言葉に天馬を連れてフロリーナも横に並ぶ。

「私は、リンとサラと一緒にならどこでも平気よ。」

まだ一緒に行動するようになって数日も立たないが、フロリーナはサラにとてもなついたようだ。

「では、護衛のためこのセインも女性達の横で…」

そう告げようとするセインの後ろからケントがあたりまえのように呟いた。

「おまえは、私と交代で寝ずの番をするんだ。」

「う…」

皆の中は案外広く、眠るには十分な広さがある。

『あの…』

「誰!？」

突然声を掛けられて驚くリン。

後ろを振り向くとそこにいたのは一人の女性。

『あ、ごめんなさい…私、ナタリーっていいです。この近くの村の…』

キャツ!』

近寄ってこようとしたナタリーは足をもつれさせ、倒れる寸前でサラが受け止めた。

「大丈夫!？」

リンが近寄る。

「貴方…足が…」

『あ、平気です。小さい頃からの病ですから。

あまり遠くまでは行けないんですけど…』

だが、どうしてここにいるのだろう?

「一人きりでどうしてこんなところに?」

『私の夫が…この近くにいると聞いたんです。

夫は、私の足を治すためにお金を稼ぐといって…村を出たきり戻りません。

お人よしなあの人の事、何か厄介な事に巻き込まれたんじゃないかと…心配で…

あのこれ夫の似顔絵です。．．．あんまり上手くないですけど．．．。

『そういつて一枚の紙をリンに手渡した。』

見覚えのない男性。

『夫の名前は、ドルカスつていいいます。ご存知ありませんか？』

「ごめんなさい、逢った事のない人みたい」

リンの言葉に明らかにショックを隠し切れないナタリー。

『そうですか．．．、もし夫に逢ったら伝えてください。』

ナタリーが探していたと』

「わかった、必ず伝えるわ。」

ナタリーさんも今からでは村に帰れないという事で一緒に止まる事にした。

「！！」

「サラ？どうしたの？」

急に立ち上がったサラに不思議そうな顔をしたリン。

「何か気配がする．．．」

「??」

『失礼します．．．』

そういつて入ってきたのはケント。

「どうしたの？」

『どうやら囲まれていたようです』

「．．．そう、応戦するしかない？」

リンの言葉にケントは頷いた。

どうやら逃がしてはくれないようだ。

「サラ．．．指示を。」

「この砦には三つの入り口があるわ。」

下は騎士2人におまかせしましょう。」

サラの言葉にリンは首をかしげた。

入り口は二つのはずだ。

「サラ：入り口は二つじゃない？」

「いいえ、中央から右にも今は塞がれているけど壁にひびがあつて、それを壊されたら三つ。」

そういつてサラは砦の地図を取り出した。

その用意のよさにリン達は圧倒される。

「ここが現在地、ここは騎士の2人にお任せし、ウィルとフロリーナは右手の壁から攻撃してください。」

「了解しました。」

「任せてください」

ケントとセインは武器を構え、馬に跨り、指示された場所へと向かった。

「フロリーナ・大丈夫？」

アーチャーが怖いフロリーナを労わるリン。

「だっ大丈夫・・・」

怖々言葉を紡ぐフロリーナにウィルが首をかしげる。

「大丈夫です。僕が頑張りますから」

壁があるなら直接攻撃は出来ません。

そういつてウィルはフロリーナとともに指示された場所に向かう。

「サラ・・・」

サラを見ると紙の左側を指す。

「リン、あなたはこちらを頼みます。もしかしたらドルカスさんがいるかもしれないわ」

「サラ？」

何かを感じとつたサラの様子にリンは首をかしげた。

「敵を蹴散らすだけでいいわ。夜まで持てばあちらも退却せざるを得ない」

「夜まで応戦すればいいのね」

「ええ。」

「わかった。ナタリーのことは任せたわ、サラ」

「何かあったら必ず私に指示を求めて」

「了解。信頼してるわ、サラ」

「勝利は私達の前にある」

サラとリンは手を重ねた。

サラの読みどおり、リンの配置された場所にはドルカスがいた。

「ナタリーがこの砦にいるの」

『ナタリーが！？』

酷く驚いた様子でドルカスは呟いた。

「ええ。」

『そうか…』

ドルカスは何かを考えたようにし、仲間になる事を承諾してくれた。

「フロリーナ…」

突然現れたフロリーナに慌てるリン。

「サラから・指示があつて、ここはドルカスさんとリンに任せる
つて。」

私は伝えに來ただけ、すぐ戻るの。

そういつてフロリーナは持ち場に戻っていった。

「ドルカスさん、夜が更けるまで持たせましょう」

「ああ…」

ドルカスの手斧が相手を近づけさせないように舞う。

リンの剣技が相手を切り裂く。

ケントとセインの剣技、槍さばきが冴え渡る。

ウィルの弓が相手を貫く。

フロリーナも力が弱いながらも懸命に戦う。

そして…夜が更けると敵の数が大幅に減っていく。

どうやら退却したらしい。

「サラ、終わったみたいね」

「お疲れ様です。リン。」

笑顔で迎えてくれたサラにリンはドルカスを連れて来た。

『貴方…』

「ナタリー」

2人を残し、リン達は中央から離れた場所で休む事に。

「リン様たちはお休みください。私達が見張りをしてますので」
ケントはセインを連れ、見張りに向かう。

「僕も、見張りに行つてきます」

ウィルも見張りについた。

夜は更け、ドルカスは戻ってきた。

ナタリーを村まで送つてきたらしい。

『俺を雇つてくれ』と申し出たドルカスにリン達は賛同した。
新たな仲間を加え、リン達は砦を旅立った。

サラは砦を見据え、壁に手を当てた。

「サラ？」

「今行く…」

ただそう告げ、立ち去る。

リン達が旅立つて数刻後…

2人の影がさつきサラが壁に手を当てた場所に手を当て、微笑んだ。

《あの方は無事らしいな…》

《ええ…、追いかけましょう》

《もちろんだ》

二つの影はそのままそこを後にした。

生業の影で（後書き）

はあ、もうすぐだ…がんばらねば

国境を越えて（前書き）

ようやく迎えたリキアとの国境。
でもここでも野党が…

国境を越えて

第5章『国境を越えて』

翌朝：

リンは山賊たちの追撃をかわし、リキア・ベルン国境へと急いだ。ここさえ抜ければ、目的地のキアランは近い。

リンは、まだ見ぬ祖父の顔を思い描いていた…。

「間もなく、リキアとの国境です」

ケントの説明にリンはやつと息を吐いた。

「ここを抜ければ、山賊たちともお別れね？」

リンの言葉にウィルが頷く。

「多分、大丈夫です。」

さすがに国境は越えてまで追ってこないでしょう。」

セインは背伸びをしつつ、懐かしがっている様子だ。

「やつと、リキアか！」

長かったなあ。明日には、名物のタル酒とあぶり肉を口に出来るぞ。

おお、それに国境の宿の女主人は、評判のリキア美人だったな。

酌をしてもらいながら、ゆっくり疲れを取って…うーん、これはたまらん！

なあ、ケント…！」

相方に話を振るセインだが、ケントはつうーんとし、

「貴様がそのつもりなら宿は別の場所を取る。」

我々は、物見遊山の旅をしているわけではない。」

冷たい言葉に泣きまねをするセイン。

「そつ、そんなぁ！あんまりだぞ、お前！！」

そんなセインを見て微笑むリンとサラ。

「クスッ、ケント、私達はいいわよ、その宿で。」

「リンデイス様が…そうおっしゃるのでしたら。」

だが、打って変わってうれしそうに微笑むセイン。

「り、り、リンデイス様！！」

あなたは、女神様です……！！」

うれしそうなセインに苦笑いを浮かべるリン。

「いいのよ。気にしないで。」

そういったリンの横でフロリーナも一息つく。

「…これで夜、ゆっくり眠れるね。」

リンも頷く。

「毎晩、毎晩、忍び込もうとする根性は認めるけどね。」

呆れたようにセインを見つめる2人。

だが、そんな一行を後ろから追ってきた山賊。

『見つけたぞ！てめえら』

「わっ！まだ追ってきた！！」

ウィルが後ろから追ってきた山賊を見て走り去る。

『へっへっへっ、このまま逃げられると思うなよ、おまえら！』

『おまえらを逃がしたとあっちゃ、ガヌロン山賊の名折れなんだよ

！』

だが、そんな山賊に対し、リンは、

「…あなたの顔がつぶれようが恥になるうが、こっちは関係ないわ！

私達はリキアへ急いでるの！

邪魔するなら容赦しないっ！！」

剣を目の前に突き出すと相手は怯み、

『チクシヨウ…生意気な女め！！』

そういつて斧を振り上げる。

一瞬の事に剣を構えることも出来ず、リンは怯んでしまった。

『しねえー！！！！！！』

バシッ！

「え？」

金属音がしたかと思い、そっと辺りを見回す。
だが、見えたのはローブの裾。

「サラ？」

「…リン、油断しないで」

そういうと目の前にいるのがサラだと認識した。

『てめえ…』

襲ってきた男は手傷を負ったらしい。

サラは剣を構えており、その立ち振る舞いはまるで剣士のよう。

「リンに手を出すのなら、私が相手になるわ」

かかってらっしゃい。

サラの言葉に怒った山賊は…

『いくぞ、野郎ども！』

女だからって手加減はすんな！徹底的にぶっ潰してやれ！』

そう叫ぶや否や、仲間連れられてその場を後にした。

「サラ…？」

あなた、戦えたの？

不思議そうに首をかしげるリンにサラはきょとんと彼女を見つめる。
「エレブ大陸を一人で旅してるのよ。」
心得ぐらいはあるわ。

その言葉にリンはまたもや知らない事を知れてうれしそうだ。

「まったく…どいつもこいつも、代わり映えしない」
リンがふてくされた。

「ふふ、まあ、倒し疲れるけどね」

「サラ、ちゃっちゃか倒しちゃいましょう」

リンはサラと共に笑う。

だが、戦おうとした、その時、2人が敵と対峙しているのが見える。

「誰かしら？」

「さあ、話し掛けてみたら？」

「そうね。」

リンは2人に近づいてく。

「あの、ちよつといい？」

「！」

ピンク色をした少女は驚いている。

「どうして、山賊と戦ってるの？」

「・・・なりゆきです。」

紫色の髪をした青年がそう告げた。

「違うじゃないっ。」

私達、あなたたちの仲間だと誤解されたのよ！！

もう、いい迷惑！なんとかしてちょうだい！！」

ピンク色の髪をした少女が怒鳴ると横にいた紫色の髪の青年は呆れ顔。

「君が野次馬根性を出さなければ、巻き込まれてないだろう？」

「すみません、僕らのことはお構いなく。」

「…でもせっかく戦うんだったら、手を組まない？
そのほうが早く済むでしょ。」

リンの言葉にピンクの髪の少女は仕方ない…とでもいうような顔を
した。

「それもそうね。うん！それがいいわ。」

エルク！彼女達と組むわよ。」

エルクと呼ばれた紫の髪をした青年は目を見開く。

「えっ？」

「よかった…私はリン。」

とりあえず、私達に合わせて動いてもらっていい？」

リンが手を差し出すとピンク色の髪の少女も手を差し出す。

「ええ、まかせて。私はセーラ、彼は護衛のエルクよ。」

さ、エルク、ちゃんと戦うのよ！」

セーラの言葉にため息を吐くエルク。

セーラは攻撃が出来ないシスター。回復役専門だ。

エルクは魔道士、ファイアーの魔法を所持している。

「前と同じく、こちらに有利になるように相手を引き込むわ。森が
ある場所に配置を。」

サラの指示で相手を引き込みつつ敵を撃退していく。

サラの指示の元、エルクのファイアーが山賊を火の海へといざなう。

セーラは傷ついた仲間を次々と癒し、手助けをしてくれる。

セイン、ケントの剣技が冴え渡り、リンを助ける。

フロリーナが相手を霍乱させ、ウィルがしとめる。

サラの知力が相手を上回ったのだった。

ドルカスの斧の前に山賊を指揮していたバクという名の山賊が倒れ

た。

「サラ、ご苦労様、これで、大体終わったわ。」

「驚いたわ、リン。あなたって強いのね」

驚いたように近くにいたセーラが話し掛けてきた。

「あなたこそ不思議な杖を使うのね。回復できるなんて、すごいわ」
リンの言葉に誇らしげにセーラが告げる。

「神に仕える者だけ許されるのよ。」

「おかげで助かったわ、それじゃあ私達、もう行くわね」

「こちらこそ、じゃあね、リン。」

「さようなら、気をつけて、エルクも！」

後ろから近づいてきていたエルクにもいうと、

エルクは「さようなら。」とだけ告げる。

その後、セインの病気が始まり、セーラ達に自分達はリキアのキアラン家に仕えていると告げてしまい、
リンがキアラン侯爵家の人間だと知ると、リンの供になりたいといってきたのだ。

エルクはまたもや巻き込まれてしまったようです。

サラは一人、旅の中で考え事をしていた。

時々、一人で空を見上げ、何かを考えているように。

それに気づいたリン。

ゲルから出て行くサラの後についてきてみればそんな事をしていた。

「サラ……」

呼びかけるとサラは振り向いた。

「リン……起こしちゃった？」

「うつん、綺麗ね……」

空を見上げると星達がひしめき合い、輝きを増していた。

「ええ…」

「サラ、何か悩んでない？」

リンの言葉にサラは首をかしげる。

「…どうして？」

「ごめんね、何度かサラが野宿の時抜け出しているの見てた」
「……そっか」

リンの言葉にサラは空を見上げた。

「天体観測よ、ただ、それだけ」

「……ならいいけど…」

「さ、明日も戦いが待ってるわ」

寝ましょう。

そう告げて立ち上がるサラにそれ以上聞くわけにも行かず、リンも立ち上がる。

”サラ…いつか話せるときが来たら話してね。”

リンは心の中でそう呟き、空を見上げた。

国境を越えて（後書き）

セーラとエルクってほんと役立つんですね。
さあ、サクサク進めましょう

誇り高き血（前書き）

リンはついに母の生まれた地、リキアの土を踏む。

リキアは、細かく別れた領地を各々の領主が納める国。

リンは、現在いるアラフェン領から、祖父の待つキアラン領まで向かうことになる。

しかし、キアランの支配を企む侯弟ラングレンは、リンを亡き者にすべく、すでに配下を放っていた。

誇り高き血

第6章：誇り高き血

リンはついに母の生まれた地、リキアの土を踏む。

リキアは、細かく別れた領地を各々の領主が納める国。

リンは、現在いるアラフェン領から、祖父の待つキアラン領まで向かうことになる。

しかし、キアランの支配を企む侯弟ラングレンは、リンを亡き者にすべく、すでに配下を放っていた。

リン達が訪れたのは西洋風のレンガ作りが街の所々に見える街。

「ここは、どのあたりになるの？」

リンの問いにセインはあたりを見回し、

「ここはアラフェン侯爵領。」

リキアでは、オスティアに次ぐ、大きな街です」

「リキアで二番目：にぎやかだと思ったわ

そういえば、ケントは？」

いつもセインの隣にいるケントの姿が見当たらない事に気づく。するとセインは、

「先に城へ行くと言ってましたけど…」

ふと先を見るとケントの姿が…

「あ、戻ってきましたよ」

「リンデイス様、城に参りましょう。

ここの領主殿に、キアランまでの道中の援助を承知していただきました。」

そう告げるケントはうれしそうだ。

「助けてくださるの？」

「はい。ここアラフェンは、昔からキアランと親交が深い土地。

アラフェン候に事情をお話したところ、力添えを約束してくださいました。」

誇らしげに告げるケントにうれしそうに微笑むリン。

その後ろでセインも肩の力を抜いた。

「だったら、ここから先は楽が出来るな！」

だがそんなセインの言葉を聞き流し、ケントはリンを見た。

「……ここで、少なり兵を借りる事が出来れば、キアランまでの道中はかなり安全になります。

これまで、不自由な思いばかりさせ、本当に申し訳ありませんでした。」

頭を下げるケントにリンは慌てた。

「そんなこと……」

でも、ケントは本当に有能ね。」

リンの言葉に首をかしげるセイン。

「ケントは？」

その言葉にあ……と小さく声を漏らし……

「え？ あ、もちろんセインもね。」

「そうでしょうとも！」

「では、城に……」

セインの言葉を綺麗さっぱり無視して、リンを案内するケント。

だが、リン達が城に近づこうとしたその瞬間、町人がざわざわと騒ぎ出した。

「一体どうしたの？」

サラが近くにいた町人に声を掛ける。

すると、町人は慌てた様子で

『たっ、大変だ！城が燃えているぞおっ！！』

「なんだって!？」

慌てたケントとセインが城の近くに近づく。
城から煙が上がっており、しかも兵達がこちらに向かってくる。

『貴様がリンデイスだな!』

「!!! な、何者っ!？」

だが相手は名乗らず、リンに刃を向ける。

『問答無用っ! 覚悟っ! ! ! ! ! !』

「! ! ! ! !」

まったく警戒していなかったため、剣を抜く速度は相手のほうが速い!

” やられる・・・ ”

そう思ったリンは目を閉じた。

だが、次の瞬間、感じたのは痛みではなく、相手の声だった。

『グッ! グワッ! ! !』

「! ?」

恐る恐る目を開けると相手の身体に刺さっていたのは弓矢。

「・・・弓矢？」

敵のいたほうに振り向くと馬に跨った一人の青年。

その青年が構えていたのは短い弓矢だった。

『……………』

「誰・・・?」

リンの問いかけにその男は何も言わない。

「リンデイス様! !」

駆けつけるケントはリンの様子を見て息を吐く。

「ご無事ですか! ?」

「大丈夫よ、・・・彼が助けてくれた。」

そういつてリンは馬上の彼を見る。

ケントも彼を見…

「失礼だが、あなたは？」

だがケントの問いにも彼は無言。

そのまま馬を一步下がらせる。

それに気づいたリンは無意識に呼び止めた。

「待って！どうして私を助けてくれたの？」

「…サカの民が襲われているように見えた。

だが、違ったようだ。」

その青年の言葉にリンは言葉を紡ぐ。

「違うな！私はサカの者。

ロルカ族長の娘、リンよ！」

「ロルカ？…生き残りがいたのか。」

心底驚いたような彼の顔。

「ええ。」

そんなリンを見据え、彼は告げた。

「…早く立ち去るがいい。城を中心に火の手があがっている。

せつかく助かった命、無駄にする事はない」

その彼の言葉にリンは首をかしげた。

「あなた、お城から来たの！？」

「だったら教えて！アラフェンの城が…

領主様がどうされたのか！」

「俺は、城主に雇われている。護衛隊長だ。

今、町を騒がせている者どもの仲間が城を襲い、城主を捕らえている。」

「…俺は、ヤツラを倒し、城を取り戻さねばならん。」

彼の言葉にリンは即答で申し出た。

「そう…じゃあ、私達にも手伝わせて！」

リンの言葉にケントは驚く。

「リンデイス様!？」

これには彼も驚いたようだ。

『・・・なぜだ?』

「あいつらの狙いは私。

・・・あいつらが城を襲ったというなら、それは、私に関係あるはず。

だったら助けないと・・・」

リンの強い決意にその青年は

『・・・何か事情があるようだな。

ならば・・・手を貸そう。』

それには逆にリンが驚いた様子を見せる。

「いいの?」

「・・・……」

ケントは黙ってその場を立ち去った。

サラを連れてこようと思ったらしい。

「俺はクトラ族のラス。

・・・他部族とはいえ、同じ草原の民の女を見捨てては置けん……」

「ありがとう、ラス!

あなたに、母なる大地の恵みがありますように!」

「そして、敵に父なる空の怒りを・・・!」

手を取り合い、2人は草原の誓いを立てた。

「行きましょう!」

リンの言葉にラスは頷いた。

リンはサラに事情を説明した。

ラスの話によると城には三つの仕掛けがあり、それを作動させれば後はラスの仲間が何とかすると告げた。

だが、ラスはこうも続けた。

仕掛けの所には敵が入り込んでいる、そして、錠も掛けられていると。

「ん〜、扉を開ける力ギもないし、まあ、敵が持つてる可能性もあるわよね。」

どうする？サラ…

リンの言葉にサラはさっき誰かがあの家に入っていったのを思い出した。

「リン、あの家を訪問しましょう」

「サラ？」

首をかしげるが、サラはにこりと微笑む。

「情報は多いほうがいいわ」

サラの言葉にリンは頷いた。

「陣形をそのままに、各家を回って情報を集めてください」

サラの指示を元に動き出す仲間達。

リンが訪れた場所で、マシューと名乗る盗賊と出会う。

「おれはマシュー、ケチな盗賊さ。」

なあ、あんたさ、俺を雇わないか？」

リンに持ちかける。

「盗賊に用はないわ」

そついい捨てるリンだが、マシューはにっこりと微笑み、

「そんな事言わないで。」

兵舎の扉を開けたいんだろ？」

「！どうしてそれを…！！」

リンの反応に好感を得たのか、マシューはうれしそうだ。

「やっぱり凶星か。」

だまされた…とリンは頭を抱える。

「悪い事たあ、いわねえ。俺を雇いなって！」

今なら、格安料金にしとくからさ。」

マシューの言葉にしぶしぶといった形で頷くリン。

「…わかったわ。」

でも、どうして私達に味方するの？」

ふと浮かび上がった疑問を素直にぶつけてみた。すると…

「ん？ああ、上から見てて、あんたらのほうが面白そうだったから。

ただ、それだけ。」

マシューの言葉にリンは息を一つ吐いた。

「…ヘンなヤツ。」

そういつてその家の叔母さんに別れを告げ、外に出るとマシューは背伸びを一つ。

「じゃあ、さっそくお仕事と行きますか！」

外でサラと合流したリン。

「サラ、マシューよ。盗賊の」

「こんにちわ」

「ちわっ！」

笑顔で手を握り返すマシュー。

「あんたがここの軍師？」

「ええ、一応。」

「俺はマシュー、役に立つぜ！」

「そう、じゃあカギのかかった扉を開けてもらえるかしら？」

「了解vv」

マシューが扉を開け、ラスが仕掛けを解除する。

2人が一つ目の仕掛けを解除した途端、壁があった所が地面に埋まり、道が現れた。

「一つ目の仕掛けが解除された。残るは二つだ。」

ラスはマシューを連れ、陣形に戻ってきた。

「その先にあるのがもう二つ目の仕掛けね。」

「ああ……」

その間に他の仲間達は襲い繰る刺客達を払いのける。

数々のトラップを解除し、リン達は城を襲った敵、ブルを撃破する。

マシューが城の宝箱から見つけたアーマーキラーという剣。

それのおかげで難なく敵を撃破したのだった。

そして、ブルが守っていた最後の仕掛けがラスによって解かれる。

「最後の仕掛け……ならばこれで……」

仕掛けに手を掛けるとその先に道が現れる。

「やったわ、サラ！」

隠し通路よ！！ここからは、ラスに任せましょう！」

城の先に待っていたのは城主のアラフェン候。

『おおっ！ラスか！』

よく来た。そなたのこの度の働き、見事だったぞ！」

侯爵はうれしそうにラスを見ている。

「……侯爵、礼ならばこの者たちに……」

ラスは隣にいるリンを横目で見る。

それに気づいた侯爵は首をかしげる。

『？誰だ？』

「はじめまして。リンデイスと申します。」

その名に聞き覚えがあった侯爵は怪訝そうな顔をした。

『・・・そうか。そなたが、キアラン候の・・・』

ラス、少し下がっている。この者たちに話がある。』

そう告げた城主にラスは怪訝そうな顔をした。

だが、主の言葉に従い、その場を離れる。

『・・・さて、リンデイス殿。

騒ぎを起こした連中の正体を知っておられるか？』

アラフェン候の言葉にリンは静かに言葉を告げた。

「……祖父の弟、ラングレン殿の手の者かと・・・」

リンの言葉にえらそげな態度を見せるアラフェン候

『そのとおりだ。つまり、わしの城は君の家の相続争いのとばっち
りを受けたというわけだ。』

「す、すみません・・・」

ここは素直に謝る。

『マデリン殿の娘が難儀していると聞いて、力を貸してやるか
も思ったが・・・』

悪いが、わしは手を引かせてもらおう。』

アラフェン候の言葉に驚いたケントは会話に入った。

「アラフェン侯爵様っ！それではお約束が・・・！！」

慌てた様子のケントにアラフェン候は偉そうな態度でケントを見る。
まるで見下したかのような態度だ！とサラは思った。

『・・・ケントと言ったか？』

そなたは、わしに肝心なことを言わなかったではないか！』

アラフェン候の言葉にケントは眉間にしわを寄せつつ、表面上は普
通に勤めた。

「・・・と、申されますと？」

『この娘、確かにマデリン殿に似ておるが、まさかここまで、サカの血が濃く出ておるとは・・・』

「！！！」

『サカ部族の孫娘などに戻られては、キアラン侯爵も、さぞや迷惑するのではないか？』

その言葉にセインはいち早く剣の柄に手を掛け、今にも切り付けそうな勢いを見せる。

「なっ！？」

「動くな！セイン！！」

申し訳ありません、侯爵様！」

謝るケントに侯爵はふんつと鼻を鳴らし、

『・・・フンツ、しつけがなっておらん。』

「アラフェン侯爵様！」

どうか、どうか、お力添えをいただきたく・・・」

頭を下げるケント。

だが、アラフェン侯爵は依然として偉そげな態度を改める事はない。

『・・・キアラン候は、病に倒れたと聞く。

・・・その娘が戻るまで果たして、もたれるかどうか・・・

だとすれば、次の侯爵を継がれるはラングレン殿。

・・・わしは、面倒はごめんだ。』

「この・・・っ！！」

アラフェン侯爵の言葉に、セインは剣を抜こうと柄にまた手を掛ける。

だが、ケントがそれを制する。

「セインツ！」

だが、今まで黙っていたリンがアラフェン侯爵に視線を合わせ、そのまま逸らした。

「・・・わかりました。ケント、セイン、戻りましょう。」

リンの言葉にケントは慌てる。

「リンデイス様！ですが・・・」

「私は、自分に流れるサカの血に誇りを持っているわ。

だから、それを侮辱する人の力なんて絶対に借りたくない！」

そういうとリンはそのまま踵を返し、城を後にした。

城を出るとセインはスカツとした顔をしてリンに話し掛ける。

「いやあゝ、すつきりしましたよ！」

あの侯爵！なんてイヤなヤツなんだ！大丈夫です！

リンデイス様には我々があります！な？ケント」

沈んでいる相方を励まそうとするセイン。

「・・・申し訳ありません。」

そういつて頭を下げるケント。

「どうして、ケントが謝るの？」

リンは不思議そうに首をかしげる。

「・・・無事にキアランへお連れすることばかりに気を取られ・・・」

リンデイス様のお心に気が回りませんでした。」

そういつて謝るケントにリンは苦笑いを浮かべる。

「そんな事・・・いいのよ、気にしてないわ。」

ケントが私の身の安全を一番に考えていること、私、知ってるから。

だから、あなたは胸を張ってればいいのよ。」

リンの暖かい言葉にケントはようやく顔を上げた。

「リンデイス様・・・」

アラフェンの領を出た所でリンは立ち止まり、後を振り返る。

「リン？」

「・・・アラフェン候が、おじい様は病気だと言っていた・・・
急いでキアランにたどり着かないと・・・！」

リンを心配そうに見守るサラ。

その後ろからケントが告げる。

「キアランに近づくほど、ラングレン殿の妨害は激しくなるでしょうが・・・」

守り抜いて見せます。リンデイス様！」

「頼りにしてるわ、ケント」

ケントの心遣いに感謝しつつ、ケントを見つめるリン。

「俺も、お守りしますよ！」

「ありがとうございます、セイン。」

「リン、あなたは一人じゃない、私も、ケント殿やセイン殿、みんないるわ」

サラの言葉にリンは涙ぐむ。

「サラ、いつもいてくれてありがとうね。」

みんなが、いてくれるから・・・私。」

そういつて涙ぐむリンの涙をそっと拭ってやるサラ。

するとリンは仲間に向かい、笑顔を浮かべる。

「私、がんばらないとね！」

くじけてなんていられないわ！」

そう告げるリンに仲間達はただ頷いた。

アラフェン領から少しはなれた草原。

すると、馬の掛ける音がリン達の耳に響いた。

後ろから来る馬が走る音に一行は足を止めた。
振り向くと、そこにいたのはラス。

「……………」

「ラス！どうしたの？こんなところで……」
驚いたように告げるリンにラスは告げる。

「……………城主との話を聞いていた。」

ロルカ族のリン、誇り高き草原の民よ……

その同胞として俺は、おまえに力を貸そう……」
思っても見なかったラスの言葉に驚く一同。

「本当！？」

「それから……これを持って行け。」

「これは……お金！？」

麻の袋に詰め込まれた沢山の金貨。

それをみて慌てるリン。

「も、もらえないわ。こんな大金……！」

返そうとするリンにラスは冷たく言い捨てる。

「俺には無用なもの。おまえが役立てるがいい。」

ラスは受け取るつもりがないらしい。

「……………」

「一度差し出したものをひっこめるわけにはいかん。」

そういつて他の仲間のいるところへと馬を走らせて行く。

「ラス……ありがとう。」

小さく礼を言うが、誰も答えない。

リン達は5000Gを手に入れた。

その夜更け……リンはまたもやサラの姿がないのに気づく。
起き上がり、ふとドアを明けるとそこには焚き火の傍に座るサラの

姿。

「サラ……?」

「……リン。起きたの?」

「何してるの?」

そういうリンにしいーと唇に人差し指を当てるサラ。ふと顔をのぞかせると見張りだったケントが眠っていた。

「毛布だけ持つてきてくれる?」

「了解。」

小さく会話をし、毛布を持ってきてそつとケントに掛けてやる。

「見張りご苦労様、サラ」

「今日はケント……色々あったからね。仕方ないよ」

そういつて焚き火を見つめるサラ。

「そうだね」

今日のあの事はやつぱりリンもショックだった。

サカ族をあんなに嫌ってるなんて……と。

「人は、どうしてそうやって部族同士で戦うのだろうね?」

「えっ?」

サラの言葉に驚くリン。

「皆同じ人なのに、なぜ部族を嫌ったりするのだろうね……」
同じ大陸の民なのに……

そう告げるサラにリンは言葉を返せない。

「サラ……貴方……」

リンが何かを告げようと口を開いた瞬間……サラは慌てたように、
「なんてね……ちょっと考えすぎだよね」

そういつてごまかされる。

リンはサラを見つめ、ふと思ったのだ。

《サラ……貴方は何者なの》……と。

第6章：誇り高き血…END

誇り高き血（後書き）

リキア領に入りましたね。
さあ、どんどん先に進みますよ

旅の姉妹（前書き）

アラフェン候の援助に見切りをつけ、リン達は一路アランへと行軍を続けた。

祖父の身が危ない今、事は一刻を争う。

あせる気持ちに押されるように、リンは先を急ぐ。

そんな時…一人の少年が助けを求めてきた。

旅の姉妹

第7章：旅の姉妹

アラフェン候の援助に見切りをつけ、リン達は一路アランへと行軍を続けた。

祖父の身が危ない今、事は一刻を争う。

あせる気持ちに押されるように、リンは先を急ぐ。

そんな時…一人の少年が助けを求めてきた。

村に立ち寄った一行。

「ケント、ここは？」

尋ねるリンにケントは告げた。

「カートレ侯爵領です。」

ここを南に抜ければキアラン領内に入れます。」

ケントの回答に付け足す形でセインがしゃべる。

「キアラン城までならざつと10日分の距離って所ですね。」

…なんの邪魔も入らなければ、ですけど。」

セインの言葉にリンは落ち着かない様子で下を向く。

「…10日…。」

そんなリンの元に一人の少年が近寄ってきた。

『あの！すみません。』

突然話し掛けられ、驚きつつもその少年を見ると、怖々話し掛けるのがわかる。

「？私に何か用？」

『お姉さん達、もしかして傭兵団か何か？』

「・・・だとしたら？」

リンの答えに少年は切羽詰ったような声で請願する。
『力を貸してほしいんだ!』

その少年の言葉にケントがリンを見る。

「・・・リンデイス様。」

子供とはいえ、気をお許しになりませんよう。」

ケントの忠告にリンは頷く。

だが、

「その子は大丈夫よ。」

「サラ？」

リンの横から来たサラに男の子の顔がほころぶ。

『あゝ、あの時のお姉ちゃん。』

どうやらサラとこの子は顔見知りらしい。

うれしそうにサラに近づく少年にサラは頭を撫でる。

「元気そうじゃない・・・ってあれ？お姉さんは？」

『・・・サラさん、助けて！ニニアンが・・・あいつらに連れて行かれてしまう!・・・』

二人の会話に突如セインが会話に加わる。

「お、お姉さんっ！」

君のお姉さんが誰かにつかまってるのか？」

慌ててそれはゆゆしき事態・・・といってるセインにため息をつくケント。

「セイン・・・」

『うん！すごく悪いヤツラなんだ。』

ニニアンを連れて行かれたら・・・僕・・・どうしたら言いか・・・』

泣きそうになる少年をサラは抱きしめた。

「リン、助けてくれないかしら？」

サラがはじめてリンに言った。

何かを頼む事はあっても頼まれた事がないリンはうれしそうに微笑む。

「わかったわ、サラ。貴方の知り合いは私の知り合いも同じ。助けるわ」

「…リンデイス様」

「ケントが言いたい事もわかる、私だっておじい様の事は心配…

だけど！親友の頼みだもの。それに、子供から家族を奪うようなヤツラを許しては置けないわ。」

決心が固いことを告げるリン。

それにケントはまたため息を吐く。

「…わかりました。」

その声の低さにリンは謝る。

「ケント…ごめんなさい。」

だが、ケントは顔を上げ、リンを見る。

「謝らないでください。私はあなたの臣下です。

リンデイス様は、お心のまま動かれればいい、

その決断が、どんなものでも私は着いていきます。」

ケントの言葉にリンは心から感謝した。

「…ありがとう。」

「くー、一人だけかつこつけやがって！

ま、いいや。よかつたな少年！

さっ、お姉さんを助けに行こう！」

『うん、サラさん。僕も手助けするね』

「期待してますv」

そういつて微笑む2人はまるで姉と弟のよう。

それを見守るリン。

「リンデイス様？」

「ねえ、ケント、サラにはじめてかな、頼まれたの。」

なんかうれしいね。

そういつて微笑むリンに『ええ。』とやわらかい笑みを浮かべたケント。

「じゃあ、悪者のところへ案内してくれる？」

『うん！．．．すぐ強いヤツラだから、気をつけてね。』

「大丈夫、まかせておいて。」

私達だって、負けてないわよ。ね、サラ。」

「心配しなくても平気。リン達は強いわ」

「うん．．．」

少年が振り向いた時、敵の魔道士が少年を見つけたらしく、近づいてくる。

『！あ．．．』

一歩下がる少年。

『ククク．．．見つけたぞ』

顔を目のところだけ出してバンダナを巻いている男がじりじりと近寄ってくる。

『さあ、ネルガル様の元へおとなしく戻るのだ！』

そういう男に向かって、少年は首を横に振り、否定する。

「いやだっ！ニニアンを返せ！！」

だがその男はいやらしい目で少年を視観している。

『．．．命さえ残っていれば、多少、傷ついても問題なからう。

．．．行くぞ。』

剣を持ち、振り下ろそうとした瞬間：

それは少年の上に落ちることなく止まった。

目を瞑り、じっとしていた少年が目を開けるとそこには優しいサラの姿。

「サラ．．お姉ちゃん。」

『!!』

相手はすぐに飛びのき、サラを見つめる。

『何者だ!?!』

「あんたに告げる名前はない!とつと失せろ。」

いつものサラで聞いた事のないようなドスの聞いた声でその男を見据える。

「命が惜しくばこの場より立ち去れ、さもなければ…殺す」

剣を突き出し、相手の心理を乱す。

だが、その男は口笛を吹く

『ちくしょー、野郎ども!!やっちまえ!!』

その男が立ち去ると、大声でそう叫んだ。

あたりからは隠れていたのか大勢の手下達がいた。

「サラ…相手はシャーマン。闇魔術の使い手よ。

闇魔法はとても威力があるって聞くわ。

慎重に行かないと…」

ふと人の気配を感じ、振り向くリン。

「誰!?!」

振り向いた先にいたのは金色の髪をした聖女。

『あの…す、すみません。』

驚かせるつもりでは…』

そういつて謝る僧女

「僧服…?エレミー又教の神父様ですか?」

リンの問いに恥ずかしそうに彼女は告げる。

『はい…あ、いえまだ修行中の見習いですが…』

エレミー又教の修道士、ルセアと申します。』

「私達に何か?」

リンの問いに後ろにいたサラを見るルセア。

『この少年は、先ほど宿に助けを求めてきました。』

しかし、巻き込まれるのを恐れた宿主は彼に酷い言葉を……」
サラにくつついて離れない少年は影からルセアに言葉を紡いだ。
「……いいんだ、別に。慣れてるから……」

そついいながらも泣き出しそうなニルスはサラは抱きしめてやる。

『……私も、手伝わせていただけませんか？

少しでも、あの子の力になりたいのです。』

ルセアの言葉にリンはうれしそうに片手を差し出す。

「もちろんです。」

『ありがとうございます！

あなたに聖女エリミーヌのご加護を。』

サラの横をあるくルセア。

ルセアは振り向きよろしく。と呟く。

サラもよろしく。と呟くと2人で笑う。

それをリンは不思議そうに見つめていた。

「サラ、指示をお願い」

リンの言葉にサラは各仲間に指示を出す。

「闇のシャーマンはルセアが叩いてくれるわ。闇は所詮光に勝てない。」

ルセアは光の魔法を使うから。頼める？」

「もちろんです」

「あとは各個人、敵を殲滅してください。」

以上です。

サラの言葉にニルスはサラのローブを引っ張る。

「僕にも出来る事あるよ。」

「わかってる。ニルスはルセアを助けてあげて」

「うん^^」

ルセアが近くにいたシャーマンをライトニングの魔法で撃退する。

「ニルス…頼むわよ」

「うん。」

ニルスは笛を唇に当て、メロディーを奏でる。

「サラ…ニルスは…戦えるの？」

リンの問いかけにサラは首を横に振った。

「彼は《バード》という職業なの。」

「《バード》？って吟遊詩人よね？」

今は歌や演奏を聞いている場合じゃないんだけど。

そう講義するリンにサラは苦笑いを浮かべる。

「ふふ、見てればわかるわ」

そして、メロディーが流れ出す。

軽やかな音色があたりを包む。

一度しか攻撃の態勢の取れないこの場所で、ルセアがもう一度攻撃をし始める。

「これが、バードの能力？」

・・・すごく綺麗な音色。

横で聞かせてもらったらきつと力が湧いてくるわね。」

「ええ、あの子はその笛で応援してくれるわ」

サラの言葉にリンは力強く頷いた。

これで敵よりも攻撃が早くなる。

「皆！行くわよ」

リン達の強さはパンパじゃなかった。

各地で強い相手を叩いてきたのは間違いじゃなかったらしい。

最初の頃とは比べ物にならないくらい強くなってきた。

どんどん黒い牙と名乗る刺客達を倒していき、城までたどり着いた。

城を指揮するは黒いローブを纏った一見危ない男。

黒いローブを纏った男は面白くなさげにリン達を見ていた。

自分の部下達が倒されたのだから、それも仕方ないといえは仕方ないのだが…

『何者だ…おまえたちは？』

子供を助けて、英雄気取りかもしれんが、それが死を招くとなればどうかな？』

黒いローブを纏った男の名はハインツ。

だが、ハインツが言葉を紡いだ瞬間、一本の矢が右腕に突き刺さる。
『グッ！』

右腕を抑え、怯むハインツ。

振り返った先にいたのはラスだった。

ラスはもう一度弓を引き、ハインツに向かって放った。

だが、今度はハインツも来る事がわかっていたのか、弓をよけたのだ。

『二度も同じ手にかかるか！』

そういつてミイルの魔法を唱えようとする。

だが、次の瞬間、魔法書を持った手に弓が深深と刺さった。

『グオッ！！』

振り向くと弓を構えたウィルの姿。

左右に弓を構えた2人。

『まさか…二回目の矢は劣り！？』

振り向き、ウィルに魔法で攻撃を仕掛ける。

だが、ウィルも来るとわかつているものにわざわざあたりはしない。

ラスとウィルの攻撃を先陣に次々と攻撃を仕掛けるリン達。

そして、弱ったところでルセアがライティングを唱えた。

「天より賜りし、光の力よ。可の者に裁きの光を！」

大量の光が相手を攻撃する。

闇の力を使う者にとって、光の力は強大すぎるダメージをこうむる。ハインツは片膝をつき、口元からは血が溢れ出していた。

『……我らに刃向うだけのことは……ある。』

だが、遅かったな……娘はすでに……』

僧告げること事切れたように動かなくなった。

「サラ、急ぎましょう」

リンの言葉にサラは頷いた。

城内は誰もいないのか、閑散としていた。

「ニルス……あなたのお姉さんはどこ？」

「ニニアン！ニニアンっ！」

ニルスはあたりを見回し、姉に呼びかける。

だが、誰も答えてはくれなかった。

「いない……どうして……」

泣きそうになるニルスの肩を抱くサラ。

「大丈夫よ……きっと。」

「……うん……」

サラの言葉にニルスは肩を落としつつ表面上は明るく答える。

そんな時、情報を集めに行ってたケント達が戻ってきた。

「リンデイス様……」

付近の村人が、南に逃げていく集団を見えています。」

セインも俯きつつ……

「その子の美人のお姉さんもきつとそいつらが……」

悔しそうに告げるセインにリンは……

「大変！すぐに追いかけましょう」

だが、ニルスは首を横に振る。

「でも…でも…間に合わないよ。」

もしかしたら、今ごろはもう…!」

瞳に涙を浮かべつつ、ニルスはサラのローブをぎゅっと握り締める。
泣くのを我慢しているのだ。

だが、そんな一行に話し掛ける人物がいた。

『…君達が探しているのは、この人のことかい?』

そういつて現れたのは剣士風の男性。

髪は紅毛で、高貴な雰囲気を持った青年。

そして、その腕に抱かれているのは…エメラルド色の髪の少女。

「ニニアン!!ニニアン!!」

サラの元から駆け出すニルス。

どうやら彼女が探していたニニアンらしい。

呼びかけても返事をしないニニアンに不安そうなニルス。

すると青年は微笑みつつ、ニルスに告げる。

『大丈夫、彼女は気を失ってるだけだ。』

そういった青年にリンは、

「あなた、誰!？」

リンの問いに青年はニニアンを床に下ろし、視線を上げる。

『僕はフェレ候公子、エリウッド。』

驚いた様子でエリウッドを見るリン。

「…フェレの公子」

『暴漢達が、嫌がるこの娘を連れ去ろうとしていた。

とつさに、取り返すよう動いてしまったのだが…

余計な事だったかな?』

そう尋ねるエリウッドにリンは首を横に振った。

「いいえ、助かったわ、ありがとう…」

私はリン。サカから来た…キアラン侯爵の…孫。」

リンは淡々とした口調でエリウッドに告げた。
するとエリウッドはきょとんとした顔をし、

『キアラン候の……?』

リンは意を決してエリウッドに告げた。

サラはリンの傍に寄り添い、手をじつと握っていた。

リンは今までの事をエリウッドに掻い摘んで告げた。

サラと出会い、ケント、セインと会って、自分の出生の秘密を聞いたことを。

そして、祖父であるキアラン候のこと……

そして、叔父にあたるラングレンが祖父を殺そうとしているのを止めるためにキアランに急いでいる事を。

「……というわけなの。」

簡単に信じてもらえる話ではないと思うけど……」

リンがそういうと、エリウッドは何の疑いもない、といった様子を見せる。

「いや、僕は君を信じる」

「えっ?」

「一見、君はサカの人だなんて、そこに目が行くんだけど、注意してみると、君の目元はキアラン候によく似ている」

「おじい様を知ってるの!?」

これにはリンが驚いた。

似ている……そんな事を言われたのは初めてだったからだ。

「キアラン候、ハウゼン殿は父のいい友人だ。」

それに、誇り高いサカの民は、ウソなどつかないと聞く。

「……そうだろう?」

そういわれ、なんだか気恥ずかしそうになりながらも頷くリン。

「あ……ありがとう……」

リキア貴族の貴方に、そんな風に言ってもらえるなんて…」

「・・・苦勞しているようだね。」

僕は、何か力になれるかい？」

エリウツドの申しではうれしいが…

「その気持ちだけでうれしいわ。」

でも、これは私の問題だから、とにかくがんばってみる」

リンのその強さにエリウツドは頷いた。

「そうか、でも僕はしばらくこの近くの宿にいる。

もし、僕の助けが必要になったらいつでも尋ねてきてくれ。

リンデイス…僕は君の味方だよ」

そういつて手を差し出すエリウツドにリンは手を握り返しながら頷いた。

「エリウツド…ありがとう」

リンは心のそこから礼を述べた。

ニルスは横たわっている姉、ニニアンの傍に付き添い、呼びかけていた。

「ニニアン・・・」

ニルスの呼びかけにようやく瞳を開ける、ニニアン。

「ニニアン！気が付いた？」

「ニルス！ああ、無事だったのね！？」

うれしそうにニルスに寄り添うニニアン。

「うん、この人達が助けてくれたんだ」

「どなた？」

リンを見て不思議そうに首をかしげるニニアン。

「ニニアン…久しぶり」

リンの横に寄り添っていたサラを見てニニアンは目を見開いた。

「サラ…さん。」

「助かってよかった。」

そう告げるサラにニニアンは微笑む。

「ニニアン、こちらはリン。ほとんど助けたのはリン達よ」

そういつて苦笑いを浮かべるサラにニニアンはリンに頭を下げた。

「リン様、ありがとうございます。」

私はニニアン、弟のニルスと芸をお見せしながら旅をしています」

「2人ともなの？」

リンの問いにニニアンは頷く。

「ニルスは笛、ニニアンは踊りでね。」

サラがそういうとニニアンはにっこりと微笑む。

「サラさんは一度、その舞台上で絡まれたところをお手伝いして…」

二度目ですわね。

そういつて微笑むニニアンにリンはラスと出会ったときのサラの剣捌きを思い出した。

敵の攻撃を受け止め、受け流してくれた時のことを…

あの時のサラは普段の彼女ではなかった…だけど、不思議と怖いとは思わなかったのだ。

「あゝ、だから知り合いだったのね」

妙に納得したらしい。

足を挫いたニニアンだったが、どうにかしてリン達に礼がしたいと申し出た。

だが、危険な旅の途中、連れて行くわけには行かないとリン。

そんな中、たった一人反対しなかったのがサラである。

サラによるとニニアン達には不思議な力があり、危険を事前に察知できるのだという。

その言葉に驚いた。

「どうということ？サラ」

「2人は危険を事前に察知する事が出来る…ともなれば、これから

の危険が少しは減るって事でしょ？」

戦いにも有利になるわ。

サラの言葉にリンは啞然とする。

「…すごいわ」

だが、ニルスは下を向く。

「だけど、防ぐ力がないとどうしようもないんだけど、でもリン様たちだったら、心配ないでしょ？」

そういつて視線を上へ上げ、リンを見上げるニルス。

「ケント、あなたはと思う？」

近くにいたケントに意見を求める。

「そうですね。置いていくよりも同行させるほうが心配は少ないと思います」

ケントのそばにいたセインにも意見を求めようとするが…

「セインは承諾よね。」

思い直し、サラのほうを向いた。

「サラ、この2人のこと、お願いできる？」

「了解。」

サラの許可をもらい、2人を同行させる事に。

「2人とも、一緒にいきましょう」

リンの問いかけにうれしそうに頷く2人の姿が…

その日はそこで休む事になり、リンは窓から月を眺めているニニアンを見つけた。

「眠れないの？」

「リン様…」

窓枠に座り、月夜を眺めるニニアン。

「眠れないわけじゃなくて、月があまりに綺麗だから誘われました。」

そついうニニアンにリンも月夜を眺める。

「ねえ、一つ聞いてもいいかな？」

「はい？」

リンは視線を逸らし、聞いたかった事を聞いてみる事にした。

「サラってさ、どこから来たのか聞いた事ある？」

「サラさん…ですか？」

きよとんとするニニアンにリンは頷いた。

「ほら、サラってさ、あんまり自分の事話したがないから…」

そう告げるリンにニニアンは首を横に振る。

「いえ、存じません。出会った時もサラさんはあんな感じでしたし

…」

そう…

リンはそう告げると視線を月へと戻した。

「サラさんはリン様の傍では優しい表情をなさってますよ？」

「えっ？」

ニニアンの言葉に驚くリン。

「すごく優しい雰囲気を出してらっしゃいます。

だから、リン様がサラさんにお聞きになれば、答えてくださると思

いますよ」

ニニアン言葉にリンはそうかしら…と返す。

サラが何者だって構わないと思う心があるが、でもサラの事、友人として知りたいと思う。

もつと何でも話してほしいとも…

「きつと、時が来て、落ち着いたら聞いてみるとよろしいですわ」

ニニアン言葉に励まされ、リンは頷いた。

静かに夜が過ぎていく。

ただ、2人の女性の視線は月夜に魅入られたまま…

旅の姉妹（後書き）

サラについて少しずつ謎が出てきましたね。
でもまだなんにもいいませんよ。

外伝：黒い影（前書き）

ニニアン、ニルス姉弟を執拗に狙う謎の一団・・・

その残党達は南西の方角へ逃走したという。

事の真相を確かめるため、リンはその行方を迫った。
たどり着いた先はカートレー領のはずれにある古城

その奥には、いくつもの黒い影がうごめいていた・・・

外伝：黒い影

第7章ノ式『黒い影』

ニニアン、ニルス姉弟を執拗に狙う謎の一団・・・

その残党達は南西の方角へ逃走したという。
事の真相を確かめるため、リンはその行方を迫った。
たどり着いた先はカートレー領のはずれにある古城

その奥には、いくつもの黒い影がうごめいていた・・・

その古城の一室・・・

短髪の青い髪の女性がごっつい男が向かい合って何かを話していた。
『弟には逃げられ、一度は捕らえた姉の方も何者かに奪われた・・・
何者かに奪われた・・・そういうことですね。』

女に言われ、男は申し訳なさそうに頷いた。

『はっ・・・思わぬ伏兵がおりまして・・・』

だが、そんな言葉をつっぱねるように・・・

『言い訳はおよしなさい。結果がすべてです。』

『はっ・・・』

位が女の方が高いらしい。

『姉弟を取り戻す策は？』

『手のものに探らせました所、我らを阻んだ一団が、姉弟をとま
ない、こちらへ』

向かっていると報告がありました。』

『ここに？』

『どういうことですか？』

女はそれを予想していなかったのか、驚いたような顔。

『この指輪が目的ではないかと・・・』

珍しいものだったので、娘の指から抜き取っておいたのが役に立ちましたな。』

にやりとする男に女は無言・・・

『これを餌に、ヤツラを一網打尽にしてみせます。』

ふう・・・

女は一つ息を吐き出し、

『わかりました。・・・少しだけ時間をあげましょう。』

私は、これから別の任務をこなし、それからここに戻ります。

刻限は明日の夜明け・・・いいですね？』

『はっ・・・』

『私が戻った時に、姉弟がいなかったら・・・』

この手で”牙”の制裁を下す事になります。よく覚えておきなさい。』

そういうと彼女は去っていつてしまった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ヤツラは、ここに入っていったそうよ。」

リンは前を向き、辺りをうかがう。

辺りは古い古城の後らしく、瓦礫やレンガの崩れた後が多数見受けられる。

目の前には古城の入り口らしき場所が・・・

「・・・リン様、あの・・・、ほんとに取り返しに行くの?」

不安そうに尋ねるニルスにリンは力強く答えた。

「ええ、行くわ。」

「でも!ここはやつらのアジトだよ?

もっともっと強いやつがたくさん居るんだよ?」

不安そうなニルスに、ニニアンも不安そうな顔つきでリンを見る。

「・・・指輪のことはもういいのです。

ですから・・・」

ニニアンがそう告げた瞬間、リンはサラを見る。

「サラが賛成してくれなかったら私もムリするつもりはなかったの。

でも、サラは戦う事をえらんだ。勝算がなければそんな選択をする人じゃない。」

私は・・・サラと一緒に勝てると思う。

リンは当たり前のような顔をしてそう告げる。

「だから、私たちにまかせて。ね」

「ふふ、リンの言うとおりよ。ニニアン、ニルス、私の実力知ってるでしょ?」

いざとなったら・・・

「私も戦うわ」

大丈夫。

「・・・リン様・・・サラさん・・・」

「・・・」

ニルスもニニアンもサラとリンの言葉にただただ押し黙る。

「リンデイス様、中は思っていたより数が多そうですよ。」

状況を見てきたセインにリンはサラを伴って冷静な分析をはじめた。

「敵の根城へ攻め入るんだから、かなり慎重にいかないとダメだね、サラ。」

「そのとおりだと思うわ。どう思う？ ケント」

騎士としての意見を聞きたいわ。

あなたも見てきたんでしょ？

口外にそう告げるサラにケントは頷いた。

「敵を少しずつ誘き出し、確実に倒す方法が安全です、

時間を掛けずに、一気に部屋へなだれ込んで戦うという方法もありますか……」

「それはよほど戦略に自信がある場合の策ね。」

サラの言葉にリンはサラに意見を求める。

「……サラ、どう思う？」

どうするかは貴方の判断に任せるわ。」

リンの言葉にとりあえず中に入ることに。

入り口付近に入った時点で敵にバレて居たため、近くに配置されていたであろう槍を持つ兵士が襲い掛かる。

だが、待ち構えていたウィルとラスの弓の前に倒れていく。

「たぶんこの先には魔法を使う者達が配置されているわ。エルク、ルシアは別々の方向で支援を、

セインとケントも同様に。マシユー、あなたの感が頼りよ。」

お願いね。

「了解、軍師殿」

「では、サラ、指示を。」

「了解」

『・・・何故だ。ヤツラは何故、ここまで戦える・・・!?!?』
慌てた男は近くにいた兵に指示を飛ばす。

『くッ…すべての配下を投入しろ!!』

我らに後ろはないのだ・・・!!!』

『はっはい!!』

慌てた兵士はまだ呼び兵力として残っていた兵士達を起こした。

「敵兵が増えた!!」

リンの瞳が不安をまとう。

「こんなのまだ序の口よ。予備兵力ぐらいでは怯まないで…」

大丈夫よ、リン。

そういつて微笑むサラにリンは安堵の笑みを浮かべる。

「そうね、不安になったら負けね」

私ったら。

そういつて苦笑いを浮かべるリンにサラも微笑む。

「ニニアン、ニルス、大丈夫?」

「…大丈夫だよ」

まだ不安そうである。

「大丈夫、ニニアン、ニルス」

そういつて瞳を見つめるサラに2人の顔も少しずつ緊張が解けていく。

「・・・サラさんに言われると安堵します」

そういうニニアンにサラは微笑む。

「さあ、敵さんご対面だ」

サラの指示どおり、向かいから現れたマシユーとドルカス、エルク達によつて方陣を組まれ、

あつけなく敵の首領、ベアードはつかまつた。

『く…まさか…我らが…』

ベアードはリンの目の前で頭を垂れる。

「指輪を返しなさい！……それからこれからは、この2人に手を出さないと約束して！！」

そうすれば命だけは助けて……

リンの言葉にベアードはにやりと笑い…

『……失敗には死を……』

そう呟くとバタリと倒れてしまう。

その光景に驚くリン達。

「！！」

…毒？自分から命を絶つなんて…」

「この者達は…ただの賊ではありませんね
かなり訓練された組織の一員でしょう。」

ケントの言葉に驚くリン。

「それが、どうしてニルス達を？」

「………」

まるで怖がるようにサラの両側にすがるように立つ二人。

ニルス、ニニアンのその表情にリンは一息吐く。

「ニルス、ニニアン、そんな顔しないで。

大丈夫、私たちと一緒に居れば安全よ。」

「でも…」

今回巻き込んだことを悔やんでいるのか、2人ともいい顔はしない。
「今回の戦いでわかったでしょ？サラの戦略、私の剣の腕…それからみんなの力があれば

「どんな事だつて乗り越えていける。」

そうは思わない？サラ。

サラに視線を写すと彼女も苦笑い。

「どんなヤツラが来たつて、追い払ってみせるわ。」

大丈夫。

にこつと笑うサラに上目づかいのニルス。

「ほんと？」

「ほんとよ、ね？サラ？」

「ええ。」

サラの言葉にニルス達の顔も晴れてきている。

「・・・リン様。」

ニルスがリンを呼ぶ。

「それから・・・はい。」

リンはにつこり笑顔で取り戻した指輪をニニアンに渡す。

「あ・・・これは・・・」

「”ニニスの守護”って名前だった？あいつが持ってたわ。」

取り戻した指輪を填めなおしたニニアンの顔がほころぶ。

「リン様！ありがとうございます！！」

ニルスはうれしそうだ。

「本当に・・・ありがとうございます。」

その日の夜、古城は危険のため、敵を避け、外にでた一向は近くにある瓦礫の中の一つに泊まる事に。

「戦いが違う場所だったし、疲労もあんだけ狭いと出てくるわ。」

精神的にもああいうところは疲れと思うの。近くで野陣を組ん

だ方がいいわ。」

というサラの意見だった。

早くキアランに行きたいというリンを説き伏せ、場所につくと一行を座らせる。

外伝：黒い影（後書き）

サラがものすごく強いんですよ。

でもなんとなくあんまり出さない方がいいかな・・・と思います

謀略の渦（前書き）

アラフェン領、カートレ領を抜け、リン達はようやくキアラン領へと入った。

しかし、今のキアランは、候弟ラングレンの支配下にある。

リンの抹殺を図るラングレンの部下は、ある特殊な兵器を用意し、リンを待ち受けていた。

謀略の渦

第8章：謀略の渦。

アラフェン領、カートレ領を抜け、リン達はようやくキアラン領へと入った。

しかし、今のキアランは、候弟ラングレンの支配下にある。

リンの抹殺を図るラングレンの部下は、ある特殊な兵器を用意し、リンを待ち受けていた。

「見て！サラ、山が遠くなってきたわ。

ずいぶん…遠くまで来たのね…」

干渉に浸るリンにセインが近寄る。

「リンデイス様、サラさん！」

ここまで来たら城まであと少しです。」

「ここからなら…急げば二日ほどで城に着けるでしょう」

ケントの言葉にリンは暗い表情を隠せない。

「急いでも、二日…おじい様…」

手を握り締め、不安の顔。

そんなリンを慰めるようにフロリーナが近寄る。

「リン、元気出して。リンが暗い顔をしているとみんなまで悲しい気持ちになるわ。」

「フロリーナ…」

そうね、悩んでいても仕方ないわね」

リンは顔を上げ、まだ見えぬキアラン領へと思いをはせる。

《必ず…おじい様、貴方に逢う！》

その思いを胸に抱きしめる。

そんな時、ニルスがリンに向かって叫ぶ。

「リン様、大変だ！何か危険が迫ってる！」

「なんですって！？」

ケントはあたりを見回し、セインも警戒を強める。

「・・・っと言っても今のところ、何も見えませんが？」

セインの言葉にリンも頷く。

敵の気配はするが、近くにいない様子はない。

だが、

「でも…強く感じます。」

そういつて気配を探るニニアン。

「！リン様、動かないで！」

ニニアンの言葉にリンは身構えた。

次の瞬間、リンの剣がはじいたのは一本の矢。

「何っ！？これは一体…」

だが、ケントとセインはそれに心当たりがあるようだ。

「《シューター》です！」

「ラングレン殿も必死だな。」

こんなものまで持ち出してくるなんて。」

だが、リンはわけがわからないとでもいうように首をかしげる。

「《シューター》？それは、何？」

リンの言葉にケントが呟く。

「離れた敵を攻撃する事が可能な兵器です。」

弓を操るアーチャーにしか動かす事ができません。」

ケントの言葉にセインがフロリーナを止める。

「あ、フロリーナちゃん！飛んじゃダメだよ。」

《シューター》は弓だから君は隠れてる方がいい。」

セインの言葉にフロリーナはそそくさと退散。

「…有効な戦略はある？」

リンがサラに問う。

「体力のあるものが劣りになり、矢を出し尽くさせるのがベストね、あとは、敵の兵器もこちらに有利に働くなら、奪うとかね」

うちにもアーチャーいるし。

そういうとウィルの方を向く。

ウィルも視線に気づいたのかこちらに来た。

「ウィル、あなた《シューター》扱えそう？」

「…やった事ないですけど、弓なんですよね？」

だったら、なんとかなると思います。」

ウィルの言葉にリンは、

「どっちも試せそうね…、いいわ、とにかく応戦しましょう！」

リンの言葉にサラも武器を構えた。

「サラ？」

「私も応戦するわ。」

戦力は一人でも多い方がいいでしょう？

そう告げるサラにリンはしぶしぶながらも頷いた。

「わかったわ。サラ、私達はどうすればいい？」

「リンはケントとセイン、ラスとマシューらを連れて先を急いで、ここから先に小さな家があるわ、

そこを真っ直ぐに南下すれば四つの砦が見えてくるはずよ。」

地面に地図を書きつつ説明をするサラ。

それを後ろから見ていたセイン達も理解したようだ。

「サラは？」

「私はここから下へ向かうわ。」

あ、フロリーナは飛ばないでね、危ないから」

もう一度くぎを刺され、フロリーナは頷いた。

「シューターを倒したらフロリーナ、ウィルを連れて来て。」

「わかったわ」

フロリーナは頷いた。

「ウィルはそれまでフロリーナに敵を近づけさせないようにしてね。」

「了解しました」

作戦が決まった所でサラはドルカス、エルクを連れて配置につく。

「エルク、魔法で近づいてくるやつをなぎ倒して、ドルカスさんもよろしくお願いします」

「了解」

2人はサラに指示されたとおり、敵が進入するのを防ぐ。

「私達は、シューターに乗ってるやつを叩くわ。」

「リン、セーラを連れて行って、ニルス、あなたも」

呼ばれた二人は頷き返した。

「サラ、すぐに片をつけましょう。」

「ええ、もちろんよ」

2人は手を握り合うとすぐさま、配置の場所へと向かった。

リンの配置された場所にはミイルを使う魔道士がいた。

だが、ルセアの光の魔法の威力の前に倒れてしまう。

アーチャーはラスが倒し、斧を持つならず者達をリン、ケント、セイイン、マシューがそれぞれ撃破。

傷をセーラが癒し、ニルスが笛で援護する。

「サラ、シューターを倒したわ」

リンはサラに合図を送る。

白い閃光弾が空に舞い上がる。

それを見たサラはフロリーナに指示を飛ばす。

「フロリーナ、山を越えて、ウィルを指定の場所へ」

「はい」

ようやく飛ぶ事を許され、ウィルを乗せてリンの元へと向かうフロリーナ。

「サラ」

ようやく敵が来なくなったのを見計らい、エルクとドルカスが戻ってきた。

「そのまま南下して、リン達と合流するわ」

「了解」

南下している最中にも襲ってくるキアラン兵。

だが、ドルカス、エルク、そしてサラの敵ではなかった。

サラは軍師として今まで戦闘には参加していないものの、武器をいったん構えたら人が変わったようだった。

剣技はまるでステップでも踏むような軽やかさを見せていた。

その攻撃の仕方を見れば一目瞭然。

どこかの騎士団に入団すれば、さぞかし喜ばれるだろうほどだ。

「サラ殿…どこかで剣を習われたか？」

ドルカスの言葉にサラは首を横に振った。

「私の故郷では剣は使わない。」

そう呟くサラにエルクは驚きを隠せない。

「よっぽどサラのいた所は平和だったんだね」

「…そうでもないわよ」

寂しそうに俯くサラに2人は何も言葉をかけることが出来ずにいた。

「剣はこつちに来て覚えたの」

だがそれがウソだとわかった。

昨日今日で習得できるものではないのだから…

この戦いで仲間達もサラが何者なのかと不思議に思っただけではない

だろうか？

砦にたどり着くとそこには我が物顔でのさばっている男が一人。

その男はアーマーを纏ったナイト。

アーマーナイトに慣れてきている一行は難なくアーマーナイトを撃破！

「サラ、お疲れ様」

剣をしまうサラにリンは近づいていってそう告げた。

「リンこそ、怪我しなかった？」

「私は平気。サラも実は強かったのね」

剣を構えたにしては傷一つ負っていないサラ。

だが、当の本人は微笑んでいる。

「まぐれよ。地理を使って木の陰に誘き出して戦ってたから」

「それにしても見事な剣捌きでしたよ」

近くにいたケントの言葉にサラは苦笑いを浮かべた。

「騎士様に認められたらたいしたものだと思うわ。」

サラの顔が普段の顔に戻っている。

戦闘時のサラは見た事もない顔の人に見えたのだから…

一言で言うならば…鬼神。

それがぴったり合うほどのオーラを纏っていた。

「怪我してる人は砦で傷の回復を。」

テキパキと指示を出しているサラに一行は安堵を覚えた。

その夜、サラはリンと共に砦から月夜を見つめていた。

「サラ…」

「もうすぐね、リン」

「ええ…」

そう…ここまで来たらキアランまでは目の前だ。

もうキアランの領内なのだから…

「リン…きつと大丈夫。みんなあなたの事を信じてる」

サラがそう呟くと、リンは頷いた。

「わかってる、サラ、いつもそばにいてくれてありがとうね。」

笑顔を向けるリンにサラは首を横に振る。

「私もリンがいてくれるから武器を取れるんだもん。」

ここからは私も戦闘に加わるわ。」

知だけが力じゃない事…みせなくちゃ。

そういつて片目をつぶるサラにリンは苦笑いを浮かべる。

「サラは剣以外使わないの？」

そういえば、剣以外使ったところを見た事がない。

「あと、槍とか弓とか使うよ？」

ストックあつたらもらえるとうれしい。

サラの言葉にリンは

「じゃあ、ケントに後で見えてもらおうわ」

「明日でいいわよ。」

「それより、サラ、明日の戦略はある？」

それが聞きたかったのだ。

「部屋で話しましょう」

場所を部屋へ移し、サラはベッドの上に地図を広げた。

「ここが現在地」

指さした場所から南下させるように指を地図上に滑らす。

「明日つくのがここ、ここを突破すれば、キアラン城は目の前。」

「城が一つ…」

「ええ…ここを守るのはイーグラ―將軍といって、結構村人達からも信賴の厚い人だって」

「そんな人がなぜ？」

「考えられる事は…ふたつ。

一つは大事な人が人質に取られ、言う事を聞かなければならない状態にあるのかもしれないということ。

もう一つは…イーグラ―將軍が寝返ったか…」

だけど、考えられるのは前者よね。

サラの言葉にリンも同意見だった。

「なんて卑劣なの…」

「まだ推測にしか過ぎないわ、明日、情報は収集するけど、それによつては作戦を変えるわ」

「そうね、その場に対応出来る作戦が合った方がいいわよね。」

期待してるわ、サラ。

リンは笑顔でサラにそう告げた。

「ふふ、まかせて。」

サラの微笑みに、リンも吊られて微笑む。

謀略の渦（後書き）

リンたちはまだまだ戦うんですよね。
がんばりましょう

悲しき再会（前書き）

反逆者の汚名を着せられたリン達。
候弟ラングレンは、反逆者討伐の名のもとに、他の諸侯に援軍を求めていた。

諸侯がラングレンに協力すれば、孤立したリンに勝ち目はない。
リンはエリウッドを信じ、待った。
そして……

悲しき再会

第9章：悲しき再会

反逆者の汚名を着せられたリン達。

侯弟ラングレンは、反逆者討伐の名のもとに、他の諸侯に援軍を求めていた。

諸侯がラングレンに協力すれば、孤立したリンに勝ち目はない。

リンはエリウッドを信じ、待った。

そして……

カートレーに着いた一行はさっそくエリウッドの居る宿屋へと足を向ける。

そこで事情を話すと、エリウッドは快く、その役目を買って出た。

そして数十分後：エリウッドはリン達の前に戻ってきた。

『……キアランに隣接する5つの領地、

ラウス、トスカナ、カートレー、タニア、サントルス…

すべての領主殿に、キアランへの干渉はしないとの意志を確認した。』

エリウッドが淡々と告げるその言葉にリンはエリウッドを見つめ、頭を下げた。

「エリウッド、なんてお礼を言えがいいか…」

『僕がやったのは、どちらにも手を貸さないということだ。』

つまり、僕もキミ達に力を貸すことは出来ないって事だから。申し訳なさそうに告げるエリウツドにリンは首を横に降った。

『……勝算はあるのかい？』

「…勝つわ。」

おじい様をお助けするにはそれしか手がないんだもの！」

リンは自らに言い聞かせるかのようにそう告げた。

『わかった。』

友人として…君達の勝利を願っているよ。』

手を差し出すエリウツドにリンは手を差し出し返した。

「ありがとう。」

あなたの思いやり…決して無駄にしないわ。」

エリウツドが去っていく姿を見守るリン達。

「さあ、行きましょう…みんな！」

リンの言葉に空を見上げていたセインがふとこんな言葉を漏らす。

「いやな雲行きですね。……霧が出てきそうだ。」

「まずいな。」

霧が濃くなると、視界が悪くなり、敵が見えなくなる恐れがあります。」

ケントの言葉にサラが頷く。

「そうね、でも、ここは霧が深くなる前に抜け出しましょう。」

ね、リン。

サラの言葉にリンは無言で頷いた。

「一刻の猶予もならない。」

少しでも城に近づきたいわ。進路を示して…」

サラ。

「とりあえず…城へ行くには最後の難関とも言えるかもしれない、この地の領主の館を抑えなきゃダメね」

サラの言葉にケントが渋い顔をする。

「この地の領主はイーグラール將軍です。ここから南に向かえば、將軍の館にたどり着けるはずです。」

地図を示しながらそう告げるケント。

「とりあえず、敵を撃退しながら領主の館を目指しましょう」

いい？サラ。

「ええ、異存はないわ」

リン。

『来たか…』

向かおうとしたリン達に近づいてきた大きな影…

「ゲツ……」

セインは嫌そうな顔をし、その人物を見つめ、

「貴方は…ワレス殿！」

ケントはその人物を見て驚く。

「ケント、この人は？」

見知った人のようなので、聞いてみるリン。

「キアラン騎士隊の隊長を務めておられた方です。」

「けど、今は引退されて、畑を耕しているはずじゃ？」

ワレスと呼ばれた男はため息を吐く。

『わしもそのつもりだったがな。ラングレン殿から騎士隊に命が下った。』

公女リンデイスを語る不屈き者を討つべし、とな

「……！！！！」

セインとケントは驚きを隠せない。

「あなたまで我等を疑うのですか！？」

『リンデイスを名乗るその娘をわしの前に出せ。』

ワレスから遮るようにセインとケントがリンの前に出る。

「……リンデイス様をどうしようと言っんです？」

『返答いかんによっては、ここで討つ。』

そんなワレスの言葉にケントは剣の鞘に手を掛ける。

「ならば、我らも従うわけには参りません。」

『そうか、ならば……』

ケントの言葉とセインの態度にワレスはただ静かにそう呟く。

『待つて!』

そういつてセインとケントの間を抜けるように前に一歩踏み出すリン。

「私よ、私がそうよ!」

『ほう。』

リンを見ながらワレスは感心したように告げる。

「信じてくれないならそれでもいい。」

でも、仲間同士で戦うような真似はやめて!」

リンの言葉にワレスは瞳を逸らさず、リンを見つめる。

『……ふむ。』

きれいな目をしておるな。』

「えっ……?」

『わしは三十年騎士として生き、一つ学んだ事がある。』

こんなに澄んだ瞳をもつ人間に悪人は居ない。

ふはははは……いいだろう、気に入った!

わしも、お前達と戦わせてもらうぞ。』

そういうワレスを尻目にセインは目を見開く。

「ほ、本気ですか?」

「このわしは、キアランに忠誠を誓った身、正当なる主君にあだ名す輩を許してはおけん。」

行くぞ!!」

ワレスは張り切って隊列に向かっていった。

「ワッワレス様!

・・・相変わらずだな、あの方は…」

ケントの言葉にサラとリンは笑みをこぼす。

「でも、いい方みたいね」

ワレス殿。

サラの言葉にリンも頷く。

「尊敬できる方ですよ」

ケントの言葉にサラは頷いた。

隊列に戻ったリン達はワレス殿を紹介した。

「このまま引退するつもりだったが…やむをえん。

どうやらこいつを使う時がきたようだな。

サラ、この軍の指揮をとっているのはおまえだな？」

「ええ、よろしくお願いいたします。まだ戦には不慣れな部分が多いので、ご指南お願いいたします」

「よかるう。わしはこれを使わせてもらう」

そうして取り出したのは何かの紋章。

「これは騎士の勲章を使ったワシの勇士をみせてやるわい」

クラスチェンジというのを目の当たりにしたリン達。

カレはジェネラルにクラスチェンジする事により、斧が使用可能に。

「フハハハハ…ワシは無敵じゃい!!」

そう叫んで次々と敵を倒していくワレスに圧倒されつつも、リン達は先を勧めていった。

少し先を進むと辺りに霧が立ち込め始めていた。

「サラ…霧が…」

「ええ、でて来たわね。この視界じゃ、辺りに敵がいてもわからないかも…」

不安そうなリンの表情にサラはにこつと微笑む。

「ワレス殿：たいまつをお持ちですか？」

「ふおおふおお。よく知つとるのおくく娘」

「ありがとうございます。」

サラとワレスの話についていく事の出来ない一行は首をかしげる。

「霧が立ち込めるってことは辺りを照らすものさえあればいいって理屈わかるかな？」

まあ、光さえ差し込めばあたりは見やすいつて事」
難しく言ってもわからないから…

そういつて苦笑いを浮かべるサラにリン達は頷く。

「ワレス殿、たいまつで辺りを照らしてください。」

「了解じゃ！！」

ワレスの取り出したたいまつが辺りを照らすと、霧に紛れ、リン達を襲おうとしていた兵士達の姿が浮かび上がる。

「いくぞく、娘っこ！！」

「はいっ！！」

ワレスがまた敵を倒し、ケントとセインもそれに続く。

ウィルとラスの弓で敵を引きつけ、打ち落とす。

フロリーナが敵を惑わし、槍で攻撃。

それをリンがしとめる。

エルクの魔法で敵を焼き尽くし、傷ついた仲間をセーラが癒す。

マシューは情報収集のため、今は参加していない。

リン達の前に敵はなすすべなく消え去り、領主の館まで楽々と来れた。

領主、イーグラ將軍の館の前に立ちはだかるのはイーグラ將軍

自ら。

『リンデイス様の名を語る不届きモノめ！

ここを通すわけにはいかんぞ！！』

鋭い槍先をリンに向け、そう告げるイーグラー。

「私はうそなんてついていない！

信じてくれ…っといつても無駄でしょうけど…」

リンはそれに屈することなく真っ直ぐ視線を合わせてそう告げる。

『…剣を構えよ。いくぞ！！』

だが、槍先を向けたにも関わらず、彼は斧を装備しかえた。

リンは剣を持つ戦士だ、三すくみを知らぬはずはないのに…

「はぁーーーーー！たあっ！！」

リンの一撃必殺がイーグラー將軍を貫く。

イーグラーは反撃することなく、そこに身体を倒した。

『早く…行け…侯爵は何も知らぬまま…

病と見せかけ…毒で…命を削られている…

侯爵を…キアランを…頼む』

それだけ告げるとイーグラー將軍は息を引き取った。

「イーグラー…おぬし…わざと…」

ワレスの言葉はイーグラーにはもお聞こえはしない。

だが、イーグラーの顔は穏やかだった。

夜遅くなったため、館に泊まる事にしたリン達。

ワレスはイーグラーの亡骸を埋葬する為、少しの間、陣地を離れる。

リンは夜遅くにサラと共に空を見上げる。

それに付き合うケントとセイン。

「…イーグラー將軍ってどんな人だったの？」

リンの間にケントは空を見上げ、呟く。

「私とセインが初めて配属された部隊の隊長で…

恩師でした。」

そう告げるケントにサラは…

「あの將軍は私達のこと、よくわかってらしたようね。」

「…なら、なんでこんな争いを？」

リンはわからないという表情でサラを見つめる。

「なにか…ラングレン殿に弱みを握られてたんじゃないでしょうか？」

たとえば、家族とか、兵士とか…」

人質に取られていた…とか。

「……………」

セインの言葉にリンは拳を握り締める。

「……ラングレンに母なる大地の怒りを！！

誰にも出来ないのなら、私達があいつを倒す！」

そう呟いたリンにケント達は頷く。

そんな3人を見て、サラは呟く。

「どうして人は…争いをしたがるのかしら…」

「…サラ殿？」

不思議そうに首をかしげ、サラを見るケント。

「みな同じ大地の住人、誰が上かなんてどうしてわかるのかしら？」

ただなんとなく呟いたサラがリンは遠くに感じた。

「サラ…」

「別に気にしないで…」

ただの独り言よ。

そう呟くサラにリンは何か気になるようだった。

「リン、明日にはキアラン領に入るんだもの、休みましょう」

「そうね。」

「お休みなさいませ…」

「お休みなさい」

ケントとセインは見張りをするらしい。

「あなた達も明日に備えて早く眠りなさいね。」
期待しているのだから…

サラの言葉に頷く2人。

サラはあてがわれた部屋から窓の外を見上げる。

「上限の月…悲しき再会…

明日で一区切り…優勢は我らにある。」

ただそう呟くとカーテンを締め、布団にもぐりこんだ。

悲しき再会（後書き）

エリウッドが出てきましたね。
さあ、どうなるやら。

遙かなる草原（前書き）

イーグラー將軍を倒し、リンたちは、いよいよキアラン城へ迫る。
城には、リンの仇敵、候弟ラングレンがいる。

キアラン候の座を得んが為、リンと祖父の殺害を目論んだ男…
災いの元凶を断つべく、リンは駆ける。

遙かなる草原

第10章 遙かなる草原

イーグラー將軍を倒し、リンたちは、いよいよキアラン城へ迫る。城には、リンの仇敵、候弟ラングレンがいる。

キアラン候の座を得んが為、リンと祖父の殺害を目論んだ男…災いの元凶を断つべく、リンは駆ける。

「リンデイス様、山を迂回すればキアランの城が見えるはずです。ケントの言葉にリンはその山を見据え、瞳を閉じる。」

「お爺様 もうすぐ、

お会いできるのね…」

「全てはこの戦いにかかっています。」

あてにしていた、近隣の領地からの援軍も出ない今…

ラングレン殿も、死力がかかってくるでしょうから！

でれだけの数で来ようと負けない！」

お爺様にお会いする…それだけの為に…

「それだけの為に、ここまで来たんだモノ。」

そう呟くリンは、今までのどんなリンより気高く、美しかった。

「サラ…これが私達の最後の試練よ。」

「わかってる。」

あなたの為に、全力を尽くすわ。

「みんな！どうか私に力を貸して。」

リンの言葉に皆が頷く。

それはリンだけの為の望みじゃない、みな望みだからだ。

キアラン領にはいるや否や、敵に襲われるリン達。

サラの機転で森の中に最初配備していたのが良かったのか、ダメージはない。

「サラ、あなたのおかげよ。ありがとう」

「気にしないで、軍師としては当然よ。」

サラの笑顔にリンも微笑む。

「フロリーナ、準備はいい？」

「はい。サラ。」

フロリーナはウィルをつれ、飛ぶ準備を整えている。

「フロリーナ…あなた…」

男性恐怖症は？

リンが目を見開くのも無理はなかった、だが…

「いつまでも怯えてたらダメなもの。それにウィルは仲間だし…」
大丈夫。

「敵にもアーチャーがいるわ、きっと。こっちの軍勢は知られてい
ると想うの、

でもそれを美味しく利用すれば、敵を倒せるチャンスなもの。」
でも、くれぐれも気をつけて。

サラの言葉にウィル、フロリーナが頷いた。

「では、全体で固まって最初は行動する事にするわ。

「この地点まで行ったら、さつき説明したとおりにして。」

「お願いします。」

「サラ…」

天候が…

「ええ、崩れるわね、とりあえず、今のうちに行動しましょう。」
広い場所まで出なくて…

サラの指示道理に皆が動く。

ラスとウィルが弓で敵を攻撃し、フロリーナも槍でトドメをさす。
ワレスとドルカスが戦闘に立ち、槍を持つ兵士達を撃退していく。
ケントとセインも剣を槍に持ち替え、応戦。

ニルスは笛で味方を励まし、仲間もそれに答える。

セーラはライブで味方の傷を癒し、手助けをする。

マシューの素早さは近隣の住人に伝えるためには必須で、情報もピカイチ。

そして…向かった先はキアラン城。

出迎えたのはラングレン。

『来たか…』

セイン…お前は、堅物のケントと違って話のわかる男だな。

リンデイスを裏切って、こちらにつけ。地位は保証してやるぞ。』

ラングレンの言葉にセインは怒るキモチを押さえ、あくまでも騎士として振舞う。

「…ありがたいお申しで、痛み入ります。」

セインの言葉を了解と取ったのか、うれしそうなラングレン。

『では…』

「でも、俺、その堅物との相棒関係解消する気ないんですよ。

それに仕えるんなら、あんたより断然リンデイス様がいい!」

そういつて笑顔を向けるセイン。

その言葉に豹変したラングレン。

『痴れ者が！その選択、後悔させてやるわ！！』
相手は手槍で攻撃をしてくる。

手傷を負うセイン。

「セイン！！」

駆け寄るケントに笑みを浮かべるセイン。

「大丈夫だって！」

ちっとしたかすり傷。

「セーラ…」

サラの声にセーラは杖を翳し、傷を癒す。

『わしの領地に無断で入り込み追って…生きてここからでられると
想うな！』

そう呟くと次々と手槍を投げってくるラングレン。

その攻撃力は凄まじく。セーラの回復では追いつかない。

だが…

『エルク！』

サラの声に反応するようにエルクはサラから渡された書を翳す。

「天地に響く雷よ、我前にありし敵に捌きを！！」

その書から雷が起こり、ラングレンをつらぬく。

『いまいましい…サカの小娘めが…』

キアラン候の座は…わ…ワシの…』

そう呟くと倒れこむラングレン。

最後の敵としてはすごく強かった。

キアラン城に足を踏み入れたリン。

「勝ったわ…これでおじいさまに・・・」

『リンデイス様…ですね?』

突然話し掛けられ、驚くリン。

「あなたは?」

『キアラン侯爵家の宰相を務めますレーゼマンと申します。

ケントとセインから報告を受けておりましたが、

ラングレンに見つかり、今まで監禁されておりました。』

ご無事のご帰還…お待ち申し上げておりました。

そういつて頭を垂れる男。

「ありがとうございます。それで、お爺様には合える?」

そういつとレーゼンマンはうれしそうに微笑み、

『はい、もちろんでございます。』

ラングレンが侯爵のお食事にかけてまで毒を盛っていたようで、す

っかり身体を壊され、

床にふせっておられますが・・・』

あなた様の顔を見たらいつぱいでしょう。

そういつて笑顔で案内してくれるレーゼマンの後をついていき、
一つの部屋のドアをそつとあけるリン。

『・・・誰じゃ?』

年老いた男の声だった。

『わしは、誰にも会わぬと言っておるだろう。』

「……………」

リンはその声に立ちすくむ。

『なにをしておる。早く出て行かんか……』

そう言われ、一歩引くリンの後ろからサラが支える。

「リン…あなたのお孫のリンデイスです。」

『!?!リンデイスじゃと…まさか。』

「リン…あなたのお父様の名と母上の名を……」

サラに促され、リンは告げた。

「父の名はハサル。母の名は…マデリン。

15歳まで草原で育ちました。」

その言葉に触発されたのか、男は驚いたような声を発した。

「……まことなのか？」

こつ、こつちへ顔を良く見せてくれ…」

リンの背中を押し、サラはそつと扉を閉めた。

『おお…ま、間違いない…』

マデリンによく似て…おお、おお…』

「おじいさま!!」

ハウゼンは涙を流しながら、リンを抱き締めた。

「ラングレンは、娘は死んだと言っておった。孫のお前も…死んでしまったと。」

よくぞ…よくぞ生きて…おお…神よ…!」

「父と母は昨年、山賊によって命を奪われました…」

私だけ…こうして生きて…お目に…」

「リンデイスよ、この愚かな老人を許してくれ。

ワシが、2人を認めていれば…山賊に襲われる事などなく…」

この地で平和に暮らせたらうに。」

ハウゼンはリンに謝る。

だが、リンは首を横に振った。

「お爺さま。私達親子は、家族3人ずっと…幸せに暮らしてきました。悲劇は起きてしまったけど…でも…それまで本当に…」

本当に幸せだったんです。」

「そうか…マデリンは幸せに生きたのだな…」
それを聴けただけで…よかった。

「ありがとう、リンデイス。」

これで思い残す事はない…」

「！！」

そんなこと言わないで！！」

リンは悲しそうな表情でハウゼンを見つめる。

「リンデイス、わしはもうだめじゃ…」

長く毒に蝕まれた体はもとは戻らん…」

ハウゼンの手をしっかり握り、強い瞳で見つめるリンデイス。

「心を強くもって、お爺様！治るって信じるの！！」

草原では、心の強さが病を払うといわれているわ！

私がついているから負けないで、おじいさま！！」

「…おまえと一緒に？」

「そうよ。」

これから一緒にお話したり、散歩したり、音楽を聞いたり…！」

たくさん、たくさんしたいことがあるわ！

リンの微笑みにハウゼンも自然と笑みを零す。

「それは…楽しそうだ…」

「そうでしょ！？」

それから、元気になったたらお爺様にも、草原にきて欲しいわ。

どこまでも広がる空、風渡る草の海…

母さんが愛した大地をおじいさまにも知っていただきたいの！」

「マデリンの愛した大地…」

そうだな。わしにはまだたくさん、やることがあるな。」

ハウゼンはそう呟き、瞳を閉じた。

「がんばって、おじいさま！！」

リンは強くハウゼンの手を握り返した。

「リンデイス…」

ハウゼンはリンの介護とサラの薬草の知識により、少しずつ回復の兆しが見え始めた。

「よかったわね。リン」

「ええ、でも、サラの薬草の知識もたいしたものね」
どこで覚えたの？

不思議そうに城の中庭で話している2人。

そんな時、セインとケントが二人に近づいてきた。

「リンデイス様！この城に残られるって本当ですか？」

「あら、セイン。」

ええ、お爺さまが元気になるまで…おそばを離れられないわ」

そういうとセインはうれしそうに微笑む。

「ハウゼン様の容態が見違えるようになったと医師が申しとおりました。」

早めの処置が良かったのだと…

そういうケントにリンは笑みを浮かべる。

「処置はサラがやってくれたの。軍師としてだけじゃなく、薬草の知識もあるなんて…」

知らなかったのよ、私も。

いたずらっぽい笑みを浮かべ、リンはサラを見る。

サラは肩を竦め、苦笑いを浮かべていた。

「すべてリンデイス様とサラさんのおかげですね。」

「私の大切な…ただ一人の家族。」

・・・長生きしていただきたいわ。」

そんなリン達の所に紫色の少女が近づいてきた。

「リンデイスさま！」

「フロリーナ？」

近づいて来たのは天馬騎士のフロリーナだった。

「私、このキアラン侯爵家で雇っていただけの事になったの！」

これからも、リン…いえ、リンデイス様と一緒にいられるわ」

「本当に！？それはすごくうれしいけど…」

その、「リンデイス様」ってのはやめて。リンでいいじゃない」

ね、サラ。

サラに助けを求めるが、苦笑いを浮かべるだけ。

「…私はここで雇っていただき、あなたの臣下になったのよ。はじめはつけないといけないわ」

「フロリーナ！」

「あなたと一緒にいられる事が、私の…一番の幸せなの。」

それは呼び方よりもっと大事な事、だから…お願いね」

フロリーナの言葉に戸惑うリン。

「リン、あなたはこの城の主、ハウゼンの孫娘。

公式の場では仕方ないわ。あきらめなさい」

サラの言葉に一瞬押し黙るリン、だが…

「…一緒にいるためには、我慢するしかないのね？わかったわ。あきらめのため息を付くリンに抱きつくフロリーナ。」

「ありがとう！大好きよ、リン！」

じゃなくて…リンデイス様

そういうとフロリーナは笑顔を向けた。

「クスツ、もう、フロリーナったら」

「リンデイス様、俺もココに残ります。」

そう告げたのはウィル。

「ウィル！あなた故郷に帰るんじゃないの？」

不思議そうに尋ねるリンにウィルは苦笑い。

「それが、おれ、すっかり”リンデイス傭兵団”が気にいっちゃって…」

ケントさん、セインさんとも別れがたいし…

故郷へはそのうち便りでも出しますよ」

ウィルのうれしい申し出にリンの顔も緩む。

「そう、うれしいわ。これからもよろしくね。ウィル。」

「はい！」

夕方になり、城ではリンの歓迎会とハウゼンの復帰を願い、宴が催された。
会場は喜びに満ち溢れ、人々はキアランがよい方向に向かうようにと願う。

『失礼します…』

「……サラ殿…」

その部屋に入ってきた人物にハウゼンは頭を下げた。

『このたびは…』

「堅苦しいのはやめましょう…。あなたの父君には世話になった」

『………』

黙り込むサラにハウゼンは窓から外を眺める。

「孫娘を助けていただき…ありがとうございます」

本来なら、それもあつかましいと思うが…

そう告げるハウゼンにサラは首を横に振った。

『父の知り合いのあなたの孫だからじゃありません。』

私もリンに助けられたから…

『リンはきっと立派な領主になるわ』

「……サラ殿…」

ムリを承知で願い奉る。

「リンデイスを助けてはもらえぬか？」

この地で…

そう告げるハウゼンにサラは首を横に振った。

『私にはまだやることがあるわ。それは聞けません』

「……………すまない」

まだ宴も酣な中、城門から出てくる一人の女性が…

「リン、今日の主役が何処へ行くの？」

「サラっ！！」

旅支度を終えたサラが城をでようとしていたのだ。

「サラ…あなたは、行ってしまうのね？」

「ええ。」

「うつん、引きとめようとしてるんじゃないの。」

ただ、寂しくなるなっと思って…」

「リン…」

「…草原であなたを助けた時は、こんなに長く一緒に旅をするとは想わなかったね。」

「そうね、随分長い旅だったね」

「私から教えられる事はもうない。殆どサラに手間かけさせっぱなしだったもの。」

「私も色々リンから学んだわ。人ってすごいね」

サラは笑顔で手を差し出す。

それを握り返すリン。

「サラ、これからがんばってね。サラなら立派な軍師になれるわ。相棒だった私が保証する。」

「ありがとう。」

そして抱き合う2人。

「本当は…サラもココにいてくれるとうれしい…でも…」

「リン…絶対いつか逢えるわ。うつん、逢いに来るから…」

「…うん…絶対…また逢おうね。」

だから、さよならなんていわない。

「それじゃ、元気で…。またどこかで絶対逢おうね。」

「いつかきつとどこかで…」
逢えるわ。

そういうとサラは一度も後ろを振り返ることなく、立ち去った。

『サラ…様』

サラが出て来て、少し人里から隠れるような場所に立ち行ったのを見計らい、

2つの人影が近づいてきた。

「お前たち…」

『いかがでしたか？』

人々の様子は？

「まだ安心は出来ない。きっと何かが起ころうとしているはずだ。
起こる前に原因を取り除かなくては…」

サラは神妙な様子でそう告げた。

2人もそれに頷きかえす。

『では、もう少し各地を見回りますか？』

「お願い」

『サラ様もご無理はなさらぬように』

「お前たちもな」

そう告げると二つの影は消え、そこにはサラだけが残った。
後ろを始めて振り返り、キアラン城の方へと視線を投げる。

「願わくば…リン達に火の粉が降りかからぬことを…」
そう呟き、また歩き始めたのだった。

時折、城近くの可に一人たち、サカの方角を見つめるリンの姿があ

るという。

ただ、近くで草原を懐かしんでいたのか…

はたまた、親友の安否を願っているのかは誰にもわからない。

遙かなる草原（後書き）

リンと別れたサラ。

彼女に寄り添う二つの影。

さあ、第二章…はじまりますよ。

エリウツドの章（前書き）

リン達の戦いが終わり、その一年後…
また新たな戦が勃発しようとしていた…

エリウッドの章

第二章

第一話：旅の始まり

リン達の戦いが終わり、その一年後：
また新たな戦が勃発しようとしていた…

かつて人と竜が相争った”人竜戦役”……………

その戦いにおいて、竜を打ち倒し、人に勝利をもたらした八人の英雄がいた。

”八神将”と賞される彼らはエレブ大陸に平和をもたらし、人々はさまざまな国に別れながら、緩やかな繁栄をとげていった。

英雄ハルトムートが興した東の武勇の国『ベルン王国』

聖女エリミィヌの御名が広まる西の芸術の国『エトルリア王国』

神騎兵ハノンの愛した草原を駆ける遊牧民達の『サカ諸部族』

騎士バリガンの故郷イリアに集う傭兵達の『イリア諸騎士団』

狂戦士テュルバンが最後を遂げた荒くれ者達の未開地『西方三島』

大賢者アトスが隠遁したと言われる不毛の大地『ナバタ砂漠』

そして、勇者ローランを祖先にもつ諸侯たちの『リキア同盟』

エレブ新暦980年………

長きにわたる大陸の安定はこのまま保たれるかに見えた…

リキア同盟の一つ、フェレ侯爵領。

長らく争いとは無縁だったこの地に今、重苦しい不安の影がさしていた。

名君と称えられ、民達に慕われていたフェレ侯爵エルバードが、配下の騎士達と共に謎の失踪をとげたのだ。

一月たってもフェレ侯の行方は知れず、もはや、命はないものと噂されていた。

しかし、その息子は父親の無事を固く信じ、父を捜すたびに出る事を決意する。

フェレ侯公子エリウッド。

後にリキアの騎士とたたわれる紅髪の公子彼の長い旅が今、始まるうとしていた。

『エリウッド様、出発の準備が整いましたぞ。』

彼はマーカス。

「そうか。ありがとう、マーカス」

彼はエリウッド。

今日がエリウッドの旅立ちの日である。

近くまでどうしても見送りに行くと聞かない母を連れ、城を出た。

「母上、そろそろ出発いたします」

エリウッドの言葉に紫色の髪をした女性が心配そうな視線を向ける。
『エリウッド…無事で戻るのですよ。』

お父様の事は心配ですが…このうえ、おまえまで失うような事があれば、

この母は、生きてなどいられないでしょう。』

母の心配そうな顔つきにエリウッドは深く頷いた。

「わかっています。ですが、大丈夫。」

父上は、きっと生きています。

必ず、僕が探し出し、母上のもとに戻ると誓います。」

エリウッドの心強い言葉にその女性は安堵の笑みを浮かべた。

『約束ですよ。』

「はい。」

後ろに控えている騎士の少女に視線を移し、

「イサドラ…、僕のいない間、母上を頼むよ。」

『はっ、お任せください。』

イサドラの言葉に笑みを浮かべるエリウッド。

「では、母上、行ってまいります」

エリウッドの言葉に頷くとイサドラに促され、城に入る。

「さて、マーカス。当分は2人旅だ」

エリウッドがマーカスにそう告げると、マーカスは町のを向いて誰かを捜す。

「いえ、私の直属の部下、ロウエンもお供します。」

「ロウエンが？それは頼もしいな。」

「ロウエンにはこの先にある村で腕に覚えのある男を数名雇ってお

くよう命じました。

本来なら一小隊も連れて行きたいところですが…

エリウッド様たつてのご希望がございますからな。」

そついつて苦笑いを浮かべるマーカスに、

「……………すまない。」

だが、兵は一人でも多く母上の護衛に残しておきたい。

何しろ、フェレの精鋭部隊も父上と共に、いなくなってしまった。

僕が留守の間に、なにかがおきた時のためにも……………」

視線を下げ、そう告げるエリウッドにマーカスは頷いた。

「わかつております。」

ふむ、しかしロウエンのやつめ、遅いですな」

先を見据えるマーカスにエリウッドも町の方に視線をやる。

だが、この先の町では山賊どもの襲撃にあつていたので。

「フェレ騎士どもは全滅したつて噂だよな？」

その男は無精ひげを生やしたいかにも山賊という風情の男。

男は口元を上げると、いかにも偉そうな口調で叫ぶ。

「おい、おまえら！」

今日からこの村の支配者はこのおれ、グロズヌイ様だ！

とりあえず金目のものをありつたけ持つてきやがれ！」

そう叫ぶ男を尻目に村から飛び出していく騎士。

その後ろには2人の少女がついてきていた。

「エツエリウッド様！！」

マーカス將軍っつー！！」

慌てた様子で走ってきた馬に乗っていた人物はエリウッドたちが待

つていた人物だった。

「ロウエン！何をそんなにあわてておるか！！
騎士たるものいかなる時も落ち着きを…」

マーカスがそう諭す。

だが、ロウエンはまだ荒く息をついたまま、

「村に山賊があらわれましたっ！！」

「な、なんじゃとっ！？」

これにはマーカスも驚いたようだ。

「本当か？ロウエン。」

「詳しい話はこの者から・・・」

そういつて紹介したのは緑の髪に黄緑のバンダナを巻いた少女。
『エリウツド様ですか？』

わたしは、村長の娘でレベッカといいます。

突然あらわれた山賊どもがこの一帯を荒らしているんです！

お願いします！どうかわたしたちを助けてください！』

レベッカの頼みを快く引き受けたエリウツド。

「マーカス、ロウエン、村を救うぞ。」

「はっ！！」

ロウエンは息を整え、武器を手にもつ。

「レベッカ、きみはどこかに隠れて…」

そう告げるエリウツドだが、レベッカは片手に弓を持ち、戦う気分。

「いいえ、お邪魔でなければ私も戦わせてください。

毎日狩りはしていますし、弓には少し自信があります。

それに…」

「それに？」

「ある方に弓の使い方は習いました。大丈夫です」

「そうか、ムリはしないでくれよ」

「はい。」

笑顔で頭を下げるレベッカ。

そして、ロウエンがエリウッドに紹介したい人がいるといって案内してきたのだ。

「それから、エリウッド様。ちょうど村に滞在されていた軍師どのが、

我々に協力したいと申し出ておられるのですが」

「軍師？」

「サラ殿、こちらです」

その名を聞いて、エリウッドは驚きに止まる。

「あなたは、サラ殿」

「お久しぶりです、エリウッド様。ご無沙汰しておりました」
エリウッドとサラの話に首をかしげるロウエン。

「ご存知なのですか？」

「サラ殿とは昨年のキアラン内乱でお会いした事があるんだ。
優れた知略の持ち主で、この方がいなければキアラン候と孫娘リンデイスの命はなかった……」

そのエリウッドの言葉にサラは苦笑いをする。

「そんな大それたものではないですよ。私なんてまだまだ……
ひよっこです。」

そう告げるサラにエリウッドは首を横に振る。

「ご謙遜を……」

「ただ……」

「そのあなたが、どうしてこのフェレに？」

「リンを無事にキアランに届けたら私の役目は終わりました。
私はまだ修行中の身……まだまだ学ばねばと旅に出たんです」

「そうでしたか……しかし、偶然の再会に感謝しましょう。」

是非、我々に力を貸してください。あなたの軍略なら信頼できる。
よろしくお願いいたします」

頭を下げるエリウッドにサラはにこつと微笑んだ。

「こちらこそ、微力ではありますが、ご協力させてください。」
手を取り合い、微笑む姿にレベッカはうれしそう。

「サラさんに私、弓を教えていただいたんです。」

「では、サラさんも戦いを？」

「ええ、剣、弓、槍、なんでも一通りは。」

「知略だけでなく、戦えるなんて……」

感心したようなエリウッドにマーカス達もサラを受け入れたようだ。

「サラ殿。ご指示をお願いします。」

「目的はこの山の先にある村にいる山賊の頭の撃退。」

レベッカ。相手を油断させるにはあなたの弓が一番だわ、頼みます」

「了解。」

レベッカの弓で相手を油断させ、マーカス、ロウエン、エリウッドがそれを叩く。

サラも戦おうと想うのだが、3人の剣技、槍捌きの前に動く事すらしなくてよかった。

そして、少し抜けた先の町でドルカスとバートルが仲間に。

山賊たちはサラの知略の前にひれ伏し、倒れていった。

そして、村を護っていた山賊、グロズヌイの前になんなく現れた。

『なんだあ、てめーら？』

この俺に逆らう気……

フ、フェレ騎士ども！？聞いてねーぞ！』

慌てた様子のグロズヌイだが、マーカスの剣技の前に、難なく倒れ

る。

『つ、付いてねえ・・・』

倒れるグロスヌイ。

町に入ると、レベッカが一人の老人に飛びつく。

「父さん!!」

『おお、レベッカ』

どうやらこの村長のようだ。

『これは、これはエリウッド様ですな？』

このたびは、村を救っていただき、誠にありがとうございます。』

お礼を述べる村長に首を横に振るエリウッド。

「礼には及びません。」

領民を護るのは、当然の事ですから。」

『いやいや、そんなことはありませんぞ。』

西のほうにあるラウス領…あそこは、ひどいもんですじゃ。

領主ダーレンは戦の準備に忙しく、領内の村々が、山賊や盗賊どもに

襲われても、知らぬフリとか。』

村長の言葉にエリウッドの顔色が代わる。

「戦の準備…？まさか。」

『ウソではございませんぞ。』

つい先日ですが、ラウスに住んでいた、わしの弟が住む家を
焼かれ、

どうにもなくなり、ここまで逃げてきましたな。

弟の話では、もうすぐにでも戦が起こせるような状態だと

ラウスの民は、みな噂をしておるそうですぞ。』

その村長の話に信憑性を見出したのか、マークスがエリウッドに耳
打ちする。

「エリウッド様！今の話が事実だとすると、ちと厄介ですな。」

この時期に戦を興すとなれば…相手は、同じリキア内の領地である可能性が高い。

もしかすると…エルバート様はそのことに巻き込まれたのでは！
？」

「…父の失踪と関係があるかはわからないが、他に有力な手がかりがあるわけでもない…
よし、ラウスへ向かおう。調べたほうがよさそうだ。」

エリウツドの判断にマーカスらは頷いた。

村を出るとエリウツドはサラに近づく。

「サラ殿、先ほどはありがとうございました」

あなたのおかげで戦闘がスムーズに行きました。

「お役に立てて光栄です。」

そういつて微笑むサラ。

「…ところでこれからのご予定は？」

もし、お決まりでないなら、このまま僕の旅に、ご同行願えませんか？

事情があつて、少ない人数で行動しています。

いざという時に、あなたのような方が傍にいてくださるととても助かるのですが…」

エリウツドの言葉にサラは頷いた。

「構いませんよ。特に宛はありませんから。」

「本当ですか？ありがとうございます。」

ではこれから暫く、よろしくお願いいたします…！」

「こちらこそ。」

エリウツドに手を差し伸べるサラ。

それを握り返すエリウツド。

マーカス達も一通り歩きながら挨拶を交わす。

「またそなたの世話になる…」

「ドルカス殿、軍師としてはまだまだ未熟。よろしくお願いいたします」

「サラ殿の力は信じている」

「ありがとうございます。」

『待つて~~~~~!!』

追いかけてきたのはレベッカだった。

「レベッカ…」

慌てるエリウツドを尻目にサラはきょとした顔で追いかけてきたレベッカを観る。

「私も連れて行ってください」

必ずお役に立ちますから…

そういったレベッカを返せるものがいようか？

それにここから一人で返したらいつ山賊の餌食になるかもしれない。考えに考えた末、エリウツドはサラに同意を求めるかのように視線を投げる。

「サラさん…」

返答を求めるエリウツドに頷くサラ。

「レベッカ、危ないと想ったら…」

「大丈夫です。サラさんは危ない事はしないです」

「…ふふ。信頼してくれてありがとうございます」

肝に命じておくわ。

サラの言葉に一向に新しい仲間が加わった。

エリウツドの章（後書き）

新たな戦い…さあ、どうなりますかね？
っていうかサラはどれくらい出来るんでしょうね？

比翼の友（前書き）

ようやく旅立てました。
さあ、これからが正念場

比翼の友

第12話 比翼の友

村長から気になる話を聞かされたエリウッド達は、まずラウス領へと向かう事にした。

フェレからラウスには間にあるサントルス領を抜けてゆく。オスティアへと旅立ち、消息を絶った父もこのサントルスを通過した可能性は高い。

エリウッド達は領主を尋ね、詳しい話を聞くつもりだった。

「エリウッド様・・・いきなり少数でラウス領に入るのではなく、サントルス領の領主様に

力添えを頂いたほうがよろしいかと思います」

サラの言葉にエリウッドは頷く。

「ああ・・・僕もそう思う。」

「サラ殿はなかなかの切れ者ですな。」

マーカスの言葉にサラは苦笑いを浮かべる。

「ふふ、そんな事ありませんわ。」

「いや、本当に。やはり一緒に来ていただいてよかった。」

笑みを浮かべるエリウッドにサラも微笑み返す。

「・・・サントルス候、ヘルマン殿は父の友人であるだけでなく、僕自身もよく知る間柄です。」

きつと力になってくれるでしょう。

「マーカス、謁見を申し入れてくれ。」

「承知！」

マーカスを使いに行るエリウッド。

だが・・・

「！！！」

「どうした？ロウエン・・・」

使いに行こうとしたマーカスを留まらせ、辺りをうかがう。

「・・・エリウッド様、少し下がっていらしてください」

サラの言葉にエリウッドは辺りをうかがう。

そこへ一匹のごろつきが近づいてきた。

『へっへっへっ、ダンナ方。あわれな村人にお恵みくだせえ。』

どう見てもごろつきにしか見えない。

「あなたの何処をみたら村人に見えるのかしら？」

サラの言葉にレベツカも弓を構える。

「大人しく道をあけてもらおうか・・・さもないと・・・」

マーカスの言葉にごろつきはいやらしい笑みを浮かべ、一行を見つめる。

『さもないと？へへっ、大変な目にあうのはどっちですかねえ。』

近くにいた手下らしきものに後ろ手を振るごろつき。

「なにっ！？」

その異変に気づいたマーカスはエリウッドを守るように立ちはだかる。

『そのぼっちゃんに生きていられると困る人がいるんでね。』

かわいそうだが、消えてもらっぞー！』

やろつども、始末しちまえっ！！

ごろつきの言葉にわんさかと手下が集まってきた。

「とりあえず、一時後退してください」
指示を出します。

サラの適切な判断に一行は後ろに一步步後退していく。
場所につくまでに攻撃されたが、レベツカの弓とバルカスの手斧で
難なく撃退。

「・・・出番のようだな、サラ

一年前のことといい・・・お前とは本当に縁があるな。」

ドルカスの言葉に苦笑いをするサラ。

「そういえば、ナタリーさんはどうしてます？」

「ああ・・・ナタリーならフェレに残してある。あいつのためにも
今度こそまっとうな金を稼ぐつもりだ。」

指示を頼む。お前なら・・・信頼できる。

ドルカスの言葉に強く頷くサラ。

「先行をマーカス殿、ロウエン殿、ドルカス殿にお任せします。

マーカス殿は山間で敵を足止めしてください。

レベツカ、あなたの弓の腕なら助けになるわ。」

頼みます。

サラの言葉に弓矢を強く握り締め、頷くレベツカ。

「ドルカスさんとバルカスさんは向かってくる敵の撃退を。

相手も同じ斧を使うでしょう、気をつけて。」

何かあったらこちらに指示を仰いでください。

「了解！」

「ああ、わかった」

「ロウエンさんはエリウッド様と共に背後から回ります。」
よろしいですか？

サラの指示に誰も逆らうものなどいない。
「では頼みます」

サラの指示は適切で、山賊どもを次々と撃退してく一行。
だが、次から次へと沸いてくる山賊に少しずつ焦りが見えてきた。
「……………一体、何人いるんだ！？」

このままでは……………」

エリウッドが苦い表情をする。

だが、サラはそんなエリウッドに……………」

「大丈夫。私も打って出るわ。」

でもまだそのときじゃない。

「サラ……………さん？」

「状況が変わる……………もう少しの辛抱よ」

ボスはザガンというごろつきで、鋼の斧を装備している。
そいつをマーカスが倒し、他の敵を撃破していく。

そんな時だった……………」

「ヘクトル……………」

ヘクトルじゃないか……………」

見知った顔を見つけ、エリウッド。

『おう！エリウッド』

ヘクトルと呼ばれた男はにかつと笑い、

「ヘクトル……………」

「どうしてここに!？」

『話は後だろう?こいつらを片付けちまおうぜ!』
ヘクトルにそういわれ、頷くエリウッド。

最後のアーチャーを倒した後、近寄ってきたヘクトル。

『ふう、やっと終わったか。』

「ヘクトル!まさか君が来てくれるとは……!!」
エリウッドの言葉にヘクトルは笑う。

『よおつ、久しぶりだな、エリウッド。』

「ああ、一年ぶりだな……。どうして、ここに?」
首をかしげるエリウッドにヘクトルは息を一つ吐く。

『……。水くせえよ、お前』

「?」

何の事だ?とでも言わんエリウッド。

『親父さんを捜すんだろう?』

「だったらオレにも一声掛けるよ」

「だが、オスティアは今、新侯爵ウーゼル様の元、
体制づくりで大変な時じゃないか。」

侯爵には弟であるキミの支えが必要なはずだ」

エリウッドの言葉にヘクトルは「ハア……」とまたため息を一つ
こぼす。

『兄上は、そんなにヤワな男じゃねーよ。』

表向きはなんだかんだ言ってたが、俺が動くの、全部判ってて見
逃してくれたみてーだからな。』

「……。そうか、ならばウーゼル様のご厚意に甘えよう」

そういつてエリウッドは手を差し出した。

「ありがとう、ヘクトル。とても心強いよ。」

『まかせとけて。』
手を握り返すヘクトルの顔は昔見た少年の顔だった。

ヘクトルが従者として連れてきたのはオズイン。
どうやらウーゼルがヘクトル一人だと心配だと危惧した為だという。

そして、セーラとマシユー

ヘクトルが語る噂話にエリウッドは苦い顔をした。
『ベルンの暗殺団がリキアで不審な動きをしているとか、
腕に覚えのある賞金稼ぎが傭兵やなんかが失踪しているとか・・・
な。』

マーカスが気になっていた、先ほどの男の言葉。

「エリウッド様が生きていては都合が悪い者がいると」

マーカスの言葉に困惑気味のヘクトル。

『ふーん・・・くさいな。』

そういえば、ここの役人の態度もおかしかったなー。

貴族のお前が目の前で襲われてたのわかってて見殺しにしようとしてたぜ』

ヘクトルの話を聞き、エリウッドはサラに向き直る。

「サラ殿はどう思われますか？」

「ここはサントルス候のお膝元・・・ということはあのごろつき達
によってヘルマン様にも

なんらかの危険が迫っていると考えた方が妥当だと。」

「・・・そうですね、確かに。」

ヘルマン様の身にも何かが起きているかもしれません。わかりました。直ちに城に向かいましょう」

エリウツドの言葉にサラは頷いた。

「それがいいと思います。」

そんな2人のやり取りを見ていたヘクトルは首をかしげた。

『エリウツド・・・こいつは？』

「ああ、サラ殿だ。」

父上の行方を捜すために、お知恵を借りている」

そう告げるエリウツドにヘクトルはへえ〜と声を漏らす。

『へえ、フェレ軍師つてどこか？』

なるほど、さっきの戦いの指揮はこいつの策つてわけか。

しかし、サラ、ずいぶん若いな』

そういつてサラの周りを歩き回るヘクトル。

『オスティアにも何人か軍師はいるが、お前ほど若い奴はいないぜ。』

エリウツド、本当に大丈夫なんだろうな？』

心配そうな様子のヘクトルにエリウツドは・・・

「サラ殿はまだ軍師見習いだそうだけど・・・」

僕らにいつもの確な指示をくださる。信頼できる方だよ。」

『へえ、じゃあ、これからお手並み拝見と行くか。』

よろしく頼むぜ、サラ殿』

「こちらこそ、微力ながら力を尽くさせてもらいます。」

よろしく願いますね。

そういつて差し出された手を握り返した。

『あれ？』

近づいてきたのはマシュー

「よっ！元気だったか？サラさん」

一年ぶりじゃねえ？

につこり笑顔のマシューにサラも負けずにつこりと微笑む。

「ええ、お久しぶり。やっぱりただの盗賊じゃなかったみたいね」

「え？俺の正体・・・わかってたの？」

チエツ、やっぱりお見通しか。

ふてくされるマシューだったが、なんでもないことのように言葉を続けた。

「そ、なぞの腕利き盗賊は世を忍ぶ仮の姿・・・

その正体は・・・オスティアの密偵だったってこと」

驚いた？

茶目つ気たつぷりでそう告げるマシューに苦笑いのサラ。

「ふふ、これからまた一緒のようね。よろしくお願いするわ」
期待してる。

そのサラの言葉ににこつと微笑み、

「こちらこそ。」

握手を交わす2人。

そんな二人を見つけたらしい声が・・・

「あ~~~~~~~~!!」

「あら？」

来たのはピンクの髪を二つに縛っているセーラ。

「あなたってば、サラじゃない!!」

やだっ、すっごいひさしぶり!

私に会いたかったでしょ？やっぱりね~~~~」

変わらないセーラにくすくすと笑みを浮かべるサラ。

「ふふ、何も言っていないわよ、まだ。」

その言葉にきよんとするセーラ。

「え？言つてなかった？」

「ええ、でも驚いたわ、オスティアに仕えていたのね。」

「うん、前みたいに助けてあげるから、期待しててね」

セーラも一年前の戦いでサラにはなついていた。

なので、今回も助けてくれるらしい。

「よろしくね、セーラ」

そんなサラ達を見つめるヘクトル達。

マシューとセーラは積もる話もあるらしく、サラと何やら話し込んでいる。

「あいつ・・・ただモンってわけじゃなさそうだな」

ヘクトルの言葉にエリウッドは首をかしげる。

「どういうことだい？」

「さっきの戦い振り。ありや、軍略に長けているものの戦い方だ。

見習い風情が出来るたたかいじゃねえ。それに・・・」

よく見ると先ほど曳いた場所の先には大きな村がある。

その門が閉まっている。

「ありや、先に村の門を閉めるように言っておいたっていう事だろ？」

普通は村の門は開いてるからな。

ヘクトルはそういつて状況分析をはじめた。

「私も思います。サラさんの戦い方はどこかでならつたと・・・」

ロウエンの言葉にマークスやオズインも頷く。

エリウッドも思い返せば多々そう言う面が覗いていた事は否めない。

「おい、マシュー」

ヘクトルはそれほど離れていない場所にいたマシューを呼んだ。

「はい？」

「お前、あいつのこと、一年前から知ってんだろ？」

「あいつ？あゝ、サラさん」

ええ、知ってますよ？

「あいつ、前から軍略に長けていたのか？」

「……そうですね、一年前の戦いにしても、見習とは思えないほどの策略の持ち主です。」

判断を誤りそうな所が多々ありましたが、地形を旨く利用し、三すくみや天候、その他のハードルを

突破、回避しています」

冷静なマシューの判断にヘクトルは頷いた。

「サラは何処の出身なんだ？」

「いえ、それはわかりません。ただ、一年前のキアラン抗争では一番の立役者だったと思います」

「エリウッド……あいつはどういうやつなんだ？」

ヘクトルの言葉にエリウッドは言葉を洩る。

そつえば、まだサラ殿については何も知らない……

そのことに気づいたエリウッドはセーラと話しているサラを見ていた。

知っている事があまりにも少ない。

だが……

「サラ殿が誰でもいいじゃないか、ヘクトル。」

僕たちを導いてくれる軍師……それだけで……」

エリウッドの言葉にヘクトルはしぶしぶといった表情でそれ以上何もいわなかった。

比翼の友（後書き）

やっと逢えました、ヘクトル一向。
さあ、怪しい気配が漂ってきましたよ。軍師殿

真実を求めて（前書き）

エリウッド達は順調に旅を進めていく。
そこでエリウッドたちは黒い牙の噂を聞いて。

真実を求めて

サントルス領に入るなり、謎の野党集団に襲われたエリウッド。あわやという所に現れたのは幼い頃からの親友、オスティア候弟ヘクトルだった。

野党の狩猟と思しき男がもらしたエリウッドが生きていては困るものの存在。

それは父の一件と無関係だとは思えなかった……

更なる手がかりを求め、エリウッド達はサントルス候ヘルマンの居城に向かった。

『エフィデイル殿……』

居城の一室、黒い衣を纏った男に詰め寄る初老の男。

『これは一体どういうことだ!？』

慌てた様子の初老に対し、黒い衣を纏った男は冷静そのモノ。

『どうなされた、ヘルマン殿。少し落ち着かれよ』

否めようとするエフィデイルと呼ばれた青年。

だが、そんな事お構いなしに慌て始めるヘルマン。

『そなたはエリウッドを脅かすだけといったはずだ!!』

それを……始末するなど……もう我慢できん!!

ワシはエリウッドに何もかも打ち明けて詫びる事にする』

きつぱりと言い切るヘルマンにエフィデイルの瞳が細まる。

『我らを裏切るおつもりか?』

冷やかな声で彼はそう呟く。

だが、それが冷徹さを纏っている事に気づかないヘルマンはなおも言葉を続けた。

『そなたにも《黒い牙》にもうんざりだ！

ただちに、ワシの城から姿を消されよ！目障りだ。』

『ヘルマン殿…どうあってもお考えは変わりませんか？』
最後の問いかけだ、とても言わんばかりのエフィデイル。
『くだい！！』

どうあってもヘルマンの考えは変わらぬ様子。

するとすぐにエフィデイルの表情が一変。

近づき、すぐに身体を近づける。

『ならば…あなたにも用はない』
グサッ。

エフィデイルがそう呟き、音がした瞬間、倒れこむヘルマン。

『忠告はしましたよ。ですが、おろかなあなたにはもうこちらも見切りをつけていた頃なんですよ』

死へ急ぐ老人は早めに死なせてあげないと…

失礼…

そのままそそくさと城を後にするエフィデイル。

まるで何事もなかったかのような表情。

それが彼の冷酷さを物語っていた。

その頃、ようやくエリウッド達は城が見える峠の所にたどり着いた。

「エリウッド、城が見えたぞ」

ヘクトルの言葉にエリウッドもその場に来て、城を見下ろした。

「なんとしても、ヘルマン殿にお逢いしなくては……」

そう呟くエリウッド。

『そいつあ、無理な相談だな、小僧』

不気味な声にエリウッドが後ろを振り向く。

そこに居たのはいかにも怪しい男。

「何者だ!？」

『オレが何者かなんて知る必要はねえなあ』

だつててめえはここで死ぬんだからよ。

不気味な笑いをし、戦おうとするエリウッドにその男は自分と戦いたければ城まで来いと言い残し、その場を後にした。

敵に囲まれている事を知り、エリウッド、ヘクトルは冷静さを取り戻そうと必死だ。

「エリウッド殿…進軍を開始してもよろしいでしょうか?」

サラの一言に瞬きを繰り返すエリウッド。

「出発の準備は出来てますよ」

敵が来る事も予想済みです。

「サラ殿……」

「さあ、売られた喧嘩は買おうか」

なあ、エリウッド。

ヘクトルも準備を整えたらしい。

「……それはどうとも……」

でも城まで行かなければならないのは事実。

「サラ殿、お願いします」

「わかりました」

微力ながら、お手伝いいたします。

「では、作戦を説明します、ここは二つの方向から攻めます。

北からマーカス殿、オズイン殿、バートル殿お願いします。
サラの説明に一同が聞き入る。
城をふた方向から同時に挟み撃ちにしようというのだ。

城を包囲するのにそんなに時間はかからなかった。

あの男の居る場所に行くと言ったとボイズと名乗った。

「ヘルマン殿が心配だ・・・」

エリウツドの言葉に一同ボイズを倒し、城の中へと足を踏み入れた。

「ヘルマン殿!!」

奥の部屋で仰向けになって倒れていた老人がエリウツドの声に反応し、声を振り絞り手を伸ばす。

すぐに駆け寄るエリウツド。

「しっかり、しっかりしてください」

『ワシは・・・お前に謝らなければならない・・・』

お前の・・・父・・・のことだ・・・』

「何か、知っておられるんですか？」

驚いた様子のエリウツド。

『わしが・・・ダーレンの企みを・・・エルバートに話したり・・・せねば・・・こんな・・・こと・・・には』

息も絶え絶えのヘルマン。

しっかりと握り締めたエリウツドの手だが、力が弱まっているのが彼には辛かった。

「ヘルマン様!」

『………… ラウスへ行くのだ…………』

ダーレンなら、すべて知っている。

「ラウス候が!?!」

『すまない・・・エリウツド・・・わしは・・・もう・・・』

「しっかり、しっかりしてください……」

呼びかけるもヘルマンにはもう見えないのか、言葉がおかしくなっている。

『黒い…牙に…気を付け…』

そう呟くとそのまま手を下ろして息を引き取った。

“黒い牙…”

サラの表情がこわばる。

またあいつらが関わってるなんて…

苦虫を踏み潰したような顔…

そして、腕をするようなしぐさをするサラ。

部屋を出て、城の別室へと足を運ぶ。

エリウッドはきつとラウスへ行くだろう。

そういう男だ。

サラはそうとつさに思った。

黒い牙には関わるな…

サラの中の何かがそう告げる。

だが、運命を変えるにはどうしても関わらなければならないやつらなのだ。

「サラ殿？」

「…なんでしょう？」

エリウッドは沈んでいるのか、ヘクトルと共に執事らしき人と話をしていて、こちらに気づいたようだ。

「ラウスへ行く事になりました」

「…はい。エリウッド殿ならそういうだろうと予想してましたから。」

「…数々の危険が伴います。」

それでも一緒に来ていただけますか？

エリウッドの言葉にサラは笑顔を向けた。

「そちらがいやでなければ、私も加勢させてください」

「……ありがとう」

エリウッドは素直にそういつて手を差し出した。

差し出された手はすぐにサラによって握り返された。

そして、その日に出発し、ラウスを目指す事になったのだった。

真実を求めて（後書き）

ようやく動き出しましたね。
ちゃんと外伝がでるんで頑張ります

外伝：行商人マリナス（前書き）

どんどん進むエリウッドたち。

そこで出逢ったのは奇妙な男。

外伝：行商人マリナス

13章外伝『行商人マリナス』

サントルス候ヘルマンの遺言は、エリウッドに大きな驚きを与えた。全てはラウス候ダーレンが知っている……

痛みとひきかえに手に入れた情報を元に、エリウッドはラウスへと向かうのだった。

サントルスからラウスへはキアラン領の村を一つ通過しなくてはならず、

エリウッドたちはそこで夜を迎えることとなった。

月明かりの中、エリウッド達はある平原で一夜を過ごす事になった。「チツ、暗くなっちまった」

ヘクトルの言葉にエリウッドは辺りを見回す。

遠くのほうに町が見えるが、今から宿を取れるかどうかも危ない所だ。

「今夜はここに泊まるしかないな。」

ラウスへは、明日の朝一番に発つことにしよう」

エリウッドの言葉にサラはマーカスに宿の手配を頼んだ。

「宿が取ればそちらに泊まったほうが体力的には回復するもの。それに必要なものは買い揃えてからのほうがいいでしょ？」

「サラ殿はやはり聡明ですな」

判り申した。

そついうと早馬で掛けて行くマーカス。

「ここはキアラン領か。」

ハウゼンのじーさんには挨拶抜きでもいいよな？」

ヘクトルの言葉に頷くエリウッド。

「……領地の端を通過するだけだ、問題はないだろう。」

リンデイスがどうしているかは、少し気になるが。」

「リンデイス？」

エリウッドから聴きなれない言葉を聞き、首をかしげるヘクトル。

「キアラン候の孫娘だよ」

エリウッドの言葉にヘクトルは「そー言えば……」と思い出す。

「そーいや、一年に相続争いがあつたとか……何とか……

ん？そーいや、お前も一役買ったんだろ？」

ヘクトルの言葉に「ああ」と頷くエリウッド。

にやりと口元を上げ、エリウッドを見た。

「で？その孫娘つてのは美人か？」

「美人……なんだか……なんというか、

サカ人の血を引くせいかな、とても印象的な子だった」

エリウッドの言葉にヘクトルはさも残念そうに呟いた。

「ふーん、残念だったな」

「何が？」

不思議そうに首をかしげるエリウッド。

「今は逢いに行ってる暇はないぞ？色男。」

「なっ！リンデイスとはそんな仲じゃ……」

慌てふためくエリウッドを面白そうにからかう。

「照れんなって！」

「ヘクトル！……怒るぞ」

「アハハハ……、からかいがいのある奴だぜ」

そこで山賊に絡まれている一人の男性を見つける。

もちろん、エリウッド達はその山賊からその人を庇った。

怒った山賊はエリウッド達に向かってきた。

「サラ殿！！」

「地形を旨く使えばボスを誘き出せる。霧も出てきてるから、気を付けて、」

3方向からヤツラを叩く。

「ドルカスさん、バートルさん、ヘクトルさんとオズインさんは左側から、

マシューさん、ロウエンさんは右手から、私も戦うから、残りは正面から倒しに行きます。

レベッカはマリナスさんを守っていて、敵を近づけさせないようにしてね」

サラの指示に皆頷く。

サラ達の活躍により、相手を撃退できた。

「サラ殿の知略の賜物だな」

エリウッドの言葉にサラは苦笑いを浮かべる。

夜盗を追い払ったエリウッド達。

『ぐっ……畜生っ！覚えてやがれっ！！』

悔しそうにそう告げる夜盗はそのまま腕を抑えつつ、去っていった。どうやら傷を負ったらしい。

「おう！いつでも来やがれ！」

にやっと手を振るヘクトル。

その横でエリウッドはマリナスの様子を気に掛けていた。

レベッカが敵を近づけさせないようにしていたとはいえ、怖い思い

をしたのは認めざるをえない。

「大丈夫ですか？」

『あ、はい』

流れ矢に当たったのか、腕に傷が出来ていた。

「傷が…」

手当てをしますね。

袋から包帯と布を出し、なれた手付きで巻いていく。

「大丈夫ですか？」

エリウツドの言葉にマリナスはほおける。

『へっ？』

呆けたようなマリナスだったが、ようやく声を掛けられた事に気づいたようで…

『たっ助かったんですなっ！？』

「暴漢どもは追い払いました。

お怪我はありませんか？」

エリウツドの言葉にマリナスは頷く。

『いや、このとおり、ぴんぴんしておりますぞ』

このマリナスの言葉に一行は安堵の表情。

「それはよかった。では僕達はこれで」

そう告げるエリウツドは後ろにいたヘクトルに声を掛けた。

「行こう、ヘクトル」

ヘクトルが頷き、去っていきこうと想い、踵を翻すが…

『お、お待ちくだされっ！』

なにかお礼を…！』

慌てた様子でそう告げるマリナスにエリウツドは首を振る。

「お気になさらないください。たいしたことはありません」

「そうそう、こんなしょっぱいおっさんから物もらえねえって」

ふざけ半分のヘクトルにマリナスは目を見開く。

『しよつしよつばい？』

「ヘクトル！」

声を荒げたエリウッドにヘクトルは口をつぐむ。

「おっと。」

やべえ。エリウッドの慌てたような声にヘクトルは顔をそむける。

『ウオツホン！わしはマリナスというもので、色々な品を売り歩く旅の商人でございます。こう見えましてもそれなりに裕福でして

…』

誇らしげにそう告げるマリナス。

「へえ、おっさん商人だったのか？

人は見かけによらねえっつーか。」

ヘクトルの言葉にエリウッドはあきれ果てた様子を見せる。

「ヘクトル、さっきから失礼だぞ？

マリナスさん、どうかこのものの言葉はお気になさらず…」

エリウッドがたしなめるもヘクトルは相変わらずな様子。

『しかし、助けていただいた恩は返さなくては…

よく見れば、何か事情がありがたいうだ…よし！

ワシもお供させていただけませんか？』

「はあ！？何言ってるんだ、おっさん」

「ヘクトル！！」

エリウッドが再びたしなめる。

だが、ヘクトルは今回の旅がそんなに安全なものとは絶対的にいえないのを知っている。

だから、遊び半分でそういわれも困るという言葉を含んでいったのだ。

「私達の旅は危険です。先ほどのような目に遭うようなこともあり

ます。

それでも、こちらに着いて来る覚悟はおありですか？」

「サラ殿まで！！」

ヘクトルの言葉にサラが続く。

「エリウッド殿、商人というのは皆危険を承知で各地を転々としております。」

ならば、輸送隊というのも今、必要なかもしれません」

「…輸送隊…ですか？」

「ええ、これから仲間が増えればどんどん荷物も増えます。」

そして武器やら傷薬やら…」

それを管理するものも必要かと…

サラの助言にも一理、ある…あるのだが…

『輸送隊としてならわしにも何かできるやもしれません。あなたが軍師殿ですか？』

「サラと申します。マリナス殿。しかし、最終権限はこの方、エリウッド殿にあります。」

私はまだ見習いの身…

『エリウッド様…どうぞ、輸送隊として私を登用ください』

マリナスの言葉にエリウッドは考える顔をしつつ、最終的には受け入れてくれた。

「歓迎します。マリナスさん。ですが、僕よりもサラ殿の指示に従ってください。」

この方はこの軍の軍師です」

「エリウッド殿…」

「サラ殿を信用してます。一切の管理、お願いします」

「…分かりました。では、マリナス殿。こちらへ」

『はっはい。』

一礼をして去っていくマリナスを見て、ヘクトルはエリウッドに視

線を移す。

「いいのか？」

「…ああ。サラ殿が余計な人を巻き込む事はしないだろう。

それに…あの言葉に嘘はない」

これから先、どんな事が待っているのかまったく分からない。
人も増えるかもしれない。

そして、すべき事も。

「一つずつ片付けていくしか…ないから」

だから、必要だというならそうなのだろう。

そのエリウツドの言葉にヘクトルは大きく息を吐いた。

外伝：行商人マリナス（後書き）

ようやく輸送隊が出ましたね。
さあ、進みますよ。

うごめく者たち（前書き）

父の失踪とヘルマンの死。

そのすべてに絡んでいると噂されるラウス侯ダーレン。

エリウッドはラウスへとついに到着する

その彼を出迎えたのはダーレンの息子、エリックであった

うごめく者たち

ひょうきんな承認、マリナスを仲間に加え、エリウッド達は翌日ラウスへと旅立った。

リキアの中央に位置するラウス公爵領…

ここは強欲な領主。

ダーレンによって治められている。

フェレで村長から聞いた戦の準備…

父、エルバードの失踪…

サンタル候の死…

それらすべてにダーレンが関わっているというのだろうか？

エリウッドの心の中では真実を求める気持ちと、知る事への恐怖が激しく入り乱れていた。

ダーレンについたエリウッド達その緊迫した雰囲気包まれていた。

「…領内を見る限り、本当に戦の準備が進んでいるようだな。」

ラウス候め何をたくらんでやる。

「……」

エリウッドは何かを考えるようなそぶりを見せた。

「城に行きたくないって顔だな？」

「行って、真実を聞けば、戦になるかもしれない」

エリウッドはただ淡々とそう呟く。

「望む所じゃないか。」

「僕は…戦を好きになれない」

戦っている僕らは目の前の敵を倒すことだけを考えていればいい。
でも、これ以上…

エリウツドは苦い顔をしながらそう呟いた。
ヘクトルはエリウツドの言葉に何も言えず、ただそこにたたずんでいた。

そこに駆けつけてきたのは

「ラウス城より騎兵が出てまいりました」

「数は？」

サラがそう聞くと彼は一騎のみだと告げた。

「相手は？」

「ラウス候公子エリック殿とのことです」

エリウツド様に会見を求めています。

マーカスにそういわれ、エリックは驚きに瞬きを繰り返す。

「エリックが？」

「いやな奴が出てきたな」

「そうなの？」

「ああ、オレは嫌いだ」

ヘクトルの声にサラは苦笑いを浮かべた。

「どーするの？」

エリウツド殿。

「…逢おう。呼んでくれ」

その言葉にサラは傍に控えていた。

だが、ヘクトルはあいつに会うのは嫌だといって…

「オレは、外そう。昔からあいつは虫がすかねえ」

見回りでもしてくる。

「では、ヘクトル殿、申し訳ありませんが、お願いしたい事があります」

サラは何かを告げるとヘクトルは「あいよお」と片手を振って答えた。

数分後、騎兵の格好をしたエリックと呼ばれる青年がエリウツドの元に来た。

『やあ、久しぶりだな、エリウツド』

サラはじつとエリウツドの近くでその男を見ていた。

何かをたくらんでいるような顔つきの男…これがエリック。

「用件はなんだ？エリック…」

エリウツドの言葉にエリックと呼ばれた青年はきよとした表情。

『用件？どういう意味だい？』

僕はただ、旧友の君がこのラウスに来てしていると聞き、こうして挨拶に出向いたんじゃないか！

” 白々しい…”

サラはそう思いながらもじつとただそこに立っていた。

『それよりも、そちらの子は誰だい？』

「…説明する必要があるのかい？」

エリウツドはそれ以上何も言わない。

『ところで、どのような用向きでこのラウスに？』

オステディアに向かう途中なのかな？

” さっそくボ口を出したわね…”

サラは口元を少し上げた。

「…どうしてそう思うんだ？」

『君は候弟のヘクトルと仲がよかったからだよ。』

僕のほうは彼が苦手だったけどね。

『貴族だというのにあの下品な振る舞い、口の利き方…』

まったく、信じられないよ。
呆れたようにそういうエリック。

『ヘクトルとは今でも付き合いがあるんだろう？』
一番最近あったのはいつだい？
連絡はどうやって？

” ああ…こいつは使えないね。”

こんなのでは軍略は出来ない。
そして、落とすのも簡単。

ここはエリウッド殿でも大丈夫みたいね。
「エリック…。一体何をさぐりたいんだ？」

『え？』

「このラウスでは何処を向いても戦の準備をしている。
君達親子は一体何をたくらんでいる？」
はつきり答えてもらおう。

今まで見たことのないオーラを纏ったエリウッドにエリックは焦り
つつ、

『……オスティア候と連絡を取ったかどうか…聞き出してからと思
ったが、仕方ないな…』
そういつて隠し持っていた剣を取り出し、襲い掛かるエリック。

バシッ！

『なっ！？』

サラが出るより早くエリウッドが剣を叩き落した。

『クッククク…エリウッド！僕は昔からお前も大嫌いだった
僕の槍でお前の善人面を苦渋に歪ませたいと…』

ずっと思っていた！やつと…願いがかなう。』

次は槍を取り出そうとしたが、サラが首元にナイフをあてた。

「そうはさせませんよ。ヘクトル殿」

「あいよ！軍師様は有能だねえ」

ヘクトルに押さえつけられ、慌てる。

『まさか…もうオステイア候と連絡をとった…のか！？』

「さあ、どうだろうな？」

エリウツド！こいつ、あちこちにかなりの数の兵を伏せてるぜ」

今、軍師殿に言われて調べてきたんだ。

「サラ殿に？」

エリウツドの傍にいたサラはにつこり笑顔で答えた。

「しかも、ラウス正規兵ばかりだ。かなり頑張んねえと…やべえな。」

『クツクツク…お前らがいくら必死になっても逃げられはせん！

何しろ、数が違う。それも我がラウスが誇る精鋭の騎馬部隊の攻撃だ。』

何分生きていられるかな？

「あなた…この状況で生きて返れると思ってるの？」

戦…嘗めてるわね。

「んで、軍師殿、こいつどーする？」

「もちろん、拘束しておいてください。」

あ、馬は戻るでしょうから…ほおっておいていいですよ。

それで相手に捕まっていることが分かるでしょう。

『グッ』

「申し訳ありませんね、ちょっと痛いですけど…」

気を失っててくださいね。

背中の上に周り、首筋に手を当てて何かをぐっと押すと体から力が抜け、エリックは倒れこんだ。

「エリウッド殿、ご命令を…」

「…ああ、ラウス候のところまで全力で駆け抜ける」

「サラ殿、この状況、どう見ます？」

エリウッドの言葉にサラは地形を見回し、配置を決める。

「マーカス殿、先陣頼みましたよ。」

「お任せください」

「この布陣で行きます。斧を使う方は残ってください。それと、マシュー殿…」

「あゝ堅苦しい！オレはマシューでいいよ。で、何？」

「この近くの民家で聞き込み願えますか？」

どうもこの辺りの海岸線…気になるんです。

「了解。」

マシューはそそくさと民家へと歩いていった。

「では、このまま行きます」

サラの一言にセーラが見覚えのある顔の青年を連れてきた。

「ねえ、エルクが協力して欲しいって…」

協力を仰いできたのはリンとの時に共に戦ったセーラの護衛だったエルクだった。

「人を探してるって」

通している？

「どうなさいます？エリウッド殿」

サラは最終指揮権はエリウッドにあると思っっているらしく、伺いを立てる。

「逢おう。サラ殿には色々と協力していただいてる。」
通してくれ。

来たエルクはエリウッドに探している人が南の町に居る事を告げた。

「わかった、サラ殿、布陣を変えることは？」
「…ではマーカス殿にその方の護衛を頼みましょう。」
「マシユー、悪いがマーカスの所まで伝言を届けてくれ」
ヘクトルがすかさずマーカスの所へマシユーを行かせる。
「お気遣い申し訳ない。ヘクトル殿」
「気にすんなよ、軍師殿、でマシユーから言伝だ」
あんたの推察通りだよ。

「では、ギイ殿、申し訳ないですが、その剣裁きで海賊を退治していただけますか？」
南東に砦があり、そちらから来ているようですから。
「オレだけ？」

ギイはきよとした表情だ。

「いえ、マシユーもそちらに行くはずです。」

二人の剣捌きなら何とでもなるでしょう。

「期待してるぜ、ギイ」

「…わかったよ」

しぶしぶといった様子でギイは走り出した。

「戦況の変化を見分け、私も出ます」

「…そうならないようにしなくちゃな」

「エリウッド殿…」

「そつそ。軍師殿の出る幕作るようじゃ俺ら形無しだからな」
ヘクトルの言葉に三人とも苦笑いを浮かべた。

確かに…そうだ。

とでもいうように…

「戦況はどうなってますか？」

戦闘開始から数分後、雨が降り出し、そしてやんだ。

「…こちらが優勢という事になってますね」

「これも軍師殿の策略のおかげか？」

「…まだです。あちらには…城から援軍が出てきたら…」

「大丈夫です。」

サラの言葉に妙に二人は顔を見合わせた。

「ラウスの兵は出てきませんよ。今のはたぶん、気を失ってるこの方…エリック殿の命令で動いてるものだけのはずです。」

「サラ…殿？」

そして、そのまた数分後、城制圧の報告がエリウツドの元に届く。

エリウツド達はラウス候がいたであろう城にエリックを連れて行き、そこで気を取り戻させることにした。

事の次第を聞きだすために…

「おい！エリック、起きろ！」

ヘクトルの言葉にハツと気づいたように目を覚ますエリック。

『き、貴様ら、私にこんな真似をして…』

今まで気を失っておいてこんな事をいうのは馬鹿だとサラは思う。

「いまさら、何言つてやがる！」

命があるだけでもありがたいと思え！」

ヘクトルは持っていた斧を肩に担ぎあげた。

「エリック、君の父上は何処に居る？」

この城はもぬけの殻のようだ。

誰一人いない。

そうエリウツドが告げると自然と大きく目を見開き、辺りを見回し始めたエリック。

『そつそんなバカな！』

父上が、この私を見捨てるはずが…！』
まさか、エフィデルが！？

”エフィデル…ですって？”

サラにはその言葉に聞き覚えがあつた。

確か…あの黒い牙の一員…

まさか…

サントル候の最後の言葉…

『黒い牙』

そして、エフィデル…

いや、まだ確証はない。

でも、可能性もないわけではない。

なら、奴らの目的は…

「エフィデル？誰だそれは？」

『…』

まずつたという表情のエリック。

だが、こちらでも聞いておきたい事がある。

もし、私の考えどおりの人物ならば、なおさら…

黙つたまま、サラは立ち尽くす。

「おい！答えろ！！ここで死にたいか？」

斧を目の前に突き出し、ヘクトルはエリックに詰め寄る。

『ヒイ！！』

その脅えようにエリウッドはヘクトルを威圧する。

「エリック、頼むから…」

君の知っていることを教えてくれないだろうか？

エリウッドがそう呟くと彼はただ無言のまま下を向いた。

「僕は…父の事を知りたいだけなんだ。」

『……エフィデルは1年前、突然ラウスに現れた。』

あいつが来て、父上は変わってしまった。

『以前から親父はオステイアがりキアをまとめていることに不満を洩らしていたが、

……反乱を起こそうとまでは。』

「反乱…だと？」

ヘクトルもそこまでは考えていなかったようで…

『…とにかく、あいつは何か強い切り札を持っていて、それで父上を虜にしまった。』

父上は反乱を決意するや、諸侯の何人かに使いを送らせ、協力を仰いだ。

フェレ侯爵は反乱に賛同した一人だ。

「な…に？」

その言葉にヘクトルは啞然としている。

「まさか…父に限ってそんな事はない!!」

絶対に。

『信じようが信じまいが勝手にすればいい。』

だが、最初にサンタルス侯が、その次にフェレ侯が返事をよこした。

半年前、フェレ侯がここに訪れたのも、反乱意志の最終確認だったんだからな。』

「…そんなばかな…」

『あの日、父上とフェレ侯は激しく言い争いをしていた。』

フェレ侯はエフィデルが気に入らなかったようで、エフィデルが連れてきた、

暗殺団『黒い牙』と共にリキアから追い出すよう父上に求めた。』
だが、結局、父上はそれを承諾せず、フェレ侯はこの城を離れた。

そして…例の失踪騒ぎだ。

もう生きてはいないだろう。

「…！」

エリウッドは衝撃を受けたように立ち尽くす。

「黙れ…！」

『エリウッドが聞きたいといったから僕は話したんだ。』

……父上は、エフィデルの操り人形さ』

そう呟くエリックを他の人に任せ、エリウッドは城を出た。

草原の近くで何かをしゃべっているエリウッドとヘクトル。

大方、さっきの言葉にショックを受けているエリウッドを慰めているのだろう。

「黒い牙…そしてエフィデル…やっかいね」

「主…」

城の一室から外を見ていたサラはそう呟く。

すると城の影から一人のフードをかぶった女性が現れた。

「…やはり私を殺そうとした者どもの仕業か？」

「…おそらく。」

「では、引き続き奴らのアジトを探れ。そして真実を…」

二度と人竜戦争など起こさぬように…

「はっ。」

その人影が消えた頃、ドアをノックする音が聞こえる。

「開いております」

「サラ殿、お一人で行動されては危ないですぞ」

マーカスだった。

「ごめんなさい。地図があつたものだからつい。」

「これから何処に行かれる？」

「この城から逃げるとしても方向は二つ。でも一方は私達が通ってきた道、ならばその反対…」

「ここからならキアランが近い…まさか？」

「…そうですね。念のためにマシユーに辺りを聞き込みさせてください」

「わかりました」

「それから、申し訳ありませんが、マーカス殿。一つお願いがあります」

「なんででしょう？」

「私にも剣と鎧を用意していただけますか？」

これから先、私も戦う必要が出てきますから。

サラはそれだけ言い残すと部屋を後にした。

マーカスは一人頷き、サラが先ほどまで見ていた地図に視線を落とす。

キアラン…

サラが一番思い出深いであろうその場所。

そして、そこでまた戦が…

巻き込みたくないと思うであろう人物のいる場所に行かなくてはいけないなんて…

なんて皮肉なんだろう…

マーカスはただ、そう思っていた。

「無事でいてね、リン…」

あなた達だけは運命に巻き込みたくなかったのに…

どうしても私の運命は人を惑わすのね。

苦い顔をし、目を手で覆う。

”リン…無事で…”

うごめく者たち（後書き）

サラさんが思うのはきっとキアランにいる少女の事。
そして、せつかくの平穏が崩れる事を恐れています。

だからでしょうかね？
少し寂しそうです。

それにしても、フードを被った女性・・・
誰でしょうかね？

キアランの公女（前書き）

エリックの語ったラウス候を中心とするオスティアへの反乱計画。真相を確かめたいエリウッドたちはキアラン城がラウス軍に占領されたとの報告を聞く。

サラの心中は穏やかじゃなかった。

キアランの公女

まずは、見取り図が必要ね。

サラはそうひとりでに呟いた。

エリウッドと旅をはじめて数日、

サラはどんな困難な要求も悉く打ち破ってきた。

どうしたらいいのかとエリウッドに訪ねられたら的確なアドバイスを出し、

そして天候に左右されるものをも計算し、占いババの意見も耳に入れながら自らは参加せず、

ただじつと軍師という役に転じてきた。

だが、リンが助けを求めているというのを聞いた時、サラの表情が変わる。

「エリウッド殿：御前：失礼いたします」

「サラ殿：どちらへ？」

「この先の小さな民家に何かを感じます。私が行って調べてまいります」

「それならオレが行くよ」

あんたは俺らの軍師だろ？

マシューがそういうが、サラは耳を貸さない。

「いえ、私が行くわ。今度は私が助ける番だから」

「サラ：殿？」

「私の大事な友人が困ってるの、みすみす逃すことは出来ないわ。」
「大事な人…」

そういわれてエリウッドはまさか…と顔をゆがめた。

「ええ、ヘルマン殿の孫…リンデイス。
近くにいますわ。」

助けを求めている。

必ず応援に駆けつける…だから。
行かせて。

「必ず助けてまいります…だから、一時御前失礼を」
そういつて片膝つけたサラは立ち上がり、すぐさま踵を返す。

「サラ殿…」

エリウッドが制止するも止まる事はない。
そして、いつになく真剣で殺気だっている。
こんなサラはみた事がなかった。

どんな戦いでも、どんなに窮地に追い込まれても、こんなに殺気だ
つことはなかったのだが…

「ちょっと待ちなつて軍師さんよお」

ヘクトルに腕を取られても止まる気配が一行にない。
サラはそれぐらい先しか見ていないのだ。

「離してください、ヘクトル殿。」

「いや、エリウッドの意見も聞けつて」

何も見捨てるなんていつてねえだろおが。

「…時は一刻を争うの。」

早くしないとあちらの兵が傷つく。

傷ついた兵士を見てリンはもっと傷つく。

早くしなくては…

気持ちだけが焦る。

「サラ殿、僕達もリンデイスの助けに行く」
エリウッドが呟く。

だが、サラは首を横に振る。

「その必要はない」

私一人行けばいい。

「そういうわけには行かないだろ？」

あんたが傷ついたらもつとリンディスさんって人は傷つくんじゃないかな
いか？

「あ……」

ヘクトルに言われてサラの足が止まる。

確かに、自分が傷つけばリンはもつと悲しむ……
そして……

”サラ……”

悲しそうな顔をするに違いない。

「……軍師さんの気持ちもわからないわけじゃねえけどよ。
もう少し考えてくれてもいいんじゃないか？」

「……軽率だったわね」

すみません、エリウッド殿。

「……気にしないでください」

すぐに戦闘の準備を。

エリウッドの一言で皆が腰を上げた。

「リン……今度は私が必ず助けるわ」

あなたが傷ついた姿なんて……みたくないもの。

《ケント……戻りました。報告します》

林の中で敵情視察してきたのか、ケントがリンの元に戻ってきた。

《城の周りからこの森の入り口まで、いたるところにラウス兵が配置されています。

その数、およそ50!》

ケントが悔しそうにそう呟く。

リンの表情も少し曇る。

《リンデイス様、本気ですか？せっかく脱出できたのに…

城にまたもどるなんて…死に行くようなもんですよ?》

セインの言葉にリンは腰に掛けた剣の鞘に手を掛ける。

『城にはおじい様がいらっしゃる。

一度は言われるままに城の外に逃れたけど…

このまま、ほうっておくわけにはいかないわ!』

リンの言葉に同感だったウイルだが、

《しかし…この人数ではハウゼン様を助け出す事は難しいですね。》

ウイルの言葉はもつともである。

なんせ、逃げおおせたのはリンを含め、ケント、セイン両名の配下

の数名の部下、そしてウイル、フロリーナだけだ。

敵の数が多いだけに戦えばダメージも多い。

そして、なんせ人が足りない。

《援軍…どこからかわいてでませんかねえ…》

セインの愚痴りは誰もが思っていることで…

《…ラウス兵が話しているのを盗み聞いたのですが、どうやらラウ

スに攻め入ったのはエリウッド殿のようです》

ケントの言葉に驚くリン。

『エリウッドが!？

なぜ、ラウスに?』

リンの言葉にケントが答える。

《詳しい事情までは…

ですが、ラウス候は城だけではなく、実の息子であるエリック殿も捨て、このキアランへと逃れてきたようです。》

《ひどいな…親が子を捨てるなんて…。》

確かにセインの言うとおりである。

『…とにかく、エリウッドは隣のラウス領にいるということね。

だったら助けをだしてくれるかもしれない…

なんとか、連絡を取らないと。』

辺りを見回し、対策を練るリン。

《奴らに見つからずに…となると森を抜けるほうがいいですね》

ウィルの言葉にリンは頷く。

だが、森を抜けるには時間がかかる。

それに、周りの動向が分からなくなる可能性も…

《オレが行きましようか？》

『そうね、…森では馬は動きにくくて不利…

時間はかかるけどウィルなら身軽だし…』

でも…それだと…

《リンデイス様…私が行きます》

そう名乗り出たのはフロリーナだった。

《ペガサスだったら森を越えられるから一番早くラウスに着けるはずです》

『フロリーナ！？』

あなたが一人で行動するなんて…無茶よ。』

相手がどんな武器を持っているのか分からない…でもアーチャーだっているはず。
それなら。

《ケントさんたちのおかげで私の男性恐怖症もマシになってきたし…
エリウッド様にはお逢いしたこともあるから一人でもきつと大丈夫です》

『すごく危険なのよ…わかってる！？』

《ええ。…でも私、リンデイス様のために強くなるって決めました。
もう以前の、弱虫フロリーナじゃない…
だから、安心して任せてください、ね、！？》

フロリーナの覚悟を目の当たりにしたリンは渋々頷いた。

『わかったわ…だったら、あなたにお願いする。
ただし、絶対に無理はしないこと！約束よ』

リンの言葉にフロリーナは頷いた。
そして飛び立った。
フロリーナを見送る一行。

《それにしても、あの気弱なフロリーナちゃんが精一杯強気の発言を！…素敵だ》

セインの言葉にケントは呆れ顔をした、だが…

《もう、一人前の天馬騎士ですね。》

『そうね』

リンは少し寂しそうな顔を浮かべた。

《リンデイス様のためになんてけなげじゃないですか！》

ウィルの言葉にリンは苦笑。

『…草原にいた頃はずっと私が守ってたのよ
寂しい…なんていったら罰があたるかしら？』

だけど、それが敵に確認されていた事実をリンデイス達は跡で知る事になる。

「敵の様子がおかしい…」

「サラ殿？」

突然止まったサラにエリウッドは首をかしげた。

「確かに…弓兵を前に出して何やってんだ？」

ヘクトルも首をかしげる。

「エリウッド様！東の空に天馬騎士が！！」

マーカスがエリウッドにそう呟く。

《エリウッド様っ！》

見覚えのある天馬…

「フロリーナ！！」

サラが手を伸ばす。

《サラさん！！》

「フロリーナ、気をつけて…」

敵が…

《えっ、あつ、キヤア！！》

弓矢がフロリーナのすぐ目の前を通り過ぎていく。

体制を失ってフロリーナが落ちてくる。

「フロリーナ！！」

すぐさま駆け寄るサラ。

倒れこむ天馬の上に乗ってたフロリーナが地面に投げ出される寸前、

サラの腕の中に倒れこんだ。

《……う……ん。》

「……気がついたかい？フロリーナ」
エリウッドが声を掛けると恐る恐るだが、目を開け、きょとんとした表情をするフロリーナ。

《エリウッド様……私……》

「弓矢に射られる寸前だったんだ、それで体制を崩して……」

《すみません、私、ご迷惑を……》

「いや、怪我がなくてよかったよ。ところでフロリーナ、君はリンデイスと一緒にじゃなかったのかい？」

《そ、そうでした！エリウッド様、リンデイス様がこの森の向こうで城へ攻め込む機会をうかがっています。》

「リンは無事なの？」

サラが後ろにいることに気づき、自分をずっと支えてくれていたのだと気づくとフロリーナは頷いた。

《サラさん！！はい、無事です、みんな》

でも、ハウゼン様は捕らえられ、まだお城に……

「…エリウッド殿」

サラの視線にエリウッドは頷いた。

「そうか、だったら行こう。リンディスたちと合流してキアラン候を救い出す!」

エリウッドの言葉にサラは近くにいる者にこの場の地図を用意させた。

「サラ殿：作戦は?」

「二つに軍を分けます。」

「マーカス殿率いる遊撃隊に敵を攻撃していただいてる間にフロリーナ、リン達にも私達も参戦した事とこの書状を渡して」
「たぶん、ケント殿に渡したら分かってくれるわ。」

《わかったわ》

「フロリーナ、気をつけてね」

リンに必ず助けに行くからって言ってね。

《必ず…》

そういうと飛び立っていった。

「サラ殿…」

「今参ります」

リンが生きてる。

そして、必ず助ける。

サラの目に迷いはなかった。

城を守ってるのはバウカーという將軍。

だが、それもマーカスからすぐに陥落の知らせが届いた。

「バーカス將軍…手強い相手だった」

エリウツドの言葉に皆が傷を癒しているのを見たサラは頷いた。

「そうね。」

『サラ…』

聞き覚えのある声にサラは後ろを振り向いた。

そこには少しだけ不安そうな目をしたリンがいた。

そしてその後ろにはケントや、ウィル、セイン…見覚えのある顔が勢ぞろいしている。

「久しぶりね、リン」

でも再会を祝うのはまだ早いわ。

「城を落とせば勝利なもの」

まだ戦は終わってない。

『そうね、ありがとう』

駆けつけてくれて…サラ。

「今度は私が助ける番だもの」
いきましよう。

だが、すぐに場内の様子が分からない事と、けが人が多い事が災いし、本日はここで野営となった。

そこでサラの近くに來たのはキアランの面々。

「サラ殿…お久しぶりです。」

「お久しぶりですケント殿。」

ケントが渡された紙のことで礼を言つと…

「私は軍師ですから、仲間に伝令は当然でしょう?」

「…やはりサラ殿は変わられてない」

そついつてケントは笑つた。

「サラさん!! ああ、相変わらず何てうつくしいんだ!」

「ふふ、相変わらずね、セイン。」

「もう、一年になるなんて、うそみたいだ」

ウィルも笑顔を浮かべる。

「そうね、でもこれからよろしくね、ウィル」

「はい!」

『どうしたの? フロリーナ。』

あなたもこつちに来ればいいのに…』

リンが首をかしげる。

サラも首をかしげた。

「あ、あの、さつきは…」

『さつき?』

リンが首をかしげた事と、少し腰が引けているフロリーナにサラは苦笑した。

「ええ、こつちに飛んできた時にバランスを壊したの」

その時の事よね?

「天馬に怪我はなかった?」

「大丈夫…」

「そう、ならよかったわ」

気がかりだったの。

あなたの大事な天馬なものね。

「ありがとう、サラさん」

皆が他の人たちのところにも挨拶しに行った後、リンはサラの傍に座り、空を仰ぐ。

『キアランに残ったみんなでもよくあなたの話をしてたのよ。

今頃サラはどうしてるかなって…』

「私もリンたちのこと心配だったわ、でも風の噂で平穏に暮らしてるって聞いてたから安心してただけど…」

でもこんな事で再会するなんてね。

『でも、ありがとうね、サラ。あなたがいてくれるなら私…頑張れる』

だって私達最高の相棒だものね。

「ええ、そうね、リン」

《軍師様、敵状視察していたものが戻りました》

兵士の声が聞こえ、サラは頷いた。

『今は再会を祝ってる場合じゃないわよね。おじい様を助けたいの。

サラ、また力を貸してくれる？』

「もちろん。負けられないでしょ？それに、キアランを攻めるなんて許せないわ」

殴ってやる。

サラがこぶしを突き出すとリンもこぶしをあわせた。

『キアランに再びの平和を』

「リンとの友情に、そしてキアランに平和を」

キアランの公女（後書き）

ようやく再会できましたが、でもまだ波乱の幕開けに過ぎません。
軍師サラとリン、そしてエリウッドとヘクトル。

ラウス候を追いかけてどこまでも立ち向かいます。

まずはキアラン城を制圧せねば・・・

謎の行方（前書き）

リン達と共にキアラン城を制圧せんと城内に入ったエリウッド達。

彼らは知る。

今まで辿ってきたのが序曲に過ぎなかったのだと

謎の行方

ラウス候の側近、バウカー將軍を打ち破り、エリウッド達はキアラン城に迫る。

だが、城内にはいまだ多くのラウス兵が残っている。

キアラン候を助けるために、エリウッド達は突入を開始した。

「マリナス殿…」

『これは、これは…軍師様…』

輸送隊の準備をしているとサラに声を掛けられる。

「この付近だと結構な物資が手に入ると思うの。」

たぶん、この地形だとたくさん武器も必要だわ。

確保、お願いできる？」

そういつてたたくさんのお金を渡される。

『承知いたしました』

「よろしくね。傷薬などの消耗品は多く、そして…」

『心得ております』

では失礼。

マリナスを見送るとマシューがサラの元に来る。

「サラさん、言われたとおり偵察してきたぜ」

「ありがとう、マシュー。で、どう？」

「ぴりぴりしてるって方が正解かもな。」

「そお。じゃあ武器も今までのようにはいかないわね。

エリウッド様達に防具の新調をそして武器とかもね。

あなたの情報が鍵を握ってるわ。頼むわよ。マシュー」

「おう。」

サラの言葉にマシューはやる気満々だ。

『まだ、城内にはかなりの数、ラウス兵が残っているようだな』
エリウッドは門をくぐってそう呟く。

『キアランの兵はどうしてる？』

ヘクトルの問いかけにマシユーが答える。

「牢にまとめて突っ込まれてる」

「でも、キアランの兵は先の奇襲で怪我をしてるものもいるはずで
す」

戦いに参加させるのは危険だと…

サラの意見にエリウッドは頷いた。

『もちろんだ。キアラン兵で負傷したものは？』

「特にいなかったと思うけど…」

こつちも情報収集で忙しくてそこまでは…

マシユーに非はない。

『とりあえず、玉座を目指せばいいんだろ？』

ヘクトルの言葉にリンは頷いた。

『おじい様…待ってて…必ず助けるから』

リンの言葉にサラはリンの肩に手を頷いた。

配置からすれば、マシユーを先頭にしていくのがベストだ。
城の内部を知っているリンをいれて二手に分かれればそれだけ効率
を上げられる。

『サラ殿。』

声を掛けてきたのはエリウッドだった。

『つかまっているキアラン兵は相当疲労しているはず…』

なるべく戦わせず、我々の手で守りたいのです。』
すみません。

そういうエリウッドに苦笑いを浮かべるサラ。

「分かっております。エリウッド殿。」

そういうとエリウッドは先ほどよりも鋭い目つきで城内に視線をやった。

『余計に難しい戦いになる事は承知してますが…』

その分、僕が出来る限り頑張ってみます』

そういうと自らの武器であるレイピアを握り締めた。

「大丈夫ですよ。エリウッド殿」

『サラさん？』

「あなたはお一人ではありません。

そして、私も…」

あなた一人が責任を負う必要はないのです。

私の力、今試されるとき…だと思いますよ。」

そういつてサラは笑顔を向けた。

自分の軍師としての力を見てくれ・・・

そうサラは言ったのだ。

そして彼女はいつも、それを実行に移してきた。

どんなに困難な状況でも。

それを忘れたわけじゃないのに…

『そうですね、僕は一人で何を焦っているのだろっ…』

エリウッドの言葉にサラはクスッと笑い、ローブを肩に掛けた。

「此度の戦では私も出陣します。」

許可願えますか？」

『…リン殿が驚かれますよ？』

「腕の上がったところ…見せてあげなくては。士気が高まるでしょ？」

確かに、軍師に負けたとあつては名が廃る。それが活気になるだろう。

『では、サラ殿。指示をお願いします』

エリウツドの言葉に「任せて」というようにサラはみんなに向かって指示をだした。

「まず、正面を切り開いてもらいます。マシユー、あなたは城内の様子を逐一報告してください。」

『へいへい、軍師さんは本当に人使い荒いねえ』

そついうマシユーだが、その言葉とは違い、うれしそうである。

マシユーの腕を見込んでいるからこそその言葉。

それがなまじわかつているから。

「マシユーの護衛はケント殿、お願いします。」

『わかりました』

「それから、オズイン殿とセイイン殿は増援が現れた時の為に見張りを。」

『了解した』

『任せてくれ』

二人の言葉にサラは笑顔を浮かべる。

「では今言われたもの以外は増援部隊撃破の為に守備を固めてください。」

セーラはここで回復役お願いね。」

『任せなさい！この私に』
セーラも張り切って回復役に徹するらしい。

「途中、マリナス殿の物資が来ます。その護衛にギィとドルカス殿、そしてウィルを行かせてあります。」

戻ってきたら荷を解き、すぐにでも出発できるようにしてください」

ヘクトルがこちらの指示役に残り、それを了解と受け取った。

「ヘクトル殿。」

『なんだ？軍師さんよ』

「もし、カインという男がこちらに来たらすぐに伝令をください。」

『カイン？何モンだ、そいつ』

「私が昔雇った伝令です。マシユーのような感じです。」

つまり、隠密だと告げた。

『何を探らせてる？』

「ラウス候の件で黒い牙というやつらの事を調べてもらってます。」

推測が当たっていたらとんでもない事になりますから。

サラの真剣な表情にヘクトルは『わかった』と告げた。

城内に入ったサラ達を待ち構えていたラウスの兵。

だが、城内を熟知しているリンと頑張るといつていたエリウッドによって前半部分はほぼ制圧された。

城内にいたキアラン兵達も無事みつき、一緒に戦うという言葉にリンは丁重に断り、輸送隊のいる所まで行くように指示を出した。傷をしている者はマリナスの手により怪我を治して貰うようにと。

『あなたが、ヘクトル様ですね。オスティア候弟の』

そう声を掛けられ、振り向くと美丈夫の青年が立っていた。

『誰だ？お前…』

『この軍師をしておられるモノの知り合いでカインと申します』

そう、聞いていた青年はマシユーよりも背は高く、とても隠密には見えない。

それよりも得体の知れない何かが感じられた。

『軍師殿から話は聞いている。』

『ではそのお方は何処に？』

『今じゃ、城の中で交戦中だ。』

『…左様でございますか…』

『で、報告を聞いておくように言われたんだが…』

『はい、しかし、我が主以外に口外せぬようにお願いいたします』
そういつてカインは呟いた。

『全て、主が思う通り』
と。

たったそれだけを伝えると一礼し、踵を返しそうになる。

『ちよっと待て、それだけでいいのか？』

『はい。我が主にはそれだけで伝わると思っています』

そういうが、サラからはカインを引き止めておくようにとも言われた。

『軍師殿からの言伝だ、ここで待つようにと』

『……そうでございますか』

そういうと地面に座り込み、ただじっと城内の様子を伺っているように見えた。

その頃、サラ達は…

玉座にいたベルナルドとの対戦を強いられていた。

ミイルを使う黒魔術師はサラがライティングで倒し、他のソーシャルナイト達は仲間が撃破してくれた。

サラの読みどおり、増援部隊が来たようだが、それもヘクトル、セイン、そしてオズインの手によって片付けられていった。

もちろん、セーラの回復も大いに活躍したようだが。

『我はラウス騎士団の長ベルナルド！

バウカーを打ち破ったその力、見せてもらおう！』

そういつてかかってきたが、ジエネラルだけあってエルクの魔法が悉く失敗する。

リンやエリウツドの剣であつても容易に倒すことは出来なくて…

『これで終わりだ！フェレの小僧…』

はがねのやりをエリウツドにつきたてようとしたベルナルド。

さっきのベルナルドとの戦いで深手を負ったエリウツドは立ち上がることも出来ない。

リンに至つても動く事は出来ず、マーカス、ローエンの声が響く。

『エリウツド様…！』

『エリウツド様…！』

突き立てようとしたベルナルドは満面の笑みを浮かべてゆっくりと槍を下ろしていく。

エリウツドは『ここまでか…』と目を瞑る。

だが、エリウツドを包んだのは淡い光。

そして、槍から流れ落ちる赤い液…

『き…さ…ま…』

ベルナルドの声がかすれていく。

その後ろには刃をつきたてる冷酷な笑みを浮かべたサラの姿。

「余所見注意つてね。」

さようなら。

『我らラウスの蛮行を思えば、当然の報い…か…』

そういうとそのまま倒れこむベルナルドを見つつ、エリウッドに一度視線を遣る。

そしてプリシラにすぐさま怪我してるものの回復の指示を出した。

「エリウッド殿。大丈夫でしたか？」

『…すまない。』

力量不足だ。

そういうエリウッドにサラは笑みを浮かべた。

「今、手当てをします。もう少しがんばってください」

リンもケントに連れられ玉座に入ってくる。

『サラ…無事？』

「ええ、リンもケントさんもみんな無事ね。」

そういうとサラは早速辺りを巡回してくると玉座を後にした。

『エリウッド様…』

ローエンがエリウッドに近づく。

『ご無事で何よりです』

『マーカス…ローエン…心配を掛けた』

そういうと二人は『ご無事で何よりです』とだけ呟いた。

途中で仲間になったレイヴァンとルセアも玉座に来る頃、サラが一人の人物をつれて戻ってきた。

「カイン…」

『…こちらです、サラ様』

そういつて一行を案内したのはキアラン候ハウゼンの部屋だった。

『おじい…様…』

玉座についていた血の跡…

それに気づいていたが、皆、何も言わなかった。

だが、サラが案内した寝室にはハウゼンが横たわっており、顔色は決まっているとはいえないが生きている。

『カイン…さん、あなたが？』

『いえ、オスティアの密偵…レイラという女性が。』

リンの言葉にカインと呼ばれていた彼が答える。

「容態は？」

『一命は取りとめました。』

その言葉にリンは座り込む。

『ああ！父なる空よ 母なる大地よ！

あなた方の慈悲に感謝します！！』

リンの涙にサラはそっと肩を抱いた。

『主…』

「…リン、ハウゼン殿を見てきたら？」

『…そうするわ』

ケント、セインもそれについていく。

三人が寝室に消えた後、ヘクトルが入ってきた。
どうやらレイラという女性の事を話すと自分の所の密偵の一人だ
という。

『で、あいつは何を調べてると?』

『目的は多少違いましたが、フエレ候の行方だと申しておりました』

『父を?』

『はい、私はサラ様の指示で動いておりましたので、その時に逢
いました』

「結論を…」

カイン。

その言葉にカインは語った。

フエレ候は生きています。

『! ?』

やったな! エリウッド』

その言葉にヘクトルが隣にいたエリウッドを見る。

「よかったですね。エリウッド殿」

『本当…なのか! ?』

『確かです。黒い牙の一員を締め上げ、吐かせましたので』

『黒い牙…エリックが言っていた暗殺集団の事だな?』

エリウッドの言葉にカインは言った。

その存在自体は以前より確認されていたのだと。

ヘクトルが『詳しく説明してくれ』と呟いて、それをカインは了承
した。

黒い牙はブレンダン・リーダスという男が作り出した暗殺集団でその活動はベルンを本拠地として10年以上も前から始まり、次第に各国へと広がったという事。

その思想は弱者を食い物にする貴族だけを狙うというものだったので、民衆からは義賊と目され、活動への支持は高かったらしい。

『義賊…なあ』

ヘクトルが呟く。

しかし、一年ほど前、ブレンダンが後妻を迎えた事をきっかけに、その活動は少しずつ変わってきたらしい。

金を払えば、どんなに難しいとされる暗殺もやってのけるが、その対象は悪人だけに限らず無差別なものへと…

『おじい様をあんな目にあわせたのもその黒い牙の連中なのね』
戻ってきたらしいリンがそう呟く。

『おそろく。』

後妻の影にはネルガという謎の男がいることがわかってます。

黒い牙は今、ネルガルの指示により、リキアで暗躍しているようです。

ネルガルの腹心の部下であるエフィデルはラウス候をそそのかし、オスティアへの反乱を企てさせました。

ラウス候の呼びかけにます動いたのが…サントルス侯爵でした。』

『ヘルマン様：どうしてそんな事を…』

エリウツドの問いにカインは首を横に振った。

カインの話は続く。

『そして次がフェレ侯爵エルバート様』

『！？』

やはり…父上は反乱に賛同したというのか？』

エリウツドの言葉にカインは首をかしげる。

『そこまでの情報はありませんが、ですが、今、ラウス候達と共にいらっしゃる事は確かなようです』

皆さんも知ってる場所に…

『竜の門と呼ばれる場所に…』

カインの言葉にサラがため息を吐いた。

竜の門…

あそこがやはり決戦の舞台になるのか…と。

だが、エリウツド達は首をかしげている。

『竜の門？』

どこなんだそれは？』

エリウツドの言葉にカインは説明を始めた。

『リキアの南の海に浮かぶ島、ヴァロールと呼ばれる島に存在します。』

ヴァロール島：一度足を踏み入れたら二度と戻れない魔の島

そこに足を踏み入れる・・・すなわち…

だが、エリウッドはもちろん、他の者もついていくとはつきり告げた。

エリウッドがリンのことを心配していたが、そこはサラがきっちりしていた。

「一応、キアラン候ハウゼン様は亡くなったことにして、カインに面倒見させるわ。」

『…かしこまりました』

カインはサラの言葉に二つ返事で頷いた。

『でも…』

渋るリンにサラは笑顔を浮かべる。

「大丈夫。こう見えてもカインはそこの騎士より強いわ。それに、彼は密偵っていう肩書きを使っただけで、

一応、私の剣の師匠のお孫さんなの。

もちろん、職業はロードナイト。」

ロードナイト…それは剣の道を究めたものだけがなれる職業。

『あなたは…一体…』

どうしてサラの密偵なんて？

リンがそういうとカインは苦笑いを浮かべる。

『サラ様にはご恩がございまして…』

「カイン…それ以上は」
いうな。

サラの無言の圧力にカインは苦笑いを浮かべた。

次の行き先が竜の門…

すなわち、ヴァロール島だというのを知らされた他の面々は戸惑いを隠せなかった。

魔の島…

その呼び名はみんな知っていたから。

その日の夜、キアラン候、ハウゼン死去の噂はたちまち広げられた。

そして、キアラン城では、城奪還の喜びに包まれていた。

一夜をキアラン城で過ごすことになった一同はそれぞれの夜を迎えていた。

『サラ様…』

「カイン…」

城の中庭に座って空を見上げていたサラにカインが声を掛けたのだ。

『いかなさいました?』

「…少し想いだしていたのよ…」

『ヴァロール島の事ですか?』

想いだしていた…

そうサラは言ったが、カインにはそうは思えなかった。

「あそこが最終決戦の地なんてね。皮肉な話ね」

「…奴らの目的はあなたのご推察の通りでした。」

「そお。」

『どうなさいますか？これから…』

「どうもこうもないわ。あいつらの目的を叩き潰すだけ。」

昔のように人竜戦争なんて起こさせるわけには行かない…それだけよ」

サラの手が剣の柄にかかる。

『私も出来たら参加したい所ですが、ベルンの動きも気になります。他の密偵とも連絡を取らねばなりません。』

ですから…

そう続けて、カインはサラに視線をやった。

『この島での事はお任せください。』

私の力の及ぶ限り…必ず。』

「頼りにしてるわ、エルトリアの候弟様」

そついわれて、カインは小さく『はい』と呟いた。

そして、朝、カインやキアランの兵士達に見送られて、エリウッド達は港町へと向けて出発した。

謎の行方（後書き）

レイラの代わりにカインという青年が出てきます。
彼は一体何者なのか・・・
というか、言ってますけどね。

16 章外伝港町バトン（前書き）

魔の島ヴァロールへ渡る船を捜すため、港町に立ち寄ったエリウツド達。

そこで彼らが遭遇するものは？

16 章外伝港町バトン

カインの報告を受け、エリウッド達は『魔の島』と呼ばれる島、ヴァロール島へ渡る事にした。
リキアのちょうど真南に位置するその小島に『竜の門』はあるという。

島に渡る船を探すため、一行はキアラン南端にある港町バトンへと向かう。

「ねえ、サラ…」

久しぶりね、元気だった？

「ええ。リンも相変わらずみたいね。」

ケントさん達も相変わらずみたいだし…

「ええ、相変わらずよ。」

でもサラに逢えてよかった。

うれしそうに笑うリンに近くにいたフロリーナも微笑む。

「私も逢えてうれしい」

「私もよ、フロリーナ。」

だいぶ強くなったわね。

「リン…じゃなかった、リンディス様のために強くなっちゃった。」

「リンでいいわよ、フロリーナ」

って言っても直してくれないんだけど…

そっいつて呆れ顔でため息をつくリンにサラは一年前を思い出した。
そういえば、こうやって軍団率いてキアランまで旅をしたと。

「だからよお！ヴァロールに渡る船を出してくれて！」

『魔の島へ渡ろうなんて、お前さんたち、正気か？』

村人であろう人とヘクトル達の会話が聞こえる。

きっと、いや、あの島へ渡ろうなんて人はいないだろう。

そう、行ける方法ならある、だが人が来るような場所じゃ…

『無駄じゃ、無駄』

あの島へ船を出すなんて者この町にはおりやせん。

「私達、すごく急いでるんです。お願いですから、船を」

見かねたリンが村人に頼み込む。

だが、村人も首を縦に振ろうとはしない。

「あなたが駄目なら他の船を紹介していただくだけでもいいんです。

」

お願いします。

エリウッドがそういうが、村人は『よほどの事情がおありのようだが…』と言葉を続けたが、それ以後…

言葉をつむぐのをやめてしまった。

「そうですか、わかりました」

もうここで話していても無駄だと思ったのか、リンがエリウッドの手を引いてこちらに向かってくる。

「サラ、ここ無理みたい」

どうしたらいい？

「…方法がないわけじゃないのよ」

ただ…

サラの言葉にヘクトル、そしてエリウッド、リン共に目を見開いた。

「軍師殿：それを先に言ってくれねえか？」

俺達無駄足ふんだじゃないか。

ヘクトルがふてくされたような顔をする。

「でも、方法が方法なんで、あまり使いたくはないんですよ」

ましてや、オスティア候弟、キアラン公女、そしてエリウッド殿の

ような貴族の方が会うような人じゃ……

「……こういうときだ、手段を選んでいられない」

「それに、リンは特に気に入らないでしょ？」

「…………サラ……」

「山賊と同じようなものだもの、海か山かの差だし……」
ね。

サラの言葉にエリウッドは考えるような仕草を繰り返し、リンディスを見つめた。

「……でも方法がないなら仕方ないわ。」

私も手段を選んでいる場合じゃないから。

リンの言葉にサラは目を閉じてからすぐに視線を上上げた。

「おじさん、海賊のいる酒場は何処かしら？」

『海賊に会うつもりなのかい？』

「ええ、場所を教えてもらえる？」

『……村の中心部にあるところじゃ』

行けばすぐに分かる。

「ありがとう。」

礼をいうとすぐにその場から立ち去る。

おじさんの言うとおり、すぐに酒場は分かった。

中に入ると、柄の悪い男が数人、そこらへんで酒をかつくらっている。

その中にいて、頭と思しめき男がカウンターで酒をがぶ飲みしていた。

そこに近づくサラ。

「あなたが海賊の頭？」

『お前達か？オレに逢いたっていった餓鬼共は』

その男は酒の匂いをさせながらも品格のあるしゃべり方をしていた。
「あなたが海賊団の船長殿ですか？」

エリウツドの言葉に大きく笑う海賊。

『ガツハツハ……!!” 船長殿” いかした呼び方だな。』

ぼうず、おまえはよほどの世間知らずか？

それとも馬鹿か？

どっちだ？

大笑いを続ける船長にサラはため息を一つ吐いた。

「そこまでにしてもらいましょ……私達は話をしに来たんです」
サラがロープを取り、船長の隣に腰掛けた。
すると、船長の目が驚きに見開かれる。

『あ……あんた!』

「お久しぶりです、ファーガス船長」

『……その呼び名も懐かしいなあ』

2〜3年ぶりか。

「ええ、2年ぶりですね。」

申し訳ありませんが、昔話をしている暇がありません。
率直に申します。

「魔の島への船、出していただけますか？」

『……サラさんよお、俺らも死に行くわけにはいかねえんだ』

あんたの知り合いでも聞けねえ相談もある。

ファーガスは苦い顔をした。

「ではどうしたら出してくださる？」

『……こいつらの実力試させてもらおう。』

俺の手下以下ならのせるわけには行かない。

「だそうですよ、エリウッド殿」

「どうなさいますか？」

「…具体的にどうすればいいんですか？」

『オレは港で船を動かす準備をしてる。その間あんた達はこの町を使つてオレの手下共と相手をする。』

で、その手下どもを蹴散らし、俺のところまで無事つけたならあんたらを乗せようじゃねえか』

どーだ？

ファীগスの言葉にヘクトルはやる気満々。

「その勝負、受けた」

「ヘクトル！！」

エリウッドの静止も聞かず、話を進めるヘクトル。

『んじゃ、待つてるぜ』

野郎共。

一声掛ければそこにいた海賊全員が外に出た。

ファীগス達の話聞いていたのだろう。

すぐに外に出て戦闘態勢を整えるつもりだ。

「サラ殿…あの方とはいつ？」

2、3年前と聞きましたが…

「一度だけ、船に乗船させていただきました。」

「その時はどうやって？」

「もちろん、勝負しましたが？」

それが何か？

何のことはないといった様子でつづられる言葉に一同啞然。

酒場を出ると一斉に襲ってくる海賊達。

「さあ、私も出ますかね。」

サラはローブを輸送隊として控えている所に預け、戦闘に参加して

いく。

次々に敵をなぎ倒し、ある民家でカナスという学者を仲間に加えた。闇魔法の使い手として名高い彼。

ルセアとは反対の力を持つ彼とはどうしても同じ位置では配置できないようだ。

「あらかた片付けましたね。それにしても…なんでこんなに弱いのかしら？」

ものの数十分で駆け抜けた一行。

港につくやいなや、ファーガスはあごを外しかねないほどの驚きようでがっくりとうなだれていた。

『あんた、手加減って言葉しらねえのかい？』

オレの子分達…死んじまったらどーしてくれる！！

「ちゃんと気絶させるぐらいにしてあるから大丈夫よ。」

そんなに心配しなくても…

生きてるわ。

『そーいう問題じゃないだろおが。』

「じゃあ、私と一対一で勝負してみる？」

『…やめとくわ』

オレはあの二の舞にはなりたくねえ。

「懸命な判断ね。」

『ああ…』

何があつたのかは聞けない雰囲気だが、どうやら船には乗れるようで安心した。

『出航は明日だ、遅れんじゃねえぞ』

ファーガスはそれだけ言う手下全員を引き上げさせてしまった。

「サラ殿…感謝いたします」

エリウツドの言葉にサラは苦笑いを浮かべた。

「私はあなたの役に立てるならそれでいいのです」

リンを…私の親友を助けてくれた事のお礼です。

「サラ…」

リンはサラを見て苦笑。

「…とにかく、船は確保したんだもの、あとは…」

「あと？」

エリウッドが首を傾げれば輸送隊の中に預けておく武器などの在庫確認やら何やらをするとすぐに踵を返してしまった。

「……………」

「どーしたよ？」

リンが踵を返したサラを見て首をかしげた。

それをすかさずヘクトルが問う。

「…サラ…何かあったのかな？」

「…なぜ、そう思うのです？」

エリウッドの問いにリンは首を振る。

だが、一つだけ言えること。

「なんとなくサラの様子がおかしいの」

最初に会ったとき、あんなふうに戻りに境界線を引いていて、壁を作ってるような感じだったのだと。

それが一年で戻ってしまったように感じた。

「…エリウッド…何か気づいたことはない？」

私と別れてから…サラと共にしていて…

「…そういえば、キアラン候と何か話していたと…」

マーカスが…

「おじい様と？」

「詳しくは…マーカスに聞いたほうが…」

視界に入ったマーカス呼び寄せたエリウッド。

マーカスから聞いたがサラはキアラン候と何かを話していたらしい。

だが、近くを通っただけのマーカスはあまり話の内容を聞いていないらしい。

「どんな様子だった？」

「…そうですね、軍師殿のあんな表情は見たことがありません」

「…何を話してたのかしら…」

「ただ…」

「ただ？」

マーカスは言葉を一度止め、何かを思い出すように目を細めた。

「黒い牙の話をした時のサラ殿の表情が少しだけこわばったような…」

気がしましたが。

思い過ぎだと思えます。

「…そういえば…」

リンも何か思い当たる所があるらしい。

「…何か思い当たる節があるのか？」

「…でもわからないわ」

サラが何を考えてるのか…

”サラ…あなた…何を抱えてるの？”

リンは別の所で動いているであろう友を思う。

リンたちの心配をよそにサラは着々と準備を整えていった。

黒い牙と戦うために…

それにエリウッド達を巻き込まないために…

”二度と失う事なんてしないために…”

16章外伝港町バトン（後書き）

いよいよ動き出しましたね・・・

そして、海賊船の船長が出てきます。
さあ、どーなるでえしょうか？

ファーガス船長の船（前書き）

湊町バトンでひょんなことからあつたファーガスの船に乗せてもらうことになったエリウッドたち。

だが、海の上でも休息という文字は彼らにはないよう。

ファーガス船長の船

ファーガスの船は順調に航路を刻んでいく…

青い水平線の彼方に、やがて霧に包まれた島が見えてきた。

あの島に、父たちがいる《竜の門》がある。

島が近づく頃、エリウッドは父が反乱に与したかどうかよりもただ、その無事を祈るだけになっていた。

エリウッドは一人、船の先端で島を見ていた。

”父上…どうか無事で…”

ただ、それだけを思って島を見つめていた。

『よう、ボウズ！船酔いとかしてねえか？』

近づいてきたのはこの船の船長、ファーガス。

エリウッドは振り向き、「ファーガスさん」と声を掛けた。

「大丈夫です、それより立派な船ですね」

エリウッドの言葉に気分がよいのか、ファーガスは大いに笑う。

『海賊船にしちゃあな。』

「一つ伺っていいですか？」

『なんだ？』

「どうして僕らをこの船に乗せてくださったんですか？」

港町で、ヴァロール島に行きたいと言ったら気が変なのかと疑われました。」

『だろうなあ。なんせ《魔の島》だ。』

俺達も、よほどの事情がなきゃいきたくねーな。』

それにあんた達を乗せなきゃあの人が怒るからな。

フアーガスはそういつてエリウツドを見る。

「そういえば、サラさんとはお知り合いだと伺いましたが」

『ああ、あの人に俺達は借りがあつてな。』

「借り…ですか？」

『ああ』

「でも、船も出してくれてお金も要らないって…サラさんは何を？」

『あの人には一生かかっても返しきれない恩がある。』

あの子の頼みは何があつても答えなきゃならねえ。それにな、俺らもあのヴァロール島には因縁があるんでな。』

しかもあの子が頼みに来たんだ、生還してもらわなきゃならないしな。

そついうフアーガスの表情は何かを思い出しているような顔つきで懐かしいような顔だった。

「ご期待にはそえると思います。」

僕らは必ず生きて戻ります」

『ああ、それにお前達についてる軍師殿は策略に長けてるんだろ？』

「ええ。かなり…僕らはサラさんの策を信じてますから」

『なら、この付近の海で待つてやるぞ。』

大陸に戻る時にはのろしをあげる。

すぐに迎えにきてやろう』

「ありがとうございます。」

『それにな、ボウス…』

あの方はお前らが思つてゐる以上に強いぞ。

「…それはどういう意味ですか？」

《お頭！十時の方向に小船が漂つてますぜ！

中には人が乗つてゐるみてえだ。どうしやす？》

『軍師さんはなんていつてた？』

《へえ、引き上げると。》

『ならそうしろ。』

《へい！》

クルーの返事を聞いたファーガスはエリウッドに流されてきた者はヴァロールから来たに違いないと告げた。

『そういやあ、あの人も…』

「え？」

『いや、俺はちょっと見てくるからよ、軍師殿に跡で顔出すように言ってくれ』

気になる事があるんだ。

「あ、はい」

エリウッドはファーガスと別れると仲間達が待っているところへと足を進めた。

「エリウッド、ファーガスのおっさんとの話は済んだのか？」

そこにいたのはヘクトルだった。

「知ってたのか」

「まあな、それでなんか分かったか？」

「信頼できる方だよ、僕達についてた。」

「ふーん。ま、お前がそういうなら間違いないだろ」

「それに、サラさんに借りがあるんだって」

「借り？軍師殿にか？」

「ああ、返しても返しきれないものだって
そういつてた。

「…へえ」

「そういえば、サラさんはどこかな？」

ファーガスさんが着て欲しいって。

「軍師殿なら…」

リンのところに…

そういったヘクトルの声をさえぎってリンが来た。

「来て、二人とも…舟が引き上げられたわ」

今、乗ってる子も引き上げられ…

「え？」

リンはその子に見覚えがあつて…

「サラー!!」

「ニニアン!!」

サラが呟き、身体をゆする。

「ニニアン…しっかりして、ニニアン。」

リンが呟く。

エリウッドがヘクトルに説明する。

彼女はキアラン抗争の際、エリウッドがリン達と出会ったきっかけになった少女だった。

そして、彼女も軍師見習いであつたサラと顔見知りで、あの後サラと同じで旅立っていったのだとリンはいつた。

「ニニアン…私よ、分かる？」

「…あ…」

サラがそう問いかけると瞳を薄く開け、辺りを見回す。

「ニニアン、気がついた？」

「…？」

リンの問いかけにニニアンは首をかしげた。

「…？…あの…私…」

「大丈夫？どうして小船なんて乗ってたの？」

ニルスはいっしょじゃないの？」

「あ…あ…」

サラのほうに手を伸ばすニニアン。

サラはしっかり手を握ると笑顔を浮かべた。

「リンデイス、彼女、様子が…」

「サラ……」

「……大丈夫よ、少しお休み……」

「……ありがと。」

少しぐったりと倒れこんだニニアンをサラは横抱きにして船室に連れて行く。

その頃、クルーの一人が舟の異変を伝える。

どうやらニニアンを追ってきた奴らがいるらしい。

舟は浸水に見舞われ、ファーガス達はそちらにかかりつきり。

サラを呼び、代わりにフロリーナがニニアンの傍についた。

「サラ……」

「大丈夫よ。ニニアンは眠っただけだわ」

外傷はないし。

サラの言葉にほっとする一同。

「サラ、指示を頂戴」

ニニアンを攫った奴らだったら許さないわ。

リンの言葉にサラは頷いた。

「この舟は今、三方から攻撃を受けてるわ。

だからその三方向を防ぎます。

右手二つをケントさん、セインさん、そして左手をマーカス殿に。

それぞれマーカス殿にはカナス殿を。ケントさんにはルセア、セインさんにはエルク殿を。

そして配置図を教えられ、戦闘態勢に入る。

「ゾルダムというのが敵将です。敵将には私が当たります。」

何があるのか、聞きだします。生きて捕らえてください。

サラの言葉に誰も二言はなかった。

左側の敵をやつつければ増援として右側からまたシャーマンが現れる。

「……ルセアだけでは持ちきれないわね。サラは何処？」

「…軍師さんはなんでも使えんだな」

「え？」

左手、ルセアが後退、そしてサラが正面に立って戦ってる。

そして、最後の砦…ゾルダム…

《ほお、伏兵も恐れず乗り込んでくるとは…

戦を知らぬのか？

それとも…》

「もちろん、兵法を知り、歴史を知り、あんだ達をやっつけるためにいるのよ」

サラの言葉にゾルダムは苦い顔をした。

奴が使うのはルナという古代魔法の一種だ。

だが、所詮闇は光に勝てない。

「消え去りなさい…」

聞いた事のない真言を唱えるサラ。

一瞬のうちに光の渦に巻き込まれるゾルダム。

《…これほどまでの…力…伝えなければ…

このことを…必ず…》

「伝えるといいわ。その代わり、その身をもつてね。」

なきがらが消えたあと、ファーガス達が来たがすべては終わった後だった。

ニニアンは記憶を失い、そしてニニアンを狙った連中が黒い牙だと

リンはエリウッド達を説得し、一緒に魔の島へと降り立った。

「サラ…」

そして降り立ったサラの表情が厳しさを増す。

リンの問いかけに何も答えず、ファーガスに向き直るサラ。

「ありがとうございます」

『あんななりの答えなんだろう？』

「…はい。」

『俺達はあるに借りがある。でっけえ借りが。それを返すまではあんた達を信じてるよ』
きいっけなよ。

「ご忠告感謝します」

『何か俺達にできる事はねえか？』

「ならば、もし港に戻ってシオンという者が着たらこちらにいと伝えてください」

『それでいいのか？』

「はい。」

『わかった。あんたの名前を出せば分かるんだな？』

「ええ、分かるでしょう。そして場所を言わなくてもきつと……」
サラの目に戸惑いが見える。

『あんたの頼みだ引き受けよう』
それじゃな。

「船長、お気をつけて」

『あんたもな』

ファーガス船長の船（後書き）

サラさんはどんな男とも知り合いなんですね。
まったく、どれだけ知り合いいるんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5646e/>

ファイアーエンブレム烈火の剣

2010年10月10日06時19分発行